

を受けずして日本の基地へ歸り得るだけの有能なる航海力を持つてゐる。このため主力艦隊はあまり速力が出せず、その行動半徑を短縮せねばならなくなるであらう。この潜水艦に對抗すべき米國のそれは、數に於ても少ないし、且つ斯様な長距離行動に用ひ得るものは殆んど無いと云つてよい。

### 空襲不可能に近し

一方米國が日本本土を空襲することを考へるとき、之れまた仲々困難な仕事である。日本の持つ多數の潜水艦と空軍とが、アメリカの空襲を阻止する上に大きな働らきをなすであらう。航空母艦が殊に脆弱性の多い點も考慮しなければならぬ。

結局、アメリカが極東に對して門戸開放主義を主張してそれを迫るなれば、今日までの建艦計畫では駄目である。どうしても米國はワシントン條約量以上の強力なる海軍を持ち、同時に西太平洋の海軍基地を即刻増強する必要に迫られてゐるものである。」

以上は要點を摘記したものであるが、流石にバイウオーターだけの觀察眼を持つてゐると思はれる節が見られる。

### — エリオット少佐に聞く —

#### アリユーション群島の價値

てゐる。

「アリユーション群島（アラスカから千島に迫る列島）は日本に對して米國を防禦し、日本艦隊が米國に接近する最短線を、その側面より脅かすものである。然しながら、こゝをアメリカが攻撃用根據地として用ひることは全然無價値である。この線に沿つて我等が如何に進んでみても日本に遠距離封鎖を行ふことは困難であり、假りに千島の一部を占領してこゝより日本に爆撃を加へてみたに似たところで、何等日本を直接壓迫することは出来ない。」

#### 日本進撃當然の順路

この意味よりして、攻守共に最も地の利を得てゐるのはハワイである。ハワイより日本を攻撃する場合、日本委任統治諸島を通つてグワムへ進むことが當然の順路である。グワムは日本の横濱から千三百哩、マニラから千五百哩のところにある。こゝを根據地としてアメリカの巡洋艦が支那海に行動すれば、日本の海外貿易は

「我等の守る城塞」を著はして、その軍事通たる眞價を認められたエリオット少佐は同書第八章に於て次の通り説いてゐる。

甚大な打撃を蒙り、完全なる遠距離封鎖を行ひ得るのであるが、このためには米國艦隊の東へ進むに従つてその交通線が延びる。従つて莫大なる軍需品の輸送と、前進根據地の設置に萬全を期することが必要である。更に千餘を數へる日本の南洋諸島が、凡て天然の海軍並に空軍の基地となり得る珊瑚礁であるために、米艦隊の前進は相當の困難を豫想される。若しこれに先立つて、グワム島が日本軍の占領するところとなつたならば、おそらく之を奪回するには一二年の時日を要するものと思はなければならない。

### 若し日軍來襲せば

若し、立場を異にして日本軍が米國を攻めるとしたら如何なる戦法を採るであらうか。グワムやフィリッピンの攻略はそれ程困難ではなからうが、それから先が大變である。ハワイの占領を企圖するとすれば、米國の兩洋艦隊が合併しない前に遂行しなければならぬ。しかし米國の大西洋艦隊がハワイへ集結するには三週間で足りるから、その前に日本艦隊がハワイを攻略し得るかどうかは甚だ疑はしい。

若しバナマを衝かんとしても、バナマ横濱間は八千哩を距てゝゐるから、この距離は容易に征服出来ないものである。アリューシャン列島を狙ふとしても、ダッチハーバー、ハワイ間は二千

哩であるから、今度はこの近距離が物を云ふことにならう。たとへダッチハーバーを奪はれても尙ほ我にハワイあり、ビューゼット・サウンドがある限り、大して脅威とはなり得ない。更に日本が米國の海岸都市の一つ二つを急襲して見たところで、それは大局を決するわけには行かないのである。

以上は一昨年發表されたものであるが、一九四〇年十月に至ると、日米海軍力その他に相當の變化が生じて來て居り、世界情勢も大いに變つて來てゐる。これに就て米國で發行されてゐる「タイム」誌は、次のやうな見解を述べてゐる。

### ——タイム誌の所論——

### 早い者の勝

「日本と戦争するなれば早い方が有利である。若しドイツの對英作戦が成功するなれば、間もなく我々の強敵が大西洋上にその姿を現はすであらうから、その前に日本を叩いておくべきである。更に今一つの理由は、今日米國は日本に比してその海軍力に於て一五%だけ優勢であるが、専門家の意見では二三年の中にこの差は著しく縮められる可能性が充二分にある。米國の建艦は極めて最近始まつたばかりであるが、日本の

それは既に相當以前から、而も大規模に行はれてゐる。而も米國の建艦は一九四三年にならないと、一應纏つた形をとつて來ないのである。

### 日米戦を避けて來た理由

米國が今日まで、力めて日本との戦争を避けて來た理由の一つは、太平洋上に安心して艦隊を入れ得る適當な基地が無かつたといふことである。即ち米國にとつて海軍基地といふべきものは、僅かにハワイの眞珠港あるのみ、他は航空機か輕艦艇の寄港地に過ぎず、マニラのキヤビテ軍港と雖も主力艦の基地とするには尙多くの不備を持つてゐる。この理由のために米國は日本との開戦を久しく危惧してゐたのであるが、本年となつて、それらの事情は一變して來たのである。

### 日本若し蘭印を衝かば

と云ふのは、日本の今日の作戦が、從來のそれと變つた方向を取つて來たからである。日本は蘭領印度を最初に攻撃せんとしてゐる。その關係上、戦争の舞臺が變化して來たのである。日米の基地から蘭印までの距離は略々同一であり、そこにはオランダ、イギリスの同盟軍があるばかりでなく、シンガポールといふ第一流海軍基地、スラバヤ、アンボイナの二流根據地、更に濠洲のポート・ダーウインも米國は使

用することが出来る。

日本海軍は南進してボルネオを占領し、先づ石油の獲得を狙ふであらうが、ボルネオ臺灣の距離千五百哩、その側面にはキヤビテ、香港の二つの海軍基地があるから、日本海軍の輸送路は決して安心とは云へなう。

極東にある米、英、蘭の艦隊だけでは勿論日本の全海軍を相手取ることは困難であるが、シンガポールを基地とする英の二巡洋艦、二十六隻の潜水艦、ビルマから來援し得る相當数の空軍、オランダの基地にある五隻の巡洋艦、八隻の驅逐艦、十八隻の潜水艦、約百機の長距離爆撃機が加はる。アメリカの極東攻撃は、二隻の巡洋艦、十三隻の驅逐艦、十二隻の潜水艦外に哨戒爆撃の航空機がある。之等の勢力を以てすれば、日本の輸送線を相當悩まし得る自信があるから、日本はこれがために可なりの海軍力を護衛として割かねばならないであらう。

### 日本のもう一つの攻撃方法

日本のもう一つの攻撃方法は、その委任統治領を基地として、そこから空軍により、この側面の敵基地を一々叩きつぶす方法である。しかし一萬二千の精銳が守る香港は可なり手強いであらうし、その他と雖も易

易と陥落はすまい。シンガポールへの連絡線の遮断、ボルネオへの上陸、更にキヤビテ軍港の占領と、日本は實に多忙を極める。

かくて西南太平洋に激戦展開されると見るや、ハワイの主力艦隊は、愈々日本攻略のためその歴史的壯圖に上るのである」

之等の外にも、まだ多数の作戦論が出てはゐるが、大體この三つの所論が、日本に對するアメリカ海軍の三つの態度を率直に現はしてゐるものと見てよい。殊にタイム誌の説くところは、問題が最も新しいだけに、我々の注意を促すものを多分に持つてゐる。

そこで今度は、我々の側から、米國と戦ふ場合の種々相を見なければならぬ。本問題は愈々これからである。

### 米國の渡洋作戰成るか

#### 戦争はみづもの

餘りにも廣漠たる太平洋である。道は八方に通じ、雲烟は萬里の間に連なつてゐる。この厖洋たる太平洋を距て、日米相闘はんとする時、そこ

に如何なる形態の戦争が展開されるであらうか。細かくこれを觀察せんとするとき、餘りの多岐と多様とに、その緒口を見失はんとする。

しかし戰略は所詮人間の頭腦から生れるものである。人間の頭から生れるものである限り、そう奇想天外、摩訶不思議な戰術がザラにある筈のものでもない。日米戦争に於ても、彼我の採らんとする戰法には自ら推定と豫測の範圍が與へられてゐる。たと戦争は水物であり、その場に臨んで應變の術は生れて来る。一面の基盤上で烏鷲を戦はすに當つても、臨機應變、當意即妙、未だ嘗て始めから終りまで、同じ手を打つ者のないことを見ても明らかな眞理である。

日米戦は原則として海軍戰であることは既に述べた。この海軍戰は更にまた原則としてアメリカの攻撃から火蓋が切られるのである。その海軍の性格から云つて、アメリカ艦隊が終始一貫攻勢的であり、その攻勢的である状態を完全にするために、兩洋艦隊の完成を急いでゐることも述べたが、正にその通り太平洋戦争に於ては、攻めるものはアメリカであり、これを邀撃せんとするものは日本である。勿論その間日本が攻勢を採る場合も屢々あるし、無ければならないが、原則としてアメリカが日本を攻めることから、日米戦争は始まるものと心得てゐて間違ひないので

ある。

### 日本に迫る三本の槍

海戦の勝敗は、敵の主力を叩き潰すか否かに掛つてゐる。敵の主力を叩くためには、我が主力の全部を以て當るのが通則である。殊に日米兩國のやうに、相互に強い海軍力を持つ場合は、主力と主力との間に決戦が行はれない限り少くとも兵力上の勝敗は永久につかないものと思はなければならぬ。

そこで、アメリカ艦隊は、日本の主力を撃滅するためには、どうしてもハワイの根據地に集結した全太平洋艦隊を提げて、日本の近海に殺到しなければならぬ。我が艦隊は矢張り原則として常に我が近海にあつて、敵艦隊に對し攻勢防禦の態勢を執つてゐる筈であるから、この主力艦隊を求めて米國艦隊は、文字通り懸軍萬里の大渡洋作戦に出でなければならぬのである。

此場合米國艦隊は如何なる進攻路を取るであらうか。それには確實な三つの道が豫想される。蟻には蟻の道があり、空飛ぶ鳥にさへ帰へ歸るには定まつた幾つかの道がある。況んや米艦隊の目標が、日本と云ふハッキリしたものである限り、太平洋如何に廣しと雖も、そこに當然推定される航路がなければならぬ。殊に日本の主力艦を一舉に撃滅せんとする程の大艦隊を差し向け

るには、八百八島の松島の間を、ボートで身輕に漕ぎ抜けるやうなわけにはゆかないのが當然である。日本に迫る三本の槍、それは大體左のやうなものである。

### 霧深き北方航路

大艦隊の行動は、それを出来る限り敵の監視眼から晦ますと共に、又出来る限り迅速に敵の據點に近付くにある。その場合、艦隊の速力よりも、距離の短かいことの方がより好都合である。だとすると、この條件に叶ふものは、所謂大圏航路を以て第一とする。

ダツチハーバーを出た艦隊と、ハワイの眞珠灣を出た艦隊とが、アリューシャン群島沖の何處かで勢揃ひをして、堂々たる陣容を整へた上、カムチャツカ沖をかすめて一擧わが千島より北海道の海岸に現はれんとするコースである。この大圏コースは三千三百九十八哩であつて、米國日本間の最短距離である。疾にこの航路に着眼してゐた米國は、先づリンドバーク夫妻に依つて、米國から日本への空の偵察をいち早く済ませた。妻君同伴なるが故にこの名目の下に、千島列島を飛石傳ひに着陸しながらやつて來たリンドバークは、太平洋横斷の勇士として、我が朝野の大歓迎を受けたものであつたが、彼が世界的な第五列として話題に上つてゐる今日、正に冷汗一斗

の思ひがありはしないか。

米國よりの偵察が完了すると、今度は巧みに、日本より米國への無着陸横断が、ハインドン、バングボーン等に依つて、用意周到に企てられた。世界は太平洋無着陸横断と云ふロマンチックな内容に魅せられて、軍事上の問題に付ては上の空であつた。しかし我國の然るべき人々は、この成功不成功に對して、別の見地から異常な關心を拂つてゐたのである。

斯くて霧深き北方コースは、東西よりする瀬踏みを完全に終つてゐる。メンタルテストは終つてゐるのである。

### 最も大膽な中央進攻略

第二のコースは最も大膽に、最も直線的に、ハワイより一舉に東京灣沖へ迫るコースである。これは面倒な小細工を喜ばぬアメリカ人の性格として、一番喜ばれそうな進攻略である。所謂最も大膽率直なるコースと云ふべきであらう。

この針路を撰ぶに就て、ミッドウエー島の存在は、日米双方にとり、まことに重要である。ミッドウエーはハワイより千百六十哩、我が國より二千二百四十五哩の洋上にゐる。米艦隊東進の

際には、こゝは唯一の交通中継所ともなり得るし、潜水艦並に航空母艦の基地としても申し分ない位置を占めてゐる。それだけに、米國としてはこの島を非常に大切にしてゐるのである。

その汎太平洋航空路に於ても、ミッドウエーは途中の着陸場となつてゐる。このことは尤に空軍による武器彈藥補給の可能性をも物語つてゐるものである。云はゞこの島は、日本進攻略に於ける最前線のトーチカに類するものであるから、目下巨額の金を投じて、海空軍基地としての完全な設備を急ぎつゝある。

尙このコースは、今一つの方向を考へることも出来る。それは汎太平洋航空路と同じ道を辿るものである。即ちハワイよりミッドウエーを経てウエーク島に至り、それより東進してグワムからフィリッピンのカヴィテ軍港に達し、そこを基點として、南方より日本を襲はんとするものである。これも一應は想像し得る進攻略であると思はなければならぬ。

### 懸軍萬里の南方航路

日本近海に迫るまでは、出来る限りその奇襲艦隊の襲撃から避けると共に、その艦隊の行動をも敵から隠蔽するには、所謂南方迂迴路を取る場合も想像される。この場合は、今迄の二つのコースが日本の主力艦を求めて猪突的にぶ

つつかつて行くのとは違つて、一旦その艦隊をシンガポールへ入れ、そこから日本の經濟線封鎖を企てると同時に、その主力艦隊を求めて決戦を挑まうとする目的を持つものである。

それにはハワイより、巽に述べた南方大迂迴路のコースに従ひバゴバゴまで南下し、そこから針路を東にとつて濠洲北海岸のダーウインを目ざして進むのである。大體彼等は、戦時に於ける日本海軍の行動範圍を赤道線以北と計算してゐるから、赤道より尙千裡以上も南を通れば、この目的を達することは決して困難ではないと見てゐるやうである。そのためには、更にそれより南下して濠洲の南方を通るが如き大迂迴路を撰ぶ必要はない。バゴバゴより東進してトレス海峡を突破し、ダーウインで燃料を補給した上、一氣にシンガポールへ入れればよいのである。

以上の三つが、米國主力艦隊の日本進攻路として豫想されるのであるが、さてこれが果してうまく行くかどうか、次に我々はその點にメスを加へることにしやう。

### 北方航路の難點

前述の順に従つて、大圈航路より南下し、我が北海沖へ進攻せんとする場合、アメリカ艦隊は如何なる困難を突破しなければならぬであらうか。その第一は、誰しも氣付くところの天候の妨害である。御承知の通り北太平洋の各期に於け

る濃霧と風雪と風浪とは、世界の海での有名な難物とされてゐる。咫尺を辨ぜぬ濃霧、巨艦をも木の葉の如く翻弄する風浪、機關も凍る風雪は、三百隻に餘る大艦隊の行動を想像以上に惱ますものである。先づ彼等は、若し秋から冬にかけて行動を起さねばならぬとしたら、日本の艦隊と戦ふ前に、この大自然との激しい戦闘を切り抜けて來なければならぬ。

しかし一年中の最良の氣候を撰び、且つ非常に恵まれた天候を得た場合はどうか。これはアメリカ艦隊にとつて天佑と云ふべきものであらうが、決してそうではない。彼等が絶好の天候に恵まれる日こそは、正に日本の海軍にとつても得難い天佑となる日なのである。何となれば艇々八百裡に及ぶ千島列島は、この時こそ彼等に對して充分物を云ふからである。

敵が大圈コースをとつて南下することをいち早く知つた我が海軍は、直ちに奇襲艦隊を放つて晝夜の別なく彼等を惱ますであらう。而して彼等が千島沖に現はれるまでには、必らずや若干の損害を蒙り、艦隊の均勢には鱒が入つてゐるに違ひない。全然無底で以て千島沖まで辿りつくなどのは、我が海軍の力と訓練とから見て絶對に考へられないことである。さて多少の損害を蒙りながらも漸やく彼等が、日本艦隊の行動範圍へ近付き得たとしやう。その場合、千島列島に

手具脛ひいて待機してゐた新手段の奇襲艦隊は、好餌御座んなればかり、秘術を盡して彼等に肉迫して行く。而も我が本土からは、無数の爆撃機が翼を連らねて入れ代り立ち代り猛烈な爆撃を敢行する。事ここに至つては、アメリカ艦隊の蒙るべき損害は、蓋し想ひ半ばに過ぎるものがある。

必勝の陣容と、必勝の兵力を揃へてやつて来た米艦隊も、我が主力艦に會ふ前に、甚大なる打撃を受けて、その必勝率に大きな狂ひが来るは必定である。端的に云つて、千島沖の我が奇襲戦法は、完全にアメリカ艦隊の戦意を挫折してしまふものである。つまりこのコースは云ふに易くして、行ふは殆んど不可能と斷じて憚らない。

### 中央進攻略はどうか

次はハワイよりミッドウエーを経て、直接我が東京灣沖に迫る場合はどうかであらうか。この場合は、彼等が小笠原列島を避ける限り、千島のやうに側面からの奇襲を受ける不安は比較的少ない。我が奇襲艦隊や輕艦隊の攻撃は、何れの場合と雖も免れることは出来ないが、少くとも強力な陸上爆撃機の空襲からは安全である。

しかし彼等の目的は飽くまで我が主力艦を求めて、之れと決戦するにあるのであるから、我が軍の攻撃を怖れて安全なる海上を游弋してゐると云ふことは意味をなさない。危険を覺悟の前で我が主力のゐるような場所へ姿を現はし、これを誘き出さなければならぬのである。そうなるも彼等はどうしても我が本土に接近せざるを得ないのだ。そして接近すればする程、彼等の運命は傾きかけるのである。

我が近海には、海空ともに水も洩らさぬ哨戒陣が張られてゐる。一度その哨戒線に引掛つたならば、數時間を出でずして、求める主力艦の代りに、獨得の空中艦隊と奇襲隊とが、一時に襲ひかゝつて来る。この場合、敵の航空母艦に積まれた限りある飛行機などは、我にとつて殆んど問題ではない。かくてその運命は、千島沖に現はれた時と同様、或はそれ以上の慘澹たるものとなるのである。斯くてこのコースもまた敵に取つて茨の路であると云ふより外はない。

第三のシンガポールへ一旦入港した場合のことは、別に一章を設けて説くつもりであるからここでは割愛しておいて、話を更に展開させることにしやう。



## 神經戦への不安

日本進攻の目的を以てアメリカ艦隊が堂々ハワイの真珠軍港を出発した  
なれば、アメリカ艦隊はその途端に最早嚴重な戦闘状態に入らなければ  
ならない。つまり米國艦隊は、真珠灣を出てからの數日間を、所調行軍隊形を以て比較的のんび  
りと航行することは許されないのである。彼等は最初から弓弦の如く張り切つて、警戒おさく  
怠りなき航海を續けなければならない。

何故かと云へば、彼等の針路の至るところに、その威容を世界に誇る我が潜水艦が、魚雷を撫  
して待ち構へてゐるからである。そればかりではなく、我が空軍も、その行動半径が許す限りに  
於て、斷じて漫然と彼等の前進を許しておくものではない。それに日本に近づくに従つて、夜と  
もなれば、日本海軍の最も得意とする水雷艇隊や高速魚雷艇の奇襲戦が、何時展開されるかもわ  
からないからである。斯くて米艦隊は、日本近海へ達するまでの八日乃至九日間は、晝夜の別な  
く異常な神經の緊張を持ち續けなければならないのだ。この神經戦が、如何に艦隊の士氣に影響  
し、惹いてはその戦闘能力に支障を來すものであるかは、思ひ半ばに過ぎるものがある。しかも  
この緊張と不安は、日本へ近づくに従つて益々増大される。まかり間違ふと富士川の平家の如く

水鳥の羽音にも驚くやうな精神状態へ置かれるかも知れないのである。かゝる精神状態によく勝  
を制し得るや否や、こゝにも一つの大きな疑問符が捺されてゐる。

## 我に勝ち得る兵力量

既に斯様なハンデキャップのついてゐる艦隊である限り、我が國の  
近海まで到達して、我が主力艦隊、決戦するためには、相當の兵力  
量を持つてゐなければならぬことは自明の理である。少くとも日本の近海へ來たとき、尙未だ  
我と對等の力を持つてゐなければ輸贏を決するわけには行かない。否、我と對等の力では、先づ  
米國側に勝味はないと云へるであらう。少くとも二割乃至三割の優勢を保つに非ざれば、必勝を  
期することは出来ないと思へる。而もこれは、八日か九日間で日本の近海へ達し得た場合のこと  
である。

若し我が奇襲艦隊が、敵のハワイ川港後間もなくから、執拗にこれに食ひ下つて攻撃を加へた  
り、我が空軍の行動範圍内に入つてその空襲を受けるに至つたなれば、艦隊の速度は著るしく減  
殺されざるを得ない。何分にも三百隻内外の大艦隊である。それが戦闘の單位となり、一丸の攻  
撃力を形成するためには、艦列の亂れ、統一の缺除といふことは致命的な缺陷となる。司令長

官は常に全艦隊を自分の掌中に握り、一糸亂れざる統率の下に西進して來なければならぬ。

その艦列を亂し、敵の陣容を攪亂するのが我が奇襲艦隊と空軍との役割であるから、先づその間に熾烈な戦闘が展開されるのである。敵は攪亂されまいとする。それには航空母艦及び各艦の艦載機を常に充二分に活用すると共に、我が潜水艦に對しては、驅逐艦と輕巡洋艦とを以て水も洩らさぬ警戒陣を張るに相違ない。しかし晝間はそれで大體の防禦は出來るとしても、漆黒の夜間は如何とも手の下しやうがない。晝間は我が奇襲艦隊も矛を收めて、専ら空軍の働きに任せておくであらう。が夜は彼等の手具脛引いて待つ絶好の戦機である。斯様にして敵は晝夜の別なく我が攻撃を受けるものと思はなければならぬ。

若し敵が陣容の亂れを怖れて飽くまで整然たる隊形をとるなれば、我が空軍にとつては願つてもない空爆目標となる。若し彼等がその空爆を免れんために一種の分散隊形をとれば、我が潜水艦の活動範圍は俄かに有利となる。何れにしても敵は散々に惱まされるのである。その間勿論相當の損害を蒙り、ハワイを出た時の完全なる隊形には、あちらこちらに穴が明くことになる。これを當然計算に入れなければならぬ上に、晝夜間斷なき我が攻撃のために、乗員は全部激しい

過勞に陥るは必定である。斯うしたことを計算に入れると、我が主力艦隊と決戦を試みるには、どうしても我より五割位の優勢な艦隊を編成して掛つて來なければならぬ。これは容易なことではないのである。

現在では勿論斯様な艦隊の編成など思ひもよらないし、將來に於ても疑問である。米國が大軍擴をやつてゐることは事實であり、それが完成した際には、全く侮るべからざる實力を擁することにはなるが、それまで日本が何にもせず眺めてゐるわけではない。米國の軍擴が主として日本を目標としてゐる限り、我方も亦、これに打ちひしがれないだけの用意をするのは當然である。してみれば日本と米國との勢力比は、將來に於てもそう急激に大きな開きを生ずるものとは想像されない。その開きが生れない限り、米國は何と悶躁いても對日必勝の計算を得ることは出來ないのである。

### 逸を以て勞を待つ

百歩を譲つて彼等が何等その進攻途中に於て妨害をも受けず、全艦無疵で我が沿岸に到達し得たと假定しやう。この場合と雖も、前述の神經戰が、艦隊の士氣を相當ヒステリカルにしてゐる點には少しも變化はない。さて彼等が日本近

海に姿を現はして我が主力艦隊を求めんとするとき、彼等が非常な危険を覺悟しなければならぬことは既に述べた。さればこの間我が主力艦隊はどうしてゐるであらうか。

我々は日本海々戦の前の東郷艦隊を思ひ出す。戦々競々として日本近海へ乗り入れるバルチック艦隊に對して、我が艦隊は一切の準備を整へ、靜かに英氣を養つてゐたのである。それは恰も今マラソンの決勝點へ入つた選手が、休む間もなく百メートル競走のスタートへ立つて、それまで充分身心を休めてゐた選手と競走を試みんとするやうなものである。逸を以て勞を待つ、この戦法は完全にあの海戦に於て行はれたのであつた。

怖らく日米戦争が始まつても、我が主力艦隊の採るべき戦法は、この原則を外れまいと思ふ。何時でも決戦場へ臨める準備をしておいて、徐ろに敵の疲れるのを待つであらう。その間戦闘は専ら輕艦隊（主として奇襲艦隊）と空軍とに任せておくであらう。そして、敵の疲れたるを見るや、軍の如く出動し、一舉に之れを撃滅する戦法に出るであらう。この際アメリカ聯合艦隊が如何に苦戦をしなければならぬかは、門外漢と雖も容易に想像し得るところである。

### 日本の無手勝流

しかしこゝに、今一つの問題がある。それは我が主力艦隊が敵との決戦を御免蒙る場合のことである。彼等は雲烟萬里の遠征を企てる限り、當然我が主力と決戦出来るつもりで出掛けて来るに違ひない。しかし我方にとつては、主力以外の方法で敵艦隊を潰滅させ得る方が立てば、敢て敵の挑戦に應じ無用の決戦を買つて出る必要はないのである。内地のどこかに集結して、靜かに空軍や潜水艦の成果を待つて居ればよい。

勿論アメリカ艦隊は必死となつて我が主力艦を求めらるであらう。そのためには死力を盡して日本本土を處構はず砲撃乃至空襲して、我が海軍當局を怒らせ、「やつつけて了へ」と云ふ命令を發せしめるやうに仕向けるかも知れない。この時我が國民が海軍の作戦に協力し、冷靜にその結果を待つだけの度胸が出来て居れば、我が當局は「鼠輩何するものぞ」と空嘯ぶいて相手にしない。しかし日露戦争の時の上村艦隊に對するやうに、一二隻のロシア艦隊が我が邊土を襲ふたからと云つて、忽ち上村將軍の責任を問ひ、その居室に投石するやうな不心得者を生むやうでは、この戦法も覺束なくなるかも知れない。多少の攻撃を米國艦隊から受けても、そんなことに頓着なく、一切を海軍に委ねておけば、我が主力艦は一步もその基地から出ないで済むのである。

その結果はどうなるか、勿論我が沿岸地方は多少の損害を蒙るかも知れないが、それより以上に敵艦隊の損害は大きい。而も西太平洋にこれぞと云ふ根據地を持たない彼等は、徒らに洋上を游弋して益々疲勞を加へると共に、遂には燃料の不足を來して、悄然歸路につかなければならぬのである。つまり彼等は殆んど何物をも得ることなく、反對に大きな犠牲を拂つて踏踏とハワイへ引き上げることになるのだ。之れ戦はずして勝つ戦法、即ち日本の無手勝流とも云ふべきものである。

### 怖るべき我が奇襲艦隊

今迄は戦鬪の第一線ばかりを見て來たが、思ひを彼等の後方連絡線即ち交通線の事に致したなればどうなるかである。こゝにも大きな不安が伏在してゐる。戦鬪が思ひの外短期間で片付く場合には、各艦が準備して來た軍需品だけでどうにか間に合ふであらうが、假にも日米兩雄が相見ゆる日になつたら、到底三月や半年で梟がつくものではない。その間西太平洋へ出動してゐるアメリカ艦隊は、兵站線を遠く米本國に求めなければならぬのである。

ハワイは艦隊の根據地であるから、そこには無論相當の準備はあらうが、ハワイへの補給は云

ふまでもなく米本國からしなければならぬ。結局兵站線はこれを遠く五千哩の彼方に求めざるを得ないのである。多少のことはミッドウエー、ウエーク、グワム、フィリッピン等から補給はつくであらうが、三百を以て數へる大艦隊の軍需品補給を、こんな黒子大の島で賄へる道理はない。どうしても本國に俟たなければならぬ。

五千哩の長大な兵站線は、浪穩やかな平時と雖もこれを圓滑に運ぶことは仲々に容易なことではない。まして戦争最中である。怖るべき我が潜水艦と空軍とは、要所々に網を張つて、見つけ次第にそれらの運送船を襲撃するは當然のことである。その根據地として我が南洋の委任統治領は非常に大きな價値を持つものである。

當然豫想される我のこの襲撃に對して、敵は勿論萬全の策を講ぜんとするであらう。しかし萬全の策とは、現在英國が行ひつゝある護送船團法より外にはない。若しこれを完全に行はうとしたなれば、米國はその艦隊の中から、全部の驅逐艦と、全部の輕巡洋艦とを割いても、尙且つ決して充分とは云ひ得ない。而もこれは對日攻撃艦隊としては到底出来ない相談である。そんなことをしたなれば、艦隊のバランスを失つて、逆も日本と戦ふことは出来なくなる。

結局彼等は此の兵站線の潰滅に依つて、西太平洋の作戦を継続することが出来なくなるのだ。この事實は米海軍當局でも充分知つてゐる筈である。

### 足場を持たぬ艦隊の運命

今まで述べて来たことは、決して日本に最良して、無理に牽強しく認めるところのものである。これらの推論を以てしても、アメリカ艦隊の渡洋作戦は、實に乾坤一擲の大冒險であることが分る。しかしこゝに、まだ一つの大きな暗礁がある。それは彼等が西太平洋に於てハワイを除く外殆んど根據地らしい根據地を持ち合はさないとはいふ點である。大艦隊が行動する場合には、それが大艦隊であればある程いろんな事故や故障が起り勝ちである。又それらの大艦隊に要する水や、燃料や食糧、武器彈藥の補充なども、驚くべき巨額に上るものである。更にそれだけの軍艦を常に遊弋させて置くわけには行かない。作戦上から何處かに基地を設け、必要に応じて出動出来るやう待機させてもおかねばならない。又常に各艦に修理を加へたり、手入を施したりもしなければならぬ。これらを完全にやらない限り、艦隊の戦闘力は日一日と劣つて行くものである。

日本海々戦の始まる前には、我が聯合艦隊は交替で佐世保へ歸り、一切の準備を整へることが出来た。而るにバルチック艦隊は、艦腹についた蠟をすら落すことが出来ず、そのため速力に非常な相違を來したといふ話も聞いてゐる。艦腹の蠟一つですらこれだけ影響するものであることを思へば、大艦隊にとつて完備した根據地が如何に大事なものであるかは、くどく説明するまでもあるまい。

而るにアメリカ艦隊は日本の近くにそれを殆んど持つてゐない。グワム島は軍縮條約廢棄以後始めて準根據地としての工事を始め、現在も馬力をかけてゐるが、完成したところで物の數ではない。ミッドウエー然り、ウエークまた然りである。たゞ一つフィリッピンのカヴァイテ軍港が頼りとすれば或る程度の頼りになるものではあるが、これもまた後述するやうな事情であまり當てにはならない。

結局隊伍堂々とハワイを出たアメリカ艦隊も、十日乃至二十日の間に我が主力艦隊とうまく遭遇しない限り、三界に身を寄せるところがなく、一戦も交へずして再びハワイへ引返さなければならぬ運命を持つてゐる。斯様にして、すべては渡洋作戦の殆んど不可能なることを證明する

材料ばかりである。事實また、現状に於てアメリカが渡洋作戦を敢行することは無謀に近い愚舉である。

### 所謂輪型陣とは

然るにヤーネル提督の如きは、二週間で日本を撃破して見せると云ひ、絶對不敗の渡洋作戦陣型として、既に人口に膾炙するところの輪型陣を盛んに宣傳してゐる。最も密なる作戦を鳴物入りで云ひ觸らすのであるから、これを鵜呑みにすることは差扣へたいが、そうした心理を巧みに掴んで、逆効果を狙ふ場合も想線されるから、この序に暫らく輪型陣について考察してみることにする。

輪型陣とは如何なる隊型であり、どんな長所を有するものであるか。これについては師蹉海軍少將がその著「深まり行く日米の危機」中で詳細に紹介してゐるから、それをこゝに借用することにする。

「これが輪型陣と稱する雄渾堅固の陣形であり、これに對する所要の各種軍艦を完成すれば、何時でも日本攻撃の作戦が敢行し得らるゝことゝなるのである。

この陣型は難攻不落の戦術地域を、そのまゝ日本近海まで推進し得るものであつて、絶對優勢

なる主力艦を、無疵のまゝ所要の地點に移動して、一舉に勝を制し、西太平洋の海上權を掌握しやうといふのである。而してこの陣型は九ヶ月にわたつて、太平洋上で無遠慮に行はれた大演習に於て、實地の經驗と研究が遂げられたものである。

この大演習の一般方略を略述すれば、第一、大西洋艦隊と太平洋艦隊とのパナマ運河地域に於ける合同演習、第二、この合同艦隊は、さらに敵の奇襲部隊を警戒しつゝ北上して、サンフランシスコに移動し、且つサンフランシスコの太平洋作戦基地としての價值研究、第三、全艦隊をハワイ眞珠港に推進し、同港の前進根據地としての價值研究、第四、ハワイ出港後、一海戦を交へて、敵艦隊を破り、直に追撃戦に移り、漸次西太平洋に進出し、その間所謂輪型陣を制つて渡洋作戦を續行し、敵の奇襲部隊と對抗しつゝ、マニラに到達するといふのであつた。

これが實戦ならば、そのまゝ日本の生存線を脅威して、日本の主力艦隊に戦闘を強ひるといふことになるのである。

さて、この輪型陣とは如何なるものか。主力艦隊及び補給部隊を中心圈内に置き、主力艦隊を中心として、二十哩の半徑を以て第一圓を書き、その線上に輕巡洋艦を配して、内方の直接警戒

に當らしめ、さらにその線上より五哩間隔に一圓を書き、この線上に驅逐艦を配し、さらにその外方視認距離に於て一圓を書き、この線上に潜水艦を配備し、即ち三段の警戒網を展張して、主力艦隊の直衛とするのである。

この直衛部隊の前方二百乃至五百哩の距離を隔て、巡洋艦十一隻を晝間一横列に配備し、各艦の間隔二十五哩、合計幅二百五十哩の海面に搜索列を布くのである。この哨戒線は、夜間二列横隊となつて、各列の距離を二百哩として航行するのである。これは、夜間第一列を潜入した敵に對して、翌朝第二列で發見しやうといふのである。またこの前哨線以外に於て、八隻の巡洋艦は、各艦約十二哩の距離を隔て、略々八角形をとつて前後左右の警戒に任ずるのである」これが輪型陣である。

### 輪型陣は破り得ないか

ヤーネル提督やキンメル司令長官が放送することを全部信用するとすれば、この輪型陣は全く完全無缺のものであるに相違ない。

匪蹇少將の筆からは洩れてゐるが、尙この外に航空母艦數隻が加はつて、常に上空より哨戒の任に就いてゐる筈であるから、怖らく晝間、この輪型陣に向つて小艦艇の襲撃は不可能に近いかも知れない。

知れない。

しかしこの不壊を信ずる陣型は、一つの精巧な機械になぞらへることが出来る。精巧な機械はそれが完全なバランスを保つてゐる場合は、極めて有効な働きをするが、一度どこかに故障が起きたなれば、忽ち全體に故障を波及する危険を、多分に孕んでゐるものである。假に我が奇襲艦隊の襲撃を受けなかつたとしても、十日乃至十五日の強行の間に、強風のお見舞を受けたなればどんな状態に陥るであらうか。主力艦のやうな大艦はこれに依つて惱まされることは少いが、その他の小艦艇は狂瀾怒濤に翻弄されて、到底この陣型を保つことは不可能である。「本日天氣晴朗なれども浪高し」と報告された日本海々戦の時ですら、流石の我が水雷艇隊も全然活動不能に陥り、夕刻まで各々の基地に風浪の靜まるを待たねばならなかつた。ましてアメリカ艦隊は身を寄すべき一つの島影すらない大洋を進んで來なければならぬ。而も我が奇襲艦隊の眼を晦ますために、常にジグザクのZ航法をとらなければならぬのである。

又多少の風浪があるとしても海上に濛氣さへ立罩めなければ、各艦はよくその連絡を保つことが出来るかも知れないが、一旦濛氣深く立罩め、おまけにそれへ風浪が伴つたなれば、各艦の視

野は極度に制限され、到底この理想陣形を保つことは困難である。既にこの陣型は、自然の現象の變化に對してもこれだけ弱點を持つものである。

然るに我が潜水艦や高速魚雷艇の襲撃、必至である。如何に彼等が哨戒網を張りめぐらし、且つジグザグコースを取つたにしても、決死以て之れを襲撃するつもりなれば、その哨戒網を突破して輪型陣の真中へ、數隻の潜水艦を侵入させることなどは、さまで難事ではない。我々はこれに就て、生々しい一つの實例を持つてゐる。それは獨逸潜水艦に依つてなされた、スカバ・フロ1軍港の奇襲である。英本國の北部海岸なるオークニー島のスカバ・フロ1軍港は、その港口附近に嚴重なる機雷原を設け、蟻一匹入りも出も出来ない程な防備を施してあつた。にも拘らず、獨逸の潜水艦は、勇敢にもそれを突破して港内深く侵入し、碇船中の軍艦に對して幾發かの魚雷を命中させた。そして驚くべきことには、再びこの機雷原を突破して、悠々基地へ歸つて來たのである。これは正に驚きに値する潜水艦の大偉勳であつた。既にかくの如く敵を防ぐに最も地の利を得た軍港ですら、襲撃し得る實例は生れてゐるのである。ましてアメリカ艦隊は航海中であり、各艦の間には潜入し得べき多數の間隙がある。死を見ること歸するが如き我が決死隊の攻撃

が、この程度の哨戒網を突破出來ないと誰が云ひ得るであらうか。

この時の敵はどんな状態に陥るか。それは全く混亂を極めたものとなる。輪型陣は支離滅裂となる。これへ更に我が空軍の攻撃が加はつたなれば、最早如何にキンメル司令官が優れた統率者であつても、手の下しやうのない状態となり終るに違ひない。

### 輪型陣最大の缺點

まだこればかりではない。輪型陣はそれ自身が主力を保護して日本近海まで無疵に持つて來る隊型であるから戦闘隊形とは云へない。飽くまで防禦的なものである。しかし、この隊型のまゝ進んでゐる時、突如側面から有力な艦隊の攻撃を受けた場合どうなるであらうか。

今日の海戦に於ける戦闘隊形は單縦陣を以て原則としてゐる。而も各艦の距離は相當開いてゐる必要がある。それは飛行機と魚雷の攻撃に對して大開間隔が比較的安全であるばかりでなく、例へば作戦上各艦一齊に方向轉換をする場合にも、今日の軍艦は速度が非常に大きくなつてゐるから、間隔が短いとその運動をお互に妨害し合つて、敵前に大醜態を演じるやうな場合がある。前の歐洲大戰の際ジュットランド沖に於て、獨逸艦隊が一大決戦を交へた時、英國艦隊は各艦が



密集的單縱陣を作つてゐたために、その艦隊運動に非常な支障を來し、遂に獨逸に名を爲さしめる結果を招いてしまつたのである。

このことからして、輪型陣で進行中、突如「日本艦隊現はる」の警報に接したなれば、輪型陣より戦闘隊型に移るまでに、相當の時間を要するものと考へられる。主力艦はいち早く速度を加へて先頭へ飛び出し、後続艦も夫々輪型陣を崩してその後に従ふのであるが、これが仲々容易なことではない。兎角してゐるうちに我が方の砲撃が始まつたなれば、それこそ收拾のつかぬものとなるのである。殊にまだ完全に輪型陣がほぐされない間に日本艦隊の攻撃を受けるやうになつたなれば、日本艦隊に面した側の軍艦はこれに應戦出来るけれども、その反対側にあるものは手が届かない。斯くて敵は三百隻の戦闘力を有しながら、最も大切な戦ひの初期に於て、その半數内外の戦闘力しか使へないことになるのである。

### 夢想に近し渡洋作戦

以上で凡てを論じ盡したわけではない。しかし大事なところは大方これを叩いて見た。その結論は、云ふまでもなくアメリカ太平洋艦隊の渡洋作戦は、殆んど夢想に近いといふことになるのである。アメリカとしては勿論この熱望

を諦めるやうなことはない。彼等が西太平洋に對する望みを捨てない限り、いつかは必ずやつてみせやうといふ氣持である。云はゞこれはアメリカ海軍の一つの理想であり憧れでもあるのである。

しかし現在、海軍力を以てしてはそれは到底出来ない藝當である。彼等が戦争の公式を無視して渡洋作戦を敢行するやうなことがあれば、それこそ彼等にとつて最大の悲劇であり、日本にとつて太平洋からその不安を一掃する好機會を與へるやうなものである。どんなに彼等が日本への直接進攻を以て脅かして來ても（脅されもしないが）我々は右のことを頭へ置いて、これを冷静に受けて居りさへすればよい。

けれどもこゝに残された一つの可能性がある。それは彼等が我が國に直接押し寄せて來ず、所謂南方迂迴路をとつて一旦シンガポールへ入港し、そこから徐ろに行動を開始する場合である。この時は彼等、有力な根據地が與へられることになるのであるから、事態は可なり變つて來る。これをしも不可能として却けてしまふことは許されない。次にその問題を衝くことにしやう。

## 新嘉坡の争奪戦

### 米國の頼みの綱

英國が米國のためにシンガポールを提供しやうといふ話は今に始まつたことではなく、既に一九二五年頃からそうした下心はお互に持つてゐたのである。たゞ米國は飽くまで自立して行ける國であるし、格別その當時シンガポールを必要としなかつたから、際立つた問題として取り上げられなかつたばかりである。最近頃はこの軍港の英米共同使用説が問題化して來たのは、豫ての約定が表沙汰となり、それへ複雑な國際情勢が絡みついたからに外ならない。

シンガポールを頼みの綱としてゐるのは英國と米國だけではない。濠洲も蘭印も、大袈裟に云へばこゝばかりを頼りとしてゐるのである。とは云へ、今日のやうに要塞ばかりあつて軍艦はガラ明きの軍港ではどうにもならないが、それにしても英本國艦隊の東航説や、米國太平洋艦隊の移駐問題が日本の神経を揺さぶる限りに於ては、依然としてシンガポールの存在が、之等屬領の大黒柱たることに於て變りはない。されば濠洲のシドニー・ヘラルド紙は、筆を極めて西太平

洋上に於ける英米兩國の協力を必要とする所以を説き、しかもそれは同盟の形を以てなさるべきであると述べてゐる。彼は云ふのである。

「地中海の事態が、太平洋における英國の海軍力を弱化させてゐる今日、アメリカの有する海軍力は、吾人にとつて一層その重要性を加へるのみである」

と、明らかにアメリカへ凭りかゝつてゐる。これに應へるかの如く米國の或る誌上では

「アメリカ艦隊が、もしシンガポールの英國艦隊と共同に作戦することになつたら、戦略的な見地から云つて、速かに日本に對して和を乞はしめることが出来るであらう」

など云つてゐるのである。

米國の海軍主腦部が、シンガポールを米國艦隊の基地として提供せられることを、既定の事實のやうに取扱つてゐることは、右の言葉を裏書きする程ではなくとも、これに依つて日本に對し非常に有利な態勢を整へ得る目算が立つてゐるものであるとは見られる。

### 米艦若し新嘉坡を目ざせば

一九三八年の一月には、ヤーネル提督の率ひるアジア艦隊が、全艦艇を擧げてシンガポールを訪問したことがある。

名目は英米兩國の親善を表示するためと云ふことであつた。アメリカ總領事のデヴィスは、日本の神經を刺戟することを怖れて、この訪問は英國に對するアメリカの善意を表現する以外何等の他意をも有するものではないと、わざわざ聲明をまでも發表したものである。然るに地元の新新聞は、筆を揃へて英米協同の日來ると題して、大々的にアジア艦隊歓迎の辭を連ねた。

また一九三九年二月に、有名な乾渠が完成した時にも、タウンゼント提督の率ひる米國巡洋艦ミルウォーキー以下三隻は、親しくシンガポールを訪ね、開渠の祝典に參列して大いに慶賀の意を表したのである。これらの事實は勿論單なる英米の親善のみを意味するものであるとは、誰一人考へないであらう。彼等はこれを機會として、私かにシンガポール軍港の濫踏み兼打合せをしてゐたのである。

太平洋の渡洋作戰に勝利の見込が立たぬ限り、米國としては如何なる角度から見てもシンガポールを據點としなければならぬ。従つて太平洋戰爭が勃發したなれば、米國の艦隊は何處を狙ふよりも先にこの軍港へ急行することになると思つてよい。若しそうなつたら、我國は如何なる處置を講ずればよいのであるか。また講じなければならぬか。これは不可能に近い渡洋作戰を

考へることよりも、一層重大且つ緊切な内容を孕む問題である。

### 新嘉坡を制するものは太平洋を制す

我國の中にはシンガポールの重要性に就いて、極めて樂觀的な考へを持つ人と、これを極めて重大視する人との二派がある。この内容の検討は暫らく措くとして、この二者が等しくシンガポールに注目してゐる事實には變りはない。又實際に於てシンガポールの存在は、我が國にとつて決して無關心たり得ないものである。

地圖を見るまでもなくこの地點は、我が對佛印、對泰貿易路の鼻面に扣へてゐる。更に印度以東の地方との貿易線は、悉くこゝで中絶し得る位置にある。更にその睨みはスマトラ、ジャバアの線に沿つて、濠洲のポート・ダーウィンと相呼應し、我が蘭印貿易路に對しても、少なからざる脅威を與へ得る要衝を占めてゐるのである。若しこゝへ英國艦隊の若干勢力が進駐し、更にこれへアメリカの艦隊が合流したなれば、我が國が持つ五大貿易線の中、三つまでは殆んどその機能を失ふ惧れがあるのだ。

従つて、シンガポールを制するものは正に西太平洋のみならず、更に東へ伸びて印度洋より近

東諸國をまでも制し得ると見てよいのである。かゝる重要な地點を、例へ英國にせよ米國にせよ我國を攻圍する目的で、艦隊の基地に利用せんとすることが分つたなれば、日本は斷じてこれを黙過することは出来ないのである。これを黙過することは、取りも直さず我が國の斃死を傍觀すると同様な結果を招くからである。

若しそうした意圖が分つたなれば、我が國は躊躇なく英米に對して宣戰を布告すると同時に、直ちに軍を動かしてシンガポールの奪取を圖らねばならない。帝國の安泰を守るためには是非ともこの方法を探るより外はないのである。これは決して我々が好戰的であり、侵略的であることを意味してはならない。假に立場を代へて米國なり英國なりが日本のそうした破目に陥つたとしたら、彼等とても必らずや同様の措置に出るであらう。

### 新嘉坡の全貌

そこで先づ、シンガポールとはどんなところであるかを先に頭へ入れておかう。泰國から南へ長芋のやうに伸びた馬來半島の尖端や、膨らんだところが英國領の海峡植民地である。シンガポールはその最南端、マラツカ海峡東水道の入口に浮んだ小さな島である。周圍約六十哩の島であつて、對岸のジョホール王國との間には巾約一哩

乃至二哩の河のやうなジョホール水道が横たはつて居り、本土とシンガポール島との間は一本の堰堤に依つて繋がれてゐる。

全島鬱蒼たるジャングルに被はれ、目立つた山もない緩やかな丘陵地帯である。シンガポールの町は南海岸のマラツカ海峡に臨んだ方にあるが、そこからは全然軍港地帯を見ることは出来ない。何故なれば、軍港地帯はこの商港とは全然反對側の、ジョホール水道に面したところにある。商港からは直線距離にしても約十五哩も距つてゐるからである。云ふまでもなくシンガポール全島は堅固な要塞を以て固められてゐるが、尙その外に、この島の附近に點在するチャワン島、リマウ島、ブランカン・マチ島、ブラニ島、更に軍港への通路たるジョホール水島の入口を扼するテコン島、ウビン島等にも、大口經の要塞砲を据付けた要塞が設けられてゐる。勿論防備はシンガポール島だけではなく、對岸のジョホール王國の海岸線にも堅固なものか出來て居り、宛然近代式旅順の觀があるのである。

島内には軍港を兩翼から守るやうに二つの軍用飛行場があり、その他にも島の西部に、一つの飛行根據地を持つてゐる。シンガポール市街の東方にはカラン民間飛行場があるが、有事の際に

は無論こゝも有力な軍用飛行場となるであらう。島を南北に貫いて馬來聯邦鐵道があり、道路は商港を中心として扇狀に設けられ、凡て軍事上の考慮から出發した設計になつてゐる。

問題の軍港のある附近はセレタールと呼ばれる地域であり、約二里四方の範圍に股がつて、近代的軍港たるべき凡ての設備が施されてゐる。その最も力瘤を入れたものは三つの船渠である。即ち浮ドック、乾ドック、進水ドックがそれだ。浮ドックは既にそれ自身が立派な一つの工廠である。と云はれ、五時間以内に五萬噸の艦船を引上げて作業に掛れるといふ優秀なものである。乾ドックに至つては、彼等が誇る如く正に東洋一のものであり、ダンカン級の驅逐艦なれば、一度に九隻まで收容出来るものだ。と云はれてゐる。従つて現在世界の海に浮んでゐる軍艦なれば、どんな巨艦でも樂に收容することが出来る。

之等のドックの外に約百萬噸の重油を貯藏し得るためにタンク八十個を設け、修理工場、發電所、材料庫、造兵廠、兵營、更に無線電信所等殆んど遺憾なく設備されてゐるのである。これを護つて前記の諸砲臺が嚴然と構へてゐるのであるから、如何に勇敢な艦艇でも、到底ウビン島の要塞線を突破してジヨホール水道へ突入することは不可能と見られてゐる。正に彼等が豪語する

通り、東洋のジブラルタルの貫録は充二分に備へた要塞であり、軍港であると思はなければならぬ。

### 日本挾撃陣型の楔

この東洋のジブラルタルは、本來如何なる目的と任務とを負つて設けられたものであるか。英米合作の實現が目捷の間に迫りつゝある今日の狀況から暫らく離れてこれを考へるとき、左の四つの目的のためにこの軍港が生れたことが分る。即ち

第一、シンガポール自身を護るために。

第二、印度以西の英領を保護するために。

第三、濠洲及ニュージールランドを保護するために。

第四、佛印及蘭印を救援するために。

以上の四つが目的であつた。勿論この保護と云ひ救援と云ふも、相手は常に日本が目的であることには變りはない。さて、この目的を完全に、且つ安心出来る程度に行ふには、どれだけの軍艦をこゝを中心として東洋へ置かなければならぬかに就ては、英國海軍部内でも可なり大きな

宿題となつてゐた。それが最後の決定を見たのは一九三七年のことである。これに依つて見ると英國は所謂極東艦隊として、次の如き隻数のものを常備しなければならぬとなつた。

即ち主力艦五隻、航空母艦二隻、巡洋艦二十隻、驅逐艦二十四隻、潜水艦十八隻、給油艦四隻その他に各種補助艦三十一隻合計百四隻を以て極東艦隊を編成しなければ、充分の役には立たないといふことに結着したのである。戦争前の英國海軍の大擴充には、勿論この數が豫定されて組込まれてゐたものと思へるのである。然し幸か不幸か今回の戦争が勃發してしまつたために、シンガポールへ軍艦を派遣するどころか、あべこべに香港にある支那艦隊までも、これを東方へ多分印度洋並に近東地方の護りのためであらうが、移動させなければならなくなつてしまつた。従つて右の計畫は、今のところ完全にペーパー・プランに終つてしまつてゐる。

しかし艦隊の移動性が多いことを以て、海軍強弱のパロメーターとしてゐる英國は、極東の風雲急を告げる場合は、出来る限りの海軍力を東洋へ廻そうとするには違ひない。けれども百四隻と云へば、英國全海軍力の三分の一以上に相當するものである。それを此際東洋へ割くといふことは、どんなに焦つてみたところで實現不可能である。殊に五隻の主力艦を本國と地中海の作

戦から割くなどは、誰が考へても出来ない相談であることは分り切つてゐる。せいぜい一隻の大艦を主力とする艦隊をシンガポールへ廻し得たら大成功であると云はなければならぬ。

そこで問題となつて来るのは濠洲の艦隊と蘭印のそれとである。嘗ては佛印の艦隊も計算の中に入れられてゐたが、フランス敗退の今日では、それは最早當てにはならなくなつた。しかし濠洲と蘭印の艦隊は、それ自身が自分達の廣い海岸線を哨戒するに辛うじて間に合ふ程度のものであつて、これらを合併してみたところで何程の力をも加へるものではない。こんなことにも起因して、是非とも有力なアメリカ艦隊にこゝへ這入つて貰ひ、少くとも、シンガポールが持つ本來の使命だけでも果して貰はふといふことになつたのである。そうすればハワイとシンガポールとで丁度日本を挟むやうな形になるから、日本はどうしてもこの双方に備へて海軍力を分散させなければならぬ。勢ひそれは戦はずして日本の海軍を弱體化させて海峡植民地や蘭印、濠洲等の不安を軽減するばかりでなく、日本をも大いに脅威出来る計算となるのである。彼等の計算通りに事が運んだなれば、慥かに或る程度まで彼等の豫想は實現するであらう。だから我が國としては、そうなる前にどうしてもシンガポールを抑へておかなければならぬのである。

## 新嘉坡の弱點

しかし、その前に今一步突込んで、シンガポール軍港の持つ力を探つて置く必要がある。難攻不落を誇るこの軍港が、果して彼等の云ふが如く難攻不落であるかどうか。これを知るにはその長所を見るよりも缺點を拾ふ方が早いから、次にシンガポールの四大弱點を暴露して参考に供したいと思ふ。

シンガポールの軍事當局は、盛んにこの軍港の不可侵性を自家廣告してゐる。しかし充分に研究してゐる軍事通の人々にとつては、それは多分に自慰的に聞こえて可笑しいのである。何となれば、第一にこの軍港の背後地が、艦隊根據地としての最も大事な要素を缺いてゐるからである。それは何であるかと云ふに、シンガポールの背後に一つの有力な工業地も存在しない點である。シンガポールの市街は相當立派なものではあるが、こゝは純然たる商業都市であつて工業地ではない。海峡植民地にも工業地と稱すべきものはない。強いて求めれば印度であるが、これはまた餘りにも離れすぎてゐる。このことはシンガポールにとつて最大の悩みである。されば當局は平時より、出來得る限りの軍需品を貯蔵することに腐心してゐる。現在は相當量の軍需品が貯蔵されたことであらうと思はれる。しかし一旦戰爭となつたなれば、驚くべき消費が行はれ

る。一定量の貯蔵品などは瞬く間に消費されてしまふ。之れを絶へず補ふにはどうしてもその附近に大きな工業地を持たなければならぬ。それが無いのであるから、先づその點でシンガポールは長期の戰鬪には耐へられない脆弱性を持つてゐる。

その次はジョホール水道への入口がたつた一つであり、而もその幅が餘りに狭い。その上軍港そのものが決して廣くない點である。ジョホール水道は最も廣いところで二哩を出でず、狭いところでは僅かに半哩ぐらひしかない。斯かる狹隘な水道は敵艦艇の侵入を防ぐには好都合であるが、自國艦隊の行動のためには非常に不都合である。殊に軍艦の速度が増加してゐる今日では、艦隊の行動を自由ならしめるには、相當の水域を要する。その點から見て、突嗟の場合の急を要する行動をとるには、全く不向きに出來てゐる。つまりこの軍港の規模は大艦隊を收容するには餘りに狭過ぎるのである。強いて英米聯合艦隊がこの狭い水域へ目白押しに入つたなれば、それこそ敵に對して絶好の空爆目標を與へるものであつて、これ以上の危険はないのである。

第三の缺點は附近に適當な副根據地を持つてゐないといふことである。既に斯くの通り大艦隊の收容には手狭である限り、どうしても近くにこれの補ひとなるべき副根據地を持たなければな

らない。よしんば艦隊を容るゝに充分の廣さがあつたにしても、現在の海軍根據地はその近くに一つの副根據地を持たないと、充分の資格を備へたものではないと云はれてゐる。然るにこゝは手狭である上に副根據地を有しない。これを強ひて求めるなれば香港か、印度セイロン島のトリンコマリイかであらうが、これは二つとも距離が餘りに遠すぎて、シンガポール軍港そのものゝ直接の女房役にはならない。さればと云つて、他にはどこもないのである。濠洲のポート・ダーウインにしても約千六百哩を距てゐるからその資格がない。こゝにも根據地不安の種が蒔かれてゐる。

弱點の第四はその氣候が悪いことである。赤道がその鼻先を通つてゐるこの地方は、全くの熱帶圏である。氣候風土ぐらひ馴れれば何でもないと云ふ人があるかも知れないが、これは戦争を知らぬ者の言であつて採るわけには行かない。嚴寒と酷暑とが如何に戰鬥能力に影響を及ぼすかは今更吹々する必要を認めない。殊に酷暑に對して白人の抵抗力は極めて弱い。この地方へ移住を餘儀なくされた白人の子孫は、平均四代で以て絶えてゐるといふ事實は我々にとつて見逃せないものである。そうした弱點を持つ白人がこゝを常に護つてゐなければならぬ。これを以て大

きなハンデキャップでないとは決して云へないのである。

まだ之等の外にも數へ上げれば色々あるが、兎も角右に掲げた四つの脆弱性は、この軍港にとつて仲々容易ならざる不安をあたへるものである。平時に於て充二分の自信あることでも、いざ戦争となると、意外なところに不備や缺陷を發見するものである。況んや平時より斯る不安を内藏するシンガポールが、一旦戰場と化した際には、その不安は益々大きさを加へ、遂にこゝを以て戰略的基地たるの價値を失はしめることにならぬとは誰が保證し得るであらうか。

### 英米の確信

西太平洋に於て日本と戦ふためには、シンガポールのみが唯一の艦隊根據地であるといふことは、英米兩國にとつて甚だ腹の膨れぬことではあらうが、彼等は「無いよりはまし」などとは考へてゐない。シンガポールが健在なる限り必ず日本を參らせて見せるといふ確信を持つてゐるとも見られるのである。それは英米艦隊がこゝに合流したからと云つて、そのまゝ龐大な艦隊がシンガポールに釘付けされてゐるわけではない。フィリッピンのカワイテ軍港もあれば香港もある。濠洲にはダーウインやシドニー等の小根據地もあり、蘭印諸島にも身を寄せるに足るべき港灣はいくらもある。日本の主力艦と決戦を試



みるなれば、之等の諸港に分散してゐる兵力を適當に纏めて一大艦隊を編成しなければならぬが、専らその貿易線破壊を狙ふものとしたら、寧ろシンガポールに身を潜めてゐるよりも、各々各地に持場を作つて、その範圍内のゲリラ戦に従事することの方がより適切である。彼等はこゝを狙つてゐるものと思ふべきである。そうして彼等の確信も亦、この戦法から生れて來てゐるのである。

この場合に於ても、シンガポールは常に聯合艦隊の中心點となるは勿論である。一切の指揮はこゝから採られ、艦隊の補給や修理も殆んどこゝで成される。云はゞそれらの軍艦にとつて、こゝは塙であり母家である。こゝがない限りそれら多數の軍艦は忽ち寄り寄る邊なき浮浪艦隊とならざるを得ないのだ。

### 須く機先を制せよ

さて話を本題へ乗り入れて、愈々我が國がシンガポールを攻めなければならなくなつた場合のことを考へてみよう。お互にそうした事態を想像することは不愉快ではあるが、さりとてこの必要の起る日がいつかは——或ひは意外に早く——到達するであらうといふことには、三國ともに私かに危懼を抱いてゐるからである。

英米と我國との間に愈々戦端が開かれたなれば、我が國として眞先にシンガポールの攻略を考へるであらうと思はれる。或ひは先づ蘭印を抑へ、それからシンガポールへ着手するかも知れない。何故なればこの二つは我が國にとつて、何れも絶対に英米の手に委ねられない地點だからである。だから或ひは、我が海軍力として、同時に兩方へ作戦する場合も考へられるのである。そこで便宜上蘭印は別にしておいて、先づシンガポールの攻防戦について、その未來圖を展げてみることにする。

ハワイからシンガポールまでの直線距離は約六千哩であるに對し、海南島からそれまでは僅かに千三百哩しかない。九州よりしても二千七百餘哩である。英本國に至つては文字通り雲烟萬里實に一萬哩の彼方にある。だから我が海軍は、その地の利を利用して、戦争の初期に於て絶對的に機先を制しなければならぬし、制し得る條件をも與へられてゐる。たと然し英米何れかの艦隊が、開戦に先立つてこゝへ入つてしまつてゐる場合は問題は自から別であるが、これは殆んど有り得べからざることである。云ふまでもなく、彼等が日本攻撃の目的を以てシンガポールへ出發するそのこと自體が、明らかに宣戰布告を意味するからだ。

## 我が攻撃態勢

この戦争の機先を制することは勝敗の分岐点である。機先を制するものは既に最初から優勢を持することが出来る。しかし、よしんば海南島からの距離が千三百哩に過ぎないからと云つて、それはハワイや英本國に比して短距離にあるだけの話で、相當の兵力と相當の艦隊とを以て攻めて行く上からは、全く遠距離作戦に屬するものである。つまり遠征である。遠征軍にとつて量初に必要とするものは、その攻撃基地を先づ手に入れることである。艦隊には艦隊の、空軍には空軍の攻撃基地を手に入れない限り、如何に有力なる兵力を以てしても、凡ゆる場合を想定して堅固に造られたシンガポール島へ、いきなり攻撃を加へるなどの暴舉が出来得る筈はない。従つて我が攻撃態勢は先づその基地を占取することから始められなければならない。

シンガポール軍當局は、この軍港より約十五里南方に點在するリオウ群島と、その東に碁布するところのピンタン諸島とを警戒してゐるやうである。海軍の前進根據地としては誰にも豫想される地域にあるだけに、この諸島の防備は相當施されてゐるものと思はれる。しかし若し我が海軍がこれを前進基地に撰ぼうと思へば、おそらくそれ程の力を要せずして攻略することが出来る

であらう。

この前進根據地の獲得と平行して行はねばならぬことは、空軍によるシンガポール軍港並びに諸砲臺の爆撃であらう。その港内には若干の軍艦が居り、數萬の陸兵も亦各施設に依つて護りを固めてゐるのであるから、我が艦隊の攻撃が始まる前に、能ふ限りそれらの軍艦と砲臺とを破壊して置く必要がある。この場合の我が飛行隊の基地をどこに求めるかは問題であるが、海南島からシンガポールまでは空路二千キロであるから、これだけの距離は我が空軍にとつてそれ程重い負擔ではあるまいと思はれる。若し幸にして佛印又は泰がその基地を提供して呉れるやうなことになるれば尙更問題ではなくなる。又必要とあればボルネオの何處かに基地を獲得することも出来るであらう。

## 空軍の力

現在シンガポールにはどれだけの飛行機があるかは勿論分明ではないが、先づ五百機までが限度であらうとされてゐる。それより多くあらうともそんなに飛躍的なものではあるまい。この五百機内外の空軍は、我が爆撃機や戦闘機を邀へて極力シンガポールの空を護ると共に、更に攻撃的に出て我が海軍をも襲ふは必至である。斯くて彼

我の間に、緒戦としての空中戦が華々しく展開されるのである。

この空中戦に依つて、勿論我が方も多少の損害を蒙ることは覚悟してゐなければならぬ。しかし敵の蒙るべき損害は遙かに致命的である。一定限度の敵空軍は、我が空襲の一度一度にその数を減じて行く。多少の豫備と、印度等から空輸する援軍はあるかも知れないが、曩にも述べたやうに、工業力の不足は到底我と對抗の力を持ち續けることが不可能である。次第に空軍の力が衰へるに従つて、シンガポール全島の蒙る損害は益々倍加されて行く。出口を一方にしか持たぬ軍艦は、どうすることも出来なからう。ジヨホール水道を出れば我が海軍の邀撃に合ふし、港内に潜んで居れば空爆を受ける。夜間に乘じて遁走を企てても、我が潜水艦の網はよもやこれを逃がしはしない。斯くて空爆に對する充分な防禦設備を有する砲臺を除いて、シンガポールの軍事施設は完膚なく破壊し盡されるであらう。この成果を待つて、愈々我が海軍と陸軍と而して空軍との、本格的な攻撃が開始されるであらう。

### 侮り難き要塞砲

シンガポールを護る要塞中には長さ六十呎に亘る十八吋の巨砲を据付けたもの數個があると報ぜられてゐる。これは仲々侮り難い威力である

その彈丸は、攻撃する側の軍艦が自己の有効射撃距離へ近づく前に、その軍艦に對して巨弾を浴せかけることが出来る。防禦武器としては端尻すべからざるものである。

假にシンガポールの軍港ではなく、その反對側マラツカ海峡に面した港市の方を攻めるにしても、その背後には有名なカニンガム要塞があり、更に側面からこの港市を護るために、沖合の島には悉く砲臺が出来てゐて、容易に之れに近付くことが出来ない。ましてやジヨホール水道の入口にはウビン島、テコン島等の鋼鐵の如き要塞が巨砲を揃へて睨み据へてゐるから、これ亦殆んど晝間の潜入など思ひも依らない。夜間と雖も探照燈や潜水艦捕捉網その他萬全の設備を整へて嚴重な警戒網を張つてゐるであらうから、或ひは徒らに犠牲を増すのみの結果に終るかも知れない。事ここに至つては、一部の樂觀論者が云ふやうに、そう容易くは陥落しやうとも思へないのである。

### 敵前上陸は可能か

これを短時日の間に陥れるには、攻撃軍に於ても相當の犠牲を拂はなければならぬ。殊にシンガポールの攻略は、英米艦隊の來援があるまでに、絶對有利な地歩を占めておかなければならぬから、一層この點は懸念されるのであ

る。従つて空軍の爆撃のみに頼つてゐるわけには行かない。海軍もまた自己の危険を犯してシンガポール島に迫り、こゝぞと思ふ上陸地點附近の要塞砲を、完膚なきまでに叩き潰す必要があらう。敵前上陸はこの海空軍の援護下に於て行はれるか、それとも上陸地點の掃蕩を終つてから行ふかは、その時の状況に依つて異なるであらうが、何れにしても相當な抵抗力を有する地點へ敵前上陸をしなければ、この島の攻略は成し遂げられない。

この上陸地點については、要塞當局でも種々徹底的な研究をしてゐる模様である。或る者はマラッカ海峡方面よりせず、一旦馬來半島の東海岸に上陸し、そこから半島を横斷して軍港對岸のジヨホールより直接軍港を攻撃するであらうと説く。又或る者はマラッカ海峡よりシンガポール港市附近に上陸し、そこから軍港並に各要塞の背後を脅かすであらうとも云ふ。何れにしても格別大きな島ではないから、あらゆる場合に對應出来るやう、充分の防備を施してあるものと思はなければならぬ。こゝへ果敢な敵前上陸を敢行するわけである。だから吳淞敵前上陸よりも遙かに凄慘を極めた戦闘が、先づその上陸第一歩に於て展開されるであらう。

しかし一旦我が陸軍がこの島に取り付いたなれば、後はたと時間の問題であらう。その間連絡

補給等に多少の困難や障害はあるにしても、敵は限りある兵力であり、而も常に守勢のみの戦闘であるから、我が勇猛果敢なる攻撃を、到底永く保ち應へることは不可能である。

### 陥落したなれば

以上は全くの略筋ではあるが、シンガポールの攻防戦が、どんな風に展開されるかは、大體これに依つて想像出来るであらうと思ふ。要するに

こゝは成程攻めるには可なり困難ではあるが、これを攻略することは、我が軍の力を以てすればさまで難かしいものではない。

斯くて我が軍の手にシンガポールが歸したなれば、それは最早西太平洋から大方の不安を拂拭したことになるばかりでなく、更に帝國の威力は印度洋にまで及ぶのである。このために受ける我が貿易線の利益が如何に大であるかは、計り知るべからざるものがあらう。更にまたシンガポールへ日章旗が翻へることに依つて、蘭印も當然英米依存の迷夢から醒めざるを得なくなるし、濠洲とてもその態度を當然改めなければならなくなる。要を壊された扇はバラ／＼にならざるを得ないのだ。

斯う考へて來ると、東亞共榮圈確立のために、如何にシンガポールが重大な障礙になつてゐる

かど、自から明瞭となつて来るのである。英國の挑戰的態度に業を煮やして、遂に我が國內に、英國を撃て、シンガポールを衝けといふ叫びが上つて来るのも、まことに理由があるのだ。

### 據點としての比律賓

#### 根據地に飢える米國

アメリカが西太平洋に於て有力な根據地を持たない限り、日本への波洋作戦などは考へられないことは前に述べた。事實アメリカは自國の艦隊根據地としては、これぞといふ目星しいものを殆んど持つてゐないのである。唯一の力と恃むシンガポールもそれは英國に屬するものであり、今日でこそ英米で仲よく共同に使用しませうといふことになつてゐるが、猫の目の如く變る國際關係は、永久に英米共同使用の根據地としては考へられない。そうなると、如何に米國の軍擴が進行し、日本の實力を相當凌ぐ海軍力を持ち得ても、所謂實の持ち腐れであつて、永遠に日本への進攻は出來ないわけである。

そこで彼等は先づフィリッピンを取り上げ、更にその代用品としてグナム島の設備に狂奔してゐる。大艦隊を容るゝに足る根據地が、ゴム人形を造るやうに手つ取り早く出來るものでないこ

とは誰しも知つてゐるが、しかしやらうと思へば或る程度までのことは出來る。米國が必死の努力を傾倒したなれば、或ひは近い將來にカヴィテ軍港並びに、その副根據地と目されてゐるオロングアポに、堂々たる根據地を造り上げるかも知れない。しかしこれは飽くまで「かもしれな」のである。その理由は次にお話する。

#### 比島の讚美論

米國が比島の戰略的地位を、何の程度に評價してゐるか、話は先づこゝから始められなければならない。勿論この國にも悲觀論者と樂觀論者があるが、我々の問題となるのは樂觀論者の説であるから、その代表的なものとして、米國海軍協會のメンバー、キラルフイの説を掲げることにする。即ち彼は比島の價値を次の如く高唱するのである。

「フィリッピンの内海は多數の廣い碇泊地を有して居り、空襲に際して艦隊が分散し得るのである。例へばタナン海峡は長さ百二十哩、幅十五哩、ギマラス海峡は夫々五十哩、十五哩である。此處に於ては、諸艦は數哩を距て、分散し、自らの高射砲に加ふるに、敵の飛來する際、越へねばならぬ各島の高地にある砲門を以て防ぐことが出来る。」

潜水艦発見方法の進歩、更に強力な機械水雷等に依り、廣い港口を有する基地への潜水艦の侵入不可能性が減じた。この點に關して、フリッツピン領水の多くの入口に、機械水雷を敷設し以て相當廣い地域の安全碇泊地を作ることには全く實行可能である。事實ポボル以北、バナイ、ネグロス以西の全域は、北海の機雷原に用ひられる機雷の四分の一以下の費用で完全に封鎖し得るのである。これはあまり高遠な將來を望むものと思ふかも知れないが、フリッツピンがあの多くの嵯峨たる島嶼を繞る、迷宮の如き水路を封鎖すれば、全體が巨大な海軍基地領域となるのである。外海への出口は、淺瀬の多い點から見ても、比較的少なく、バラバク海峡は僅か四漚に限られ、ポボルとレイテの間の六漚の通路は閉ざされてゐるのである。

内海の多くの部分は、海上に浮ぶ大型艦には全く安全ではあるが、完全な潜水艦の奔である。潜水艦艇が、スール海、ミンダナオ海以外の領水に潜水する危険を冒すかどうか甚だ疑はしい。多くの水上機が各島の風蔭の碇泊地を用ひるのみならず、スールの巡邏隊の基地を、トバタハの環礁に置くことも出来る。太平洋や支那海に注ぐ多數の水路は、艦隊に多大の移動性を與へるといふのは、敵は、何時艦隊が出發するかを豫め知り、何處に待機すべきかを知ることが不可

能であるからである。特に潜水艦の集中に關しては不可能である。」

これは單にカヴィテやオロンガポ等の軍港だけを目標にせず、比島全體を一つの基地と見做さうとするものであつて、云はゞ我が瀬戸内海を全部根據地にしやうとするやうなものである。だから話は大きい、大きいだけに随分粗雑なプランであることは免れない。しかし、斯うした見方のあることは、我々として一應の注意を拂つておかねばなるまい。

### カヴィテ軍港の實力

何と云つても、比島で海軍根據地として考へられねばならぬのは、カヴィテ軍港である。この軍港はマニラ灣内にあり、丁度我國の東京と横須賀の如く、主都マニラを護るやうなところに位置してゐる。現在米國のアジア艦隊根據地となつて居り、歴史的に見れば相當古い軍港ではあるが、その設備に至つては、要するにアジア艦隊の病院たる程度にとどまるものである。

アメリカ艦隊は何とかしてこゝを、その前進根據地としたいと考へてゐる。若しこゝが彼等の欲求を満たすことが出来たならば、その價值たるや遙かにシンガポールを凌ぐものである。されば太平洋の波高しと見るや、一九四〇年には獨立させやうと云つてゐた比島との約束を無期延期

して、ハワイの監視哨、モンロー主義の外廊たる役割を振り當て、しまつた。詳細なことは不明であるが、今や比島は米國の尻押しに寄り、いや／＼ながら海空陸の凡てをあげて、その擴充に大童になつてゐる。その擴充の中に、カヴィテ軍港の擴充計畫も入つてゐることは云ふまでもない。

要するに根據地に飢えてゐるアメリカは、少しの手掛りでもあれば、片つ端からそこを根據地化しやうとしてゐる。グワムとムヒフィリップピンと云ひ、更にミッドウエイ、ウエーク、バゴバゴ等すべて然りである。尤も大艦隊の根據地とするのではなく、輕艦艇のそれに充當しやうとするのなれば、問題は自ら別だ。我々が今見やうとするのは、日米の決戦をテーマとするための根據地であるから、話はどこまでもその線に沿つて進められなければならぬ。

米國は根據地の擴充に大童になつてゐる。その結果現在には取るに足らぬカヴィテ軍港が、一躍大根據地となり得たときにはどうなるか。無論そうした完備した軍港を、三流軍艦で編成されたアジア艦隊だけの用に當てるつもりはない。彼等は太平洋艦隊の中から有力なる艦隊を編成して、カヴィテへの移駐を計るに違ひない。それでなければ、こゝを擴充したことがナンセンスに

終るからである。

しかし、彼等が勇敢にもその移駐を企てたとしても、怖らくそれは渡洋作戦の時と同様不成功に終るであらうと思はれる數個の理由がある。

### お先に失敬

若しアメリカ艦隊がフィリップピン移駐を企てたとしたなれば、それはまた同時に我が國がフィリップピンを攻略せんとする時でもある。このことは、我が大陸との交通線並に西南方諸國への交通線を、常に側面から攻撃される怖れがあるばかりでなく、我が國全體が米國艦隊の大きな脅威を受けるからである。更にまた我が南洋諸島との交通、蘭印への貿易路も完全に彼等の跳梁圈内に入れられてしまつて、全く手も足も出なくなるかも知れない。左様な事態に追ひ込まれては大變であるから、どうしてもアメリカ艦隊を比島へ乗り入れさせるわけには行かない。そのためには、最も手近い方法として、これを彼等が来る前に、お先へ失敬するのが一番である。

今、ハワイからマニラまでの直線距離を計るに、約四千八百哩ある。然るに我方は、之を九州

からすれば僅かに一千三百哩に過ぎない。ましてや臺灣からは呼べば應へる近くにあり、海南島西沙群島にしても各々指顧の間にあると云へやう。この距離の相違は何と云つても大きなハンデキヤツプたらざるを得ない。

### 比島を如何に防ぐか

この日本の攻撃はアメリカと雖も覺悟の前である。だからこれを簡単に攻略されてはたまらない。少くともアメリカ艦隊が到着するまでは持ち應へて貰はなければならぬ。そこで、陸の防備として、一九四六年までには、小常備軍（現在約一萬人）と、四十萬の既教育豫備兵、二百五十臺の軍用機と、五十乃至百のモーター水雷艇とを造るべしといふことになつてゐる。この多數のモーター水雷艇に依つて極力日本海軍の沿岸接近を妨害し、愈々陸上戦に移つたら、アメリカ兵と土民軍とが協力、峻嶮な地形を恃んで大いに防戦之れ努めやうと云ふのである。

この攻防戦に就て、前米國軍參謀長ダグラス・マックアーサーは「フィリッピンの防備を強化することに依り、敵軍がフィリッピン侵略を成功させるためには、五十萬の兵力と、百億弗の金と、多大の損害と、三年の期間を必要とするであらう」と云つてゐるが、三年間にあの廣い支那

を大方攻略してしまつた我軍にとつては、この計算が米國陸軍の弱さを公表してゐるやうにしか受取れないのは皮肉である。

それは兎も角として、我が國がフィリッピンの攻略をやる氣になれば、これは他愛なく片付いてしまふ性質のものである。元來我國は比島人そのものと戦ふ意志は毫もなく、またその必要を認めない。だから比島人の抵抗は適當にこれを排除しながら、敵艦隊の據點となり得るやうなところを、虱潰しに占領して行けばよい。それ以上の戦争は、比島人のために採らぬところである。若しも飽くまで比島側が焦土決戦を志すなれば、その方の戦争はそれから始めても決して遅くはない筈だ。我方が企圖するところは比島の占領ではなく、アメリカ艦隊の足場に封印を捺すことだけである。従つてこの作戦は、神速果敢を一枚看板としてゐる我が軍にとつて、そんなに負擔の重いものではない。なればこそマニラに浮ぶアジア艦隊を、米國自身が「犠牲艦隊」と呼ぶのである。而もこの犠牲艦隊は、その犠牲に依つて怖らく何物をも齎らさない。アメリカはたゞ一つその艦隊をマニラへ移駐せんとしたことだけのために、そのアジア艦隊と、フィリッピンと、而して米國海軍の面目とを、同時に失ふことになるであらう。



## 困難な第二の理由

米國の軍事評論家ジョン・ガンサーは、日本の委任統治諸島を全部締め殺さなければ駄目だと云つてゐる。これは正にその通りである。米國が西太平洋を狙ふ限り、我が南洋諸島は常に目の上の瘤どころか、咽に立つた骨のやうに邪魔なものである。而もこの南洋諸島へは、東京灣沖から小笠原列島といふ飛石が続いてゐる。それは恰も太平洋上に投網を擡げたやうなものである。

若しアメリカ艦隊がフィリッピン移駐を試みんとしたならば、ガンサーの云ふ通り、これらの島を一つ一つ片付けられない限り殆んど成功は覺束ない。これらの島の一つ一つが米艦隊の行動を監視する眼鏡なのである。而もそれが、ハワイからマニラまでの距離の中約三分の二の長きに亘つてばら撒かれてゐる。時速十八ノットを以てそれを突破するには、尤に七日半を要するのだ。この長い時間中に、米艦如何に神出鬼没であらうとも、私の眼を逃れることは到底出来ないのである。我に發見されたならば、最早それで最後と思はなければなるまい。彼等はマニラへ逃げ込む前に大抵は我々海空軍の餌食とされるであらうからである。勿論この場合グロム島の存在なんかは、大局に何等の影響もない。若しもこゝへ墮入したならば、あの狭い港内に密集した艦隊は、

我が荒鷲にこの上もない御馳走を提供することになる。何れにしてもマニラ移駐はこゝでもまた食ひ止められる立派な論據があるわけである。

## 比島自らの脆弱性

假りに何らかの方法で、日本を脅威出来るだけの艦隊が、無事比島入りをした場合はどうなるか。萬が一の場合であるが、米國が一度に艦隊を持つて来ずに、日本の目につかぬ範圍内で分散的に送り込めば出来ない相談でないばかりでなく、例の南方迂迴路を採る方法も残されてゐるから、智慧と勇氣を絞ればやれなくもない。そうなつたら大變ではないか——と驚くのはまだ早い。そうなつても、日本を脅威出来る程の大艦隊は、到底永くこゝに御輿を据へてゐるわけには行かないからである。

つまり前述の、根據地たる設備を殆んど持つてゐないからだ。その上渡洋作戦の處でも述べた兵站線 連絡が非常に困難である。迅速に、多量に、繼續的に、而して規律的にと云ふのが兵站線の役目である。然るに比較的安安全な南方迂迴路ではこれらの中の多數の條件を缺く。さればと云つて我が委任統治領を突破して、多數の運送船を歩かせるといふことも出来ない相談である。チャイナ・クリツバー級の大型輸送機を多數動員して、空からの輸送を試みやうとしても、我が

警戒陣はそう御注文通りにさせないのは分り切つてゐる。兎角する中に艦艇の修理を要するものも出来て来やうし、飛行機の修繕を要するものも生れやう。しかしそれに應じ得る設備を殆んど持たぬ比島としては、どうすることも出来ない。こんな状態でこゝに閉ぢ込められた艦隊が、果して我が主力艦隊と血戦するだけの力を持ち應へ得るかどうかは、敢て説明するまでもないことであらう。

### 絶好の空襲圏内

更に今一つの理由は、フィリッピンが餘りにも我が國に近過ぎるといふ點である。艦隊の前進根據地には、その相手國の強弱に依つて種々異つた條件が考へられるが、我が國のやうな強力な海軍國に對して、その根據地が接近し過ぎてゐることは、我が國の危険よりも、遙かに彼等の危険率の方が大きいのである。

假に空中戦のことだけを考へても、このことは簡単に證明出来る。我が臺灣からマニラまでの距離は、空路一千キロ内外であり、海南島からは千二百キロに過ぎない。こゝに我が空軍の前進基地を設けて、入れ代り立ち代り空襲を行つた場合、アメリカ艦隊は果してよくこれを防ぎ切るであらうか。勿論我が空軍に備へて萬全の設備を有するのみならず、陸に數百機があり、航空

母艦及び艦載機等も相當數に上るであらう。だから初期の空襲に對しては、かなりの抵抗を受けらるものと思はれる。しかし彼等は一機を失ふ毎にその補充の途は殆んど絶たれるのである。高射砲と雖も、一門を破壊される毎にその砲聲を細めて行く運命に置かれてゐる。これに對して、我方は多少の犠牲を出そうとも、新手の補充には絶對に事缺かないのみか、敵の潰滅を早めやうと思へば必要以上の機數を彼等の頭上に送ることも出来るであらう。斯うなつては全く袋の鼠であつて、我が主力艦に一發も見舞はないうちに、あたらマニラ灣頭とその巨體の腹を見せなければならぬ。

更にマニラが我が本土に近いことは、敵艦隊の動靜を探るのに非常に有利である。この際我が臺灣、西沙群島、海南島、更に西南諸島の重要性は益々倍加されるのである。斯様にして、彼等は我が軍の手頃な攻撃範圍にあるにも拘はらず、彼等から我が東京を襲撃せんとする時は、千四百五十哩を距てられてゐる。要するに防禦にも攻撃にも、極めて都合の悪い位置にあると云はなければならぬのだ。

## 敵ゲリラ戦の足場

斯様にして、フィリッピンの内容は、大艦隊の根據地としては、極めて不適當なことが分つてゐる。にも拘はらずアメリカがこゝを斷念しないのみか、その國防を強化したり、軍港の設備を擴充したりしてゐるのは、そこに何等かの價値がなければならぬ。思ふにそれは彼等が別の様式で日本攻撃の可能性を信じてゐるからである。別の形式とは、即ちこゝを潜水艦や輕艦艇の足場たらしめやうとしてゐることである。

何分比島はその名の通り多數の島嶼から成り立つてゐる國である。従つて至る處に存在する港灣と水道とは、潜水艦の潜伏場所として絶好の條件を提供してゐる。潜水艦なれば、敵空軍の眼からも逃れ得るやうな設備なり地形なりを利用することは決して困難ではない。狙ひは實にこゝにあるのである。

比島は大艦隊の根據地としては殆んど無價値であるが、潜水艦の基地としては輕視出來ない存在である。若し日米戦争が始まつたなれば、我國はこの點に充分留意して作戦を進めることであらうが、如何に我が軍が強力であつても、その多數の島嶼を悉く手中に收めて、完全に敵の足場を抑へてしまふまでには多少の時日を要する。その間敵の行ふであらう奇襲と、交通戦への

ゲリラ戦は充分の警戒を必要としやう。斯くて比島も亦日米戦争に當つては、大なり小なり我が國に脅威を與へ得る存在となるのである。

## 進退兩難の比大統領

しかしこれは何處までも米國の意志に依るものである。アメリカが望む場合に於てのみ我國に脅威たり得るのであつて、アメリカが若し比島を放棄したなれば問題はざらりと變つて來る。この點に關してキラルフイは、聊か廻りくどい云ひまわしであるが、次のやうに説いてゐる。

「フィリッピンが、空軍によつてかゝる事態（註——侵入軍に依つて要所々々を占領せられることを指す）を防止し得るといふ可能性は、飛行機がその型、その質、その數の進歩により、行々強大國の武器となりつゝある事實に依つても、割引して考へられなければならぬ。アメリカの手にある間こそフィリッピンの防衛に理想的な武器であらうとも、何等の工業力もなく、十分の工場設備を殆んど必要とせざる經濟を有する國家は、一方では水上艦隊によつてフィリッピンへの飛行機海上輸送を妨げ、他方では航空母艦からの飛行機によつて、その空輸を妨げ得る強大國の制壓に、對抗し得るとは殆んど期待出來ないのである。海、空兩軍の協力は、本質的に海軍基地

を守る陸兵にとつて、難攻不落の障壁であるかの如く見える。七千の島嶼に對し、一米國海軍基地の與へてゐる保護は、島嶼自體によつては與へ得られないやうに思はれる。持つて廻つた云ひ方ではあるが、今日の比島が存在し得るのは、カヱイテ軍港にアメリカアジア艦隊がゐるお蔭であり、今後の比島を維持するには、アメリカに絶らなければ駄目だと云つてゐるに過ぎない。しかしそのアメリカ國內でも、いざ太平洋戦争ともならば、比島は到底星條旗を打立て、置くことの出来ない事實を知つて、今日から最早諦めてゐる人々もある。けれども米國家の方針としては、飽くまでもこゝを握つて放さない氣勢を示してゐるために、比島大統領マニユエル・ケソンも一寸進退兩難に陥つた形である。

元來フイリッピン人は日本人と同種の民族である點に早くから眼覺めて、根本的には我國に反感や増悪を持つ必要のないことをよく知つてゐる。たゞ彼等はアメリカのために踊らされてゐるのである。アメリカの屬領として生きて來た永年の生活は、本國の意志を無視出来ないやうに習慣づけられてゐる。されば太平洋の危機説が傳へられて、最も暗い氣持にされるのは比島人である。彼等は戦ふ必要もなく、戦はうとも思はず、且つ戦つても勝味のない相手と戦はなければな

らないからである。ケソン大統領が打續く軍擴に悲鳴をあけて、比島政府は軍備を強化する代りに、經濟戰の防備を心掛くべきだと述懐したのは、寔に故ある哉である。比島自身が如何に軍備へ憂き身をやつしてみたところで、それは結局アメリカへの犠牲を大きくするだけにとゞまることは、ケソンならずとも充分了解出来るからだ。斯様な窮境に置かれた比島人には、充分同情すべきである。結局我々は、若し日米間に事が起きた場合には、比島が嚴正な中立を護ることのみが、この國の人々に殘された唯一の賢明な策であることを知るのである。

## 蘭印をどうする

### 日米戰の地雷原

次に我々は蘭印を見なければならぬ。蘭印の重要性は、英米にとつてのそれよりも、我國の方が遙かに生命線的なものであることは、既に今日一般の常識となつてゐる。英國の方では濠亞地中海政策上無くてはならぬ島々であるが、米國に至つては敢てこれに就て、日米の危機を招いてまで騒ぎ立てねばならない程の何物をも持つてはゐない。にも拘はらず蘭印は日米戰の地雷原として、兩國の間に複雑極まる空氣を醸成してし

まつてゐるのである。

米國が好んで云ふことは、若し日本に蘭印を制壓されたなれば、米國は立ちどころにゴムと錫と雲母との供給地を失つてしまふと云ふ理由である。或る一面この事は事實ではあるが、さればと云つて、ゴムは南米からも補給を仰ぐ途があるし、錫とても何等かの代用品は考究されてゐることと思はれる。それをあのやうに騒ぎ立てるのは、一つの手段である。彼等がゴムと錫とを振り翳すその裏には、全然別な魂膽が潜められてゐることを知らなければならぬ。

その一はシンガポール進駐の足場として、是非とも蘭印を必要とする。その二はフィリッピンの安全のために、蘭印の現状維持を望んでゐる。斯う書けば穩當であるが、これらのことには、何れも日本抑壓のタネが仕込まれてゐるのであるから、結局彼等が蘭印を日本の共榮圈内に置かせまいとして、極力之れが妨害を企てることは、取りも直さず東洋に於ける經濟帝國主義の確立を、今以て放棄しないどころか、益々執拗にこれへ食ひ下らんとすることを意味するのである。だからオランダ政府が英國へ逃亡した際、有田外相が蘭印の現状維持を聲明したのに對して響の物に應ずるが如く、米國政府がまた同様の聲明を發したものである。

### 蘭印は英米側が登録済

彼等には有田外相が右の聲明をした時、おそらく肚の中では手を叩いて喜んでゐたかも知れない。云ふまでもなくこれで日本が蘭印へ攻勢を執らないことが分つたばかりでなく、その現状維持は、英米側にとつて願つてもない幸ひであつた。英米の勢力に對して、日本の勢力はこゝでは實に微々たるものである。されば日本が現状維持を聲明することは、蘭印の英米依存性を承認したことになるからであつた。

しかし地球は廻る。我國には東亞共榮圈の確立と云ふ必要が起つて來た。これも一つは米國のやり過ぎが促した現象であるとも云へる。米國さへ日本への禁輸をやらなかつたなれば、或ひは共榮圈問題も、もつと將來の話となつてゐたかも知れない。然るに米國は、全面的對日禁輸だの在米日本資金凍結だのと、日本の臺所を苦しめるやうな手ばかりを編み出して我が國を脅迫したために、それならそれで、近くの方で間に合はせませうと云ふことになつてしまつたのである。云はゞ米國は毛を吹いて自ら傷を求めやうなことをしてしまつた。そうしておきながら、日本が小林商相や芳澤前外相を派遣して、蘭印當局と平和裡の通商交渉を行はせようとすると、目に角立て、騒ぎ出すのみか、陰に陽にこの交渉の妥結を妨害しやうとする。我々がこの情理を缺いた

アメリカのやり口に腹を立てるのは當り前である。若し之れが立場を異にして彼等が被害者であつたならば、今頃は太平洋上にどす黒い戦火が渦を巻いてゐることであらう。

尤もアメリカにしても英國にしても、蘭印は當然英米側の一員だと思つてゐる。この地方を統べる親元のオランダが英國の軒先に雨宿りをさせて貰つてゐる限り、斯う考へるのは無理でないかも知れない。しかし彼等は一を知つて二を知らないのである。即ち蘭印が東洋にある地方であり、従来日本と可なり密接な關係を持つ地方だといふことを忘れてゐる。それへもつて來て、英國の濠亞地中海政策と云ひ、米國の東洋經濟帝國主義と云ひ、何れも日本の東亞共榮圏の理想と直正面から衝突してゐるのであるから、勢ひ此處は三國にとつて、最も爆發性の多い地雷原たざざるを得なくなるのである。

### 我は蘭印と戦ふ理由なし

兎も角こゝには多くの危機が伏せられてゐる。しかしその危機前にも少し觸れた通りである。若しシンガポールが日本の手に歸するやうなことになるならば、蘭印それ自體としては殆んど戰鬪力を持たないのであるから、當然我が方の要求を全面的に容れるこ

とよならう。しかしシンガポールが健在であり、その上英米の艦隊がこゝへ入りでもしたなれば、蘭印は俄かにその腰を強くして、露骨な敵性を我が國に向つて示すものと思はなければなるまい。

日本としては、フィリッピンの場合と同様、蘭印軍と戦はなければならぬ理由は何一つ持つてゐない。第一戦争の相手として考へるには、こゝは餘りにも無力である。彼等は今國防強化に大重となり、オランダ政府の聲明によると「蘭印艦隊は、日本艦隊の進攻に對し、他國の援助あるまで之れを防禦し得るやう強化されるべきである」と云つて、盛んに海陸の防備設備を強化してゐるが、我が國としては甚だ迷惑なことである。第一我が國が理想としてゐる東亞共榮圏の確立は、武力に依つて東亞諸國を合併するやうな西洋流のものとは根本的に違つてゐる。お互が同一系統の民族であり、一環の地理的環境に寄つて結ばれてゐることをよく了解させて、その了解の上に、兄弟のやうな睦まじい關係を築き上げやうとしてゐるのであるから、蘭印と戦ふなどは全然この理想に反するものである。

## 蘭印の肚

しかし遺憾乍ら蘭印當局には、日本のこの眞意は、今日まだ殆んど理解されてゐない。依然として英米依存勢力が全島嶼を被つてゐると云つてよい。尤も土人その者は斯うした國際情勢の動きに對しては風馬牛である。蘭印當局は土人に眞實を知らさず、それを常に元始的な姿のままに置いておくことを以て昔からの方針としてゐるから、土人は怖らくその大部分がまだオランダ本國の無くなつたことをも知らないかも知れない要するに、一にも二にもオランダ人に依つて牛耳られてゐる蘭印政廳の動き如何にかゝつてゐるのである。

元來軍事的に極めて脆弱であつたオランダ本國そのものが、歐洲列強の勢力均衡によつて、漸やくその獨立を保つて來た國である。云はゞ他國のお蔭でオランダそのものが存在し得たのである。だからこの度のやうに、一度そのバランスが崩れると、アツと云ふ間に洶沫の如く踏み消されてしまふ。この他國依存の本質的な國是は、そのまま各領土にも輸入されてゐる。蘭印が英米に依存するのはその國是に從つてゐるまでである。だから、何らかの材料によつて、英米が日本に強硬な態度を示し始めると、蘭印の對日態度も筋の返す如く硬化して來る。口の悪い人は

この地方を稱して「山彦的存在」だと云ふが、事實そんなところがある。

だからその反對の場合には、日本にとつて可なり有利な態度が示されるであらうことも期待出来るのである。現に泰・佛印紛争の調停問題に絡んで、英米の裏面工作が執拗に續けられたにも拘はらず、遂に日本の居中斡旋に依つて圓滿安結を見た當時は、それまで兎も角反日的なゼスチユアを示したり放送したりしてゐた蘭印が、急に黙り込んでしまつた事實もある。しかし英國が決定的に敗れない以上、蘭印が英米ブロックの一環に加はり續けるであらうことは想像出来る。殊に日本が三國同盟に依つて、オランダを歐洲大陸から追ひ出した獨逸と手を握つてゐる限り、悪く云へば彼等にとつて日本は仇の片割れであるかも知れない。これを押して經濟交渉を續けやうとするのであるから、感情的に見たなれば到底物になるべき筈の話ではない。しかも日本は決して將來に失望してゐないのである。これは感情を云々しては居れない大事の經濟關係があるために外ならない。これに關しては他の方面で詳しく發表したこともあるので、こゝでは省略するが、要するに蘭印は豊富な資源と産物を持つ地方であるが、今その賣捌口に苦しんでゐる。一方國內の生活必需品を相當日本その他から輸入しなければならぬ立場にある。彼等の賣りた

いものは日本が買ひたいし、日本の賣りたいものは彼等も買ひたいのである。この必要さは、いつか必らず英米の妨害をはねのけて、日蘭會商を圓滿締結に導くであらうといふ望みがある。そのため、外交官中でも最も氣の永い定評を持つ芳澤前外相を派遣して、焦らず慌てず交渉を進めつゝある現在なのだ。

### 敵の重要な遊撃戦基地

この交渉の成立を最も怖れるのは米國である。若しこれが成功したならば、折角振り廻してゐる傳家の實力たる對日禁輸の威嚇が全然利かなくなる。最も日本の痛い處を押へたつもりで當てが全然外れてしまふ。その上に今度は日本からゴムと錫とを抑へられて、自動車工業や罐詰工業その他に甚大な打撃を蒙ることになる。そればかりでなく、シンガポール移駐への大事な足場をも失ふことになる。英國にとつては尙更一大事である。如何に我國と蘭印との提携が經濟的なものであるとは云へそれは英國の植民地たる濠洲の鼻先で行はれることである。而も日本の蘭印進出はシンガポールと濠洲との連絡を完全に遮断して、永年の宿望たる濠洲地中海政策を放棄しなければならなくなる。従つて、シンガポールそのものゝ存在も、大いに影の薄いものとなる。これらを綜合して、

結局英國勢力の東洋退却と云ふ大悲劇をも生み出すに至るのである。英米各々困る理由は異にしてゐるが、困ることは御同様である。だから何としてもこの話はブチ壊さなければならぬとしてゐる。

そればかりではない。若し太平洋戦争が起つた場合、こゝはいろんな角度から云つて、英米にとつては無くてはならぬ重要な作戦地である。第一に考へてゐることは、東西三千キロ、南北千キロに亘る廣大な海面に、碁石を撒いた如く散在する無数の島嶼を、彼等の重要な遊撃戦基地にせんとすることである。大小無数のそれらの島々は、潜水艦や輕艦艇の基地とするにはお釣が来る程多くの條件を備へてゐる。こゝへ、英、米、蘭、濠四ヶ國の潜水艦を潜ませ、日本の南方貿易路と、その海軍とを狙はせたなれば、必らずや豫想以上の大收穫を得られやうと思つてゐる。殊に蘭印の島嶼は殆んど大部分その海岸線に珊瑚礁を持つてゐることゝ、その海が一體に遠淺であることは、日本の艦隊の行動を甚だしく不自由にするといふ天然の要害となつてゐる。この恵まれた條件は、彼等の對日攻勢にとつてまことに天佑的なものである。理由はまだ外にもいろいろある。屢々述べて來たやうに、米國艦隊の南方迂迴路の足場としてのそれ、濠洲及びニュー



ジララントが、自國の安全のために蘭印の現状維持を切望してゐるそれ、米國からフィリッピンへの空輸航路として、是非ともこゝを確保してゐたいそれ等、擧げ來れば際限がない。兎も角日本と英米とにとつて、蘭印が日本の共榮圈内に入ると入らないとは、天地雲泥の差が生じるのであるから、どんなきつかけでこゝに爆發が起らないとも限らないのである。

### 蘭印をめぐる海軍力

その萬一の場合のために、戰場となる日の蘭印のことを考へておきたいと思ふ。元來蘭印艦隊は極めて微弱なものである。それはオランダ政府も言明してゐる通り、蘭印諸島の巡邏に任ずることが殆んど全部の任務であるから、その範圍内の僅かな軍艦しか持つてゐない。即ち輕巡洋艦三隻、裝甲艦一隻、水雷驅逐艦四隻、潛航艇母艦一隻、潛航艇A八隻、B十五隻、水雷敷設艦六隻、海軍用船五隻、海防艦二隻、測量船二隻、これが蘭印艦隊の全部である。

陸軍は土民兵約三萬が各島嶼を警備してゐるが、これはその微弱な空軍と共に殆んど駐在所の如き役を勤めてゐるに過ぎぬ。何れにしても蘭印には戰鬪力と稱する程のものはないと思つてよい。従つて蘭印の國防力は、英米何れかの海軍方並に空軍力の援けを得るにあらざれば、無き

に等しいものである。このことは世界衆知の事實であるから、從來英國の東洋艦隊は、その任務の中に蘭印の防備といふ一項目を設けてゐる。それへ今度は米國が一枚加はつて來たのであるから、蘭印としては「日本怖るゝに足らず」といふ強氣になつて來るのも無理のないところだ。

### 蘭印の攻防戦

さてこの蘭印を中心として日本と英米との間に戦争が捲き起されたら、どんな形になるであらうか。これに就ては例の樂觀論者キラルファイが詳細に戰略を披露してゐるから、寧ろこゝにそれを拉し來つて味つて見る方が興味があるかも知れない。勿論キラルファイの云ふ通りに事は必ずしも運びはしないであらうが、斯う云ふ觀察もあり、斯う云ふ觀察に従つて彼等の成算も立ち得るといふ點を參考にして貰ひたいと思ふのである。

彼は蘭印政廳のあるジャバ島の攻略戦が、戦争開始の序幕であり、こゝの攻防戦が戦争の山であるとして見てゐる。先づ彼は斯う云ふ。

「私は、日本はその主力艦と航空母艦とを、蘭印の狭小な海面に持つて來るやうな冒險はしないだらうと述べたが、これら日本の主力艦が、蘭領印度の北方に足留めせられることは、アメリカ

カ艦隊のハワイ集結によつて、いよいよ必至となつて來るのである。」

と、先づ例に依つてアメリカのお蔭を振り廻すことを忘れない。

「艦隊行動に缺くべからざる、航空母艦搭載機數に於て、アメリカが日本に對し、四百五十對三百二十五の優勢を保つことを考へるとき、日本は航空母艦一隻でも、南の海に割くの危険を冒すまでには、よほど考へなければならぬ。然るに、蘭印防備に利用し得べき、オランダ、イギリス、フランスの飛行機は少くとも三百機——フランスの有力な權威者は、五百機といつてゐる——あるから、日本が南進するには、航空母艦全部が必要なのである」

つまり彼に云はせると、日本は空より蘭印を攻める途を殆んど失つてゐると云ふのだ。しかし彼の計算は徹頭徹尾航空母艦のみを目標にしてゐるところに誤算がある。日本軍が、必要とあればボルネオの一角に有力な空軍の前進根據地を占領出来ないと云ふことが想像出来ないのであらうか。殊にボルネオはその北三分の一が英領であり、南部の残りが蘭領である。我が國としては、之れを攻めるに何の遠慮も要らぬ交戦状態に入つてゐるのであるから、このことは當然豫定の中に入れて然るべきであらう。

### 日軍擾亂の備へ

次に彼は驅逐艦と潜水艦の戦闘を論じてゐる。當然之れは大いに考究されて然るべき問題であるから何等異とするに足りないが、たゞその野放圖な樂觀論に對しては、聊か毒氣を抜かれるのである。即ち云ふ。

「防禦軍方が驅逐艦と潜水艦とを缺く弱點は、アメリカが、これらの艦艇ならびに巡洋艦を、妨害のない、うんと離れた航路を経て——サモアからダーウイン或は南方濠洲を経由して——これを派遣して援けることに依り、解決することが出来るのである。」

この點に就て最も重要なものは、フィリッピン群島の戰略的地位である。こゝはその多くの内海と珊瑚礁と淺瀬とに依つて、世界最大の天然航空母艦をなしてゐる。海軍の哨戒機は、フィリッピン群島の陸軍機を援けて、西方の廣い海上を見張りすることが出来る。この海上にある日本の新南群島の理論的境界は、東經百十七度の線に沿つて、英領ボルネオの尖端を掠めるものである。

フィリッピン群島及びグナム島は、蘭領印度に對する當然の飛石をなすバラオと日本との間の交通を、側面から脅やかすことが出来る。蘭領印度の空軍勢力をフィリッピンとアムボイナとに

集結すれば、日本の蘭印攻略の企を、無効に歸し得ぬまでも、大いにこれを攪亂することが出来る。同じ考へ方によつて、たとへシンガポールが無くとも、フィリッピン群島の防備に當るアメリカ艦隊にとつて、最も有利なる基地は、蘭領印度にあるといふことが、やがて明らかになる日があるであらう。」

この通り行けば、蘭印の制空權はすべて彼等のものであるから、日本の進撃は非常に困難を極めるであらう。しかしこの論には、矢張り多數の「若しも」が隠されてゐる。若しもグワムが日本の占領に遭はなければ、若しもフィリッピンが日本の攻撃を受けなければ、若しも日本がシンガポールを奪取しなければ、若しも日本の空軍が何等の活動をも出来なければ、等々がそれである。

### 我が陸軍の任務

蘭印での戦争は可なり複雑である。何しろあの無数の島嶼の中から、そかりでも容易なことではない。しかもその占領した各島々との間の交通連絡を常に完全に保つためには、占領する時より以上の氣骨が折れる。この戦争に於て、地上戦の悽愴な場面を想像する

ことは出来ない。しかし多くの島を占領するには、矢張り相當の陸軍を必要とすることは無論である。占領そのものだけなれば海軍の陸戦隊だけでも間に合ふであらうが、占領後の治安維持その他はどうしてもこれを陸軍に委ねなければならぬ。けれどもジャバ島そのものが日本の手に歸したなれば、怖らく蘭印政廳は自ら進んで武装解除を申出でることも考へられるのである。だからジャバ島の首都バタビア附近には、相當の防備が施されてゐる。

「バタヴィアの郊外は、海岸砲隊、高射砲隊に依つて嚴重に防備されてゐる外、三個大隊の歩兵が駐屯してゐる。そのマンリツヒヤー銃は、あらゆる點で日本の有阪銃に匹敵するが、そのほかリユウイス及びシユワルツローゼの輕機關銃、重機關銃、手榴彈及びマドセン機關銃を以て武装してゐる。騎兵隊及び自轉車隊のほかに、四時のポフォオース榴彈砲、おそらく四・八時のクルツ砲、六時の機械化砲、並に四・七種のビュラー對戰車砲を持つてゐる。現在の指揮官はもと砲兵隊の檢閲官であつたから、砲兵隊の指揮はよく行はれるだらうと思ふ。

スマランには第五聯隊が駐屯してゐるが、それから東の方、ジャバ島他の端にストラバヤがある。この都市の周圍は、沼澤地と、運河と、湖沼との迷路だ。この都市は攻撃軍が海岸砲によ

つて守備されてゐる狭い入口を突破するの危険を冒さざる限り、海上から損害を與へることは不可能である。こゝには、蘭印群島中最も強力な砲兵隊が部署して居り、他に歩兵隊、高射砲隊が一大隊ゐる。海軍の施設としては、修復所、最大巡洋艦を容るゝ乾ドック、最重量のタンクヤ可動砲を揚ぐるに足るクレーン船、精油所及び多量の燃料貯蔵所がある。オランダ艦隊の軍艦は、全部といはずとも、その若干は既に聯合軍兵力を補充するため、こゝに送られてゐるかもしれない。

以上、キラルフイの説明をそのまま借用した。だから、ヂヤヴァでは多少の陸戦が行はれるであらうが、その他は殆んど抵抗らしい抵抗をなし得まい。或る米國の軍事通は、日本軍がヂヤヴァへ上陸したなれば、これを彼の有名な火山脈地帯へ誘導して、一舉に反撃を敢行、殲滅的打撃を與へることも不可能ではないと説いてゐるが、この誘ひに乗らなかつた場合、糧食と彈藥の補給路を失つた彼等がどんな運命に逢着するかはこゝに書くまでもないことである。

### 近代的火遁の術

我が國が蘭印に最も多く期待してゐるものは石油であることは衆知の事實である。そこで日本は先づ油田の所在地を襲ふであらうと云ふこと

が、英米側に於て想像されてゐる。元來この諸島中の石油産地は可なり廣範圍に亘つて見出されるが、その中最も油田の數が多いのはボルネオである。その次にスマトラ、ニューギニア、ヂヤヴァと云ふやうな順序になるが、若し彼等が豫想するやうに、我が國が油田の獲得を目指すものとしたら、地理的關係から云つても、最初に手を下すのはボルネオに相違ない、と彼等は考へてゐる。従つてこの島の各地にある油田は、いざとなつたなれば直ちにその油井から精油所、油送管、吸上機等の全設備を爆破する用意を整へてゐると云はれてゐる。これは日本にとつては、人質の咽喉へ匕首を突きつけられてゐるやうなもので、脅しとしては仲々効果的なものと云へるであらう。

しかし我が國にとつて大切な油田は、蘭印にとつては尙一層大切である。だからこれが自爆は容易に決行出来るものではない。彼等は何とかして、援軍が到着するまでの間、自力で敵を防がなければならぬとして、この地方の防備強化に大意である。現在生きてゐる油田は殆んど全部海岸地方にある。これはまだ奥地の踏査が充分行はれてゐない爲めに外ならない。従つてこれらの油田は、海上からの攻撃に對して備へさへすればよいのである。陸上即ち背後から攻撃するこ

とは、名物の大密林と沼澤地の存在のために、如何に勇敢な軍隊と雖も殆んど不可能である。この自然の條件を取り入れて、油田地方の防備には萬全を期してゐるが、その中に奇想天外的防備法がある。ガンガ・ガンガ油田で計畫してゐるものがそれだ。即ち彼等は攻撃軍に對して出来る限りの防禦を試みるが、愈々力盡きた場合には、その豊富な石油を強力なポンプで以て近くの河へ流しこみ、それへ火を放つて河は勿論河口一帯の海上をも全部火の海とする計畫である。どうやら有りそうなことであるからこゝへ誌したが、若しこれを實行したとしたら、正に近代の火遁の術であつて、攻撃軍の方でも少なからず面喰ふことであらう。しかし石油は永久に燃えてはゐない。油の切れ目が命の切れ目であつて、これも一場のお愛嬌話に終るかもしれない。

### 巧運よりも拙速

以上の通りで蘭印での戦争が始まつたとしたら、それは飽くまで英米濠蘭の聯合軍との戦ひである。特にその中から蘭印だけを取り出してこれとの戦争を描くことは殆んど出来ない。それだけにこの地方での戦争は仲々入り組んだものにならざるを得ない。結局蘭印での衝突は、全面的な太平洋戦の形をとるべき序曲である。こゝに起つた一つの波紋は遠く英米の海岸にまで及ぶことになる。この場合シンガポールが健在であつ

ても不可ない。比律賓が敵の根據地となつてゐても不可ない。グワムが生きてゐても不可ない。日本は何を措いてもこの三つの敵の據點を潰して置く必要がある。しかもそれは、英米聯合艦隊の勢力が到着してからでは遅すぎるのである。彼等が来るまでに、少くとも彼等がその根據地へ入れないだけの先手を打つて置かなければならない。

これに對しては、所謂巧運よりも拙速を尙ぶものである。相手を舐めてかゝるといふことは絶対に禁物であるが、冷靜に見てこの三地點は、我が本格的な攻撃に堪へ得ないところであるから、機先を制するためには多少の拙速主義的行動も已むを得ないと考へられる。この三據點を制すれば、勝利は確實に我が方の手に歸する。

### 斷乎保障占領せよ

既に述べた如く、我が國としては、蘭印を相手に戦争する氣は毛頭ない。しかし、英米の魔手が現在以上にこの地方へ及んで、我が經濟線を封鎖するやうな意圖に出て來た場合は、どうしてもこの地方を中心として、資源確保のための戦争をしなければならぬのである。蘭印の向背は全く我が國の死活問題であるからだ。若し蘭印が全面的に日本と握手するなれば、我が國の經濟は今後五年や十年の長期戦が續かうとも、

決して心配することは無い。その反對に英米に依つて蘭印が抑へられてしまつたなれば、大變なことになる。斯うした非常に重大な鍵を握る地方であるから、若し現在折衝中の日蘭會商が失敗に歸し、英米がその機に乗じて策動するやうな氣配が見えたなれば、蘭印に對しては聊か氣の毒ではあるが、我が國はその生存のためにこの地方へ兵を進めざるを得なくならう。あらゆる手を盡し、眞情を吐露し盡しても了解出来ない相手に對しては、そうするより外方法がないからである。若しそうなつたなれば、日本は怖らく斷々乎たる決意と態度とを以て、蘭印の保障占領に乗り出すこととならう。この場合の責任も亦當然英米側の負ふべきものであるは論を俟たない。

幸ひにして佛印對泰の紛争は圓滿裡に解決した。我が國はこのことに依つて東亞の安定勢力たる貫録を如實に示し得たのである。この事實は當然英米のみならず蘭印に對しても、何等かの反響を齎らすべきは必定である。その反響が、日本と蘭印の將來のために、幸福と繁榮とを持ち來るものであることを衷心望んで止まないものである。

## 香港と濠洲の苦境

### 重慶の支店香港

香港にユニオンジャックの旗が飄つてから既に百年にならんとしてゐる。嘗てのこの地は、日本にとつて無言の威壓を加へ得るだけの力を持つてゐた。支那も周圍僅か二十五哩のこの小島のために、永年脇腹へ短刀を翳されたやうな苦しみを味はされて來た。しかし時代の風雨は、光輝燦として東洋を睥睨して來た英國旗をして、いつしか色褪せ生地破るゝの凋落を與へんとしてゐるのである。

世界の常識となつてゐるが如く、現在の香港は完全に重慶政府の出店たるの觀を呈してゐる。試みにこゝで發行されてゐる新聞を見るなれば、英字紙と云はず華字紙と云はず、すべてこれ重慶のために發行されてゐるやうな感じを抱かされる。少くとも重慶と英國との不利になるやうなニュースは一行と雖も見出すことは出来ない。若し香港以外で發行される新聞なりニュースなりを見聞しなかつたなれば、こゝでは常に重慶が日本軍を壓迫して居り、英國が歐洲の天地で大捷を博してゐるのである。日本の經濟的行きづまりは極點に達し、最早事變遂行の餘力殆んど

なしとなつてゐるのである。

これは一例に過ぎないが、天下の輿論機關を斯様に歪曲して迄誘導せんとする香港政廳の意圖が如何なるものであるかは、怖らく兒童と雖もこれを推測するに難くはなからう。とまれ重慶と香港とは緊密なる提携の下に、あらゆる情報を交換し合ひ、あらゆる便宜の交換を行つてゐる。純然として日本の向ふ側に立つ存在である。

### 無援の孤島

支那事變の初期までは、飛ぶ鳥落す勢力を持つてゐた香港も、我が南支作戦の開始と、支那全沿岸の封鎖を實行されるに及んで、急に凋落の色が濃くなつた。それまではシンガポール軍港の前衛として、又英國支那艦隊の根據地として、戦略的にも南支那海を牛耳り、日本海を脅かす重要な地點であつたが、我が海軍の西沙群島占領に依つて、先づ第一にシンガポールとの連絡線を遮断され得る脆弱性を負はされてしまつた。このことだけでも香港にとつては致命的な打撃であつた。しかも尙その上に海南島の占領、新南群島の占領、泰、佛印と我が國との友交關係増進等で、今や香港は完全にシンガポールと切り離された存在となつてしまつたのである。

斯うなつては艦隊根據地としての香港の價値は殆んど失はれたと云つてよい。たゞ我々が多少とも心を使はねばならないことは、若し太平洋戦争が起つた場合、こゝが潜水艦の基地として利用されるときのことのみである。そのことは有り得るものと思はなければならぬ。彼等がここに若干の潜水艦と驅逐艦とを潜伏させて、これを積極的に活動させたならば、我が西方貿易線はフイリツピンのキャヱイテ軍港とこゝとに挟撃されることとなり、完全にその機能を喪失する惧れがある。そればかりでなく、南支作戦部隊及び佛印駐屯部隊との連絡もまた断たれざるを得ない。更にまた彼等は日本海へまでも潜入して、我が大陸への交通線をも脅やかす可能性が多分にあるわけである。

### 香港は第二の旅順か

こゝに於て我が國は、若し英米と戦ふやうになつたならば、當然香港の占領をも考慮に入れなければならぬのである。彼等にしても、これは豫て覺悟の前であるから、防備おさ／＼怠りはない。この香港の防禦設備については、英國のみならず、米國そのものも相當高く買つてゐるやうである。「攻撃が香港を目して旅順と同一視するなれば、おそらく取り返しのかぬ誤算を招來するであらう」などと云つて、

盛んに香港の難攻不落を唱へてゐる。この點英極東軍總司令官ボーバムに於ても符節を合はしてゐる。彼は昨秋香港を訪ねた時

「香港が手易く來攻軍の手に落ちると考へるものがあつたら、それは大きな誤謬である」と、同じやうなことを云つてゐる。しかしながらこれは多分に眉唾ものである。成程香港がその防備のために、眞剣に各種の工事を行ひつゝあることは、その都度情報が入りつゝある。だから彼等三個大隊（現在或ひはもつと増員されてゐるかも知れない）の守備兵と、數萬の義勇兵とが、ここを死守するつもりであつたならば、或ひは第二の旅順となるかも知れない。しかし旅順の場合には奉天大會戰へ迄、日本軍を牽制しておくといふ戰略上の重大な使命が與へられてゐた。だからあそこまでの死闘を續けたのである。然るに香港の場合は、それだけ大きな使命を果し得る何物をも持つてはゐない。愈々太平洋戰爭が起つたならば、我が軍は前述の各島嶼を以て完全に香港の後方連絡を遮斷し、その艦艇を港内深く追ひ込んで、一步も外へ出させないやうにするは必至である。そうなつたならば、彼等は自力以外に恃むべき何物をも持たないのだ。英米海軍の若干が、香港救援のために南支那海へ突入するなどは、自ら求めて死地に赴くの類であつて、

到底なし得るところではない。さればと云つて陸地からの救援なり遁走路なりを求めやうとしても、對岸の九龍半島は疾から皇軍の手に依つて抑へられてしまつてゐる。全く二進も三進も動きが取れない窮地へ追ひ込まれる。

斯うした何の目標をも持たぬ孤壘を守つて、死を賭しても敵の攻撃を支へやうとする勇氣が出るかどうかは甚だ疑問である。勇敢さを以て鳴るドイツ兵ですら、青島要塞を一ヶ年支へることすら出来なかつた。これも矢張り本國の救援が全然絶望だつたからである。殊に香港には約百五十萬の人間がゐる。この非戦闘員をも抱へ込んで、果してよく彼等が長期の籠城戦に堪へ得たならば、それこそ口を極めて賞讃して可なりであらう。

### 木に竹ついだ要塞

香港市街は丁度我が神戸市のやうに、背後に山を扣へ、その山裾の海岸沿ひに細長く連らなつた街である。この全山が岩山である關係上空襲避難洞を作るにはお詭へ向きの地形であつて、この點攻撃軍の空軍にとつては聊か苦手であるかも知れない。勿論香港の攻圍戦は極めて短期間にその目的を達しなければならぬから、その攻撃は海空陸の三方より猛烈を極めるであらうと豫想される。九龍半島より南下する陸軍は、



對岸より巨砲を以て目星しい軍事施設を粉碎せんとするであらうし、海軍はまたスタンレイ灣の沖に姿を現はして猛攻撃を加へるであらう。更に海陸の空軍はこれに協力して港内の敵艦船や地上設備に對して巨彈の雨を降らすであらう。

就中香港當局の最も怖れるのは空軍の攻撃である。彼等は屢々會合を繰返して、その都度香港の對空設備が極めて薄弱不完全なることを検討し合ひ、目下その方面の工事に大重である。ペトン製收容人員三百名と云ふ共同避難所は既に八十を算し、山腹や坂路には至る處避難洞が掘られてゐるとは、最近齎らされた情報である。香港市外を護るが如く聳える岩山の要所々々には高射砲が据付けられ、ミルス灣の沿岸には移動式防空砲も備へられてゐる。

要塞砲は殆んど地下砲臺となつてゐて、極力空からの攻撃から逃れやうとしてゐる。而も之等の砲臺は、海と陸と空とを同時に護り得るやうな要地を撰び、相當堅固に作られてゐる模様である。その他啓徳飛行場の夜間着陸設備だとか、重爆撃機の増加だとか、九龍半島と香港島とを結ぶ海底トンネルだとか、錦田に新たに飛行場を開設するとか、島内至るところに軍用道路を新設するとか、正に物々しいことの限りである。

これがためには約一千萬磅の巨費を投ずる豫定だと云はれてゐるが、本國危急存亡の際勿論これは大削減を餘儀なくされてゐるであらう。ともかく右の通りで、その眞剣さに於ては大いに注目に價するものではあるが、何分事態こゝに至つてからの、一種の泥繩式應急措置であるからこれら各種の設備は彼等が自慢する程のものでないことは確かである。要するに百年前から殆んど使ふこともなく苔むして來た舊式砲臺へ新たに二十世紀のベトンを塗り込めたものであつて、一種の木に竹をついだ不備は免れるわけには行かない。

### その海軍力

次はその海軍力であるが、本年三月九日、現地より齎らされた報道によると、殆んどガラ明きに等しいものゝやうである。元來こゝには二隻の巡洋艦と四隻の驅逐艦、八隻の潜水艦と十隻の補助艦とが常置されてゐた。それが今度の歐洲戦のために、本國の作戰に呼應し、巡洋艦と潜水艦の全部がシンガポール以西へ移動してしまつてゐるので、港内には艦影實に寥々たるものだと云はれる。従つてその海軍力は、新たな補給がない限り問題にはならぬ。

たゞ一つ特に眼を引くのは、時速三十五ノットを誇る快速水雷艇である。どれだけの數が用意

されてゐるかは知る由もないが、四六時中この奇襲艇が波を切つて點在する島々の間を警戒してゐる。若し香港の海軍力にして警戒を要するものありとすれば、隻數不明のこの快速水雷艇あるのみだらう。彼等はひそかにこれに恃むところがあるやうである。さもありません、腐つても鯛だ。世界に誇る海軍國の出張所である以上は、何等かの形で敵に攻撃を加へ得なければ、さらでだに高い彼等の自尊心が満足しないであらう。

### 攻略は鎧袖一觸

さて、日英米の三巴戦が始まつたなれば、日本軍司令官は直ちに香港總督に對して降服勸告狀を發するであらう。香港の地位は如何なる角度から見ても之れに價するものである。無用の殺陣を展開することは、我が武士道の名折れともなる。しかし、不幸にして香港總督が之れを肯んぜず、健氣にも「籠城死守作戰」を決意したなれば、最早止むを得ぬ仕儀である。我が軍は直ちに行動を起して、前述した海空陸の立體戦法を以て、一舉に撃滅の態勢をとるであらう。

香港の要塞は市街地を護る位置に最も重點が置かれてゐるから、軍艦砲を以て之れを砲撃するには聊か都合が悪い。殊に香港とその附近の島々とが作る水道には、今日既に一哩乃至二哩に亘

る機雷原が設けられて居り、且つこれらの島にも夫々砲臺が設けられて居るから、海軍は先づこの方面から敵を沈黙せしめてかゝるものと思はれる。その間租借地境界附近の我が陸軍は直ちに行動を起して九龍市を占領し、そこより一衣帯水の向ふにある香港市街に向つて巨砲の猛射を浴せかける。海陸の空軍はその基地に少しも不自由しないから、入れ替り立ち替り、それこそ息をもつがせぬ猛爆撃を加へる。機熟せりと見たら、海軍もまたスタンレイ灣、レバルス灣等に上陸作戰を敢行して、各砲臺を風潰しに占領する。要するに香港は、英國が如何に金城湯池だと自薦しても、それはシンガポールなりセイロン島なりから有力な援軍のない限り、所詮は無援孤立の一孤壘に過ぎない。猛烈果敢を極める我が軍の攻撃の前には、到底永くこれを維持出来るものではないのである。

### 濠洲戰意なきか

香港と共に我々の關心を引くものはオーストラリア即ち濠洲である。既に隨所で觸れて來た通り、こゝは英國の濠洲地中海政策の底邊をなす存在であり、アメリカ艦隊のシンガポール移駐に就ても、その寄泊地として必須の價値を認められてゐる。そればかりでなく、我が國が理想とする東亞共榮圈の外廓をなす點で、非常に大き

な利害關係を持つてゐる。

地圖を見るまでもなく濠洲と蘭印とはお互に身つき合せた近くにある。然も濠洲は英國の屬領であり、蘭印はその英國に心から頼つてゐる。斯うした密接不離の關係にあるから、濠洲の動向は、そのまゝ大きく蘭印へ響いて行く。その響きが良ければ、我が國にとつて結構なことではあるが、反對の方向へ走る場合には、一寸そのまゝには捨て置きかねるといふのは自然である。

ところで現在の濠洲は、果して日本に友好的であるかどうか。メンチース首相は

「太平洋で戦争に訴へなければ解決のつかない問題は一つない」と云つたり

「濠洲は日本に對しても、他の諸國に對すると同様、平和裡に國交を續けて行きたいと望む以外の何物をも抱いてはゐない」

などと、盛んに放送してゐるが、濠洲が辿つて來た今日までの経路や、現在行はれつゝある幾つかの事實は、遺憾乍らこの聲明を額面通りに受取ることを躊躇されるのである。我が國が濠洲に戦はなければならぬと考へたことは、過去に於ても現在に於ても斷じてない。しかし濠洲

は、日本が日露戦争に勝利を得てから以後と云ふものは、何かにつけて日本の南進政策を氣に病んで、妙に我が國を自眼視する態度を採つて來た。直接その版圖内に強力な軍備を有しない國としては、北の方におそろしく戦争に強い國があることは、少なからず神經に觸るであらう。それだからと云つて、疑心が暗鬼を生んで、今日のやうに不必要に我が國の心を衝くなどは、濠洲のために採らざるものである。

### 影に怯えて

我々がどうかと思ふことの第一は、濠洲がニュージールランドやカナダ等と手を携へてホワイトハウスへ赴き、そこで米國との間にそれぞれ親善條約を結んだことである。勿論之等のすべての國はアングロサクソンの傘下に集まつてゐるものであるから、日獨伊三國同盟に對抗すべく、牛は牛づれで相寄つたものと云へばそれまでであるが、濠洲（ニューヂーランドもそうだが）の立場は、カナダなどとは全然違つてゐる筈である。

この國は云ふまでもなく西南太平洋上に浮んでゐる。従つて、西太平洋に戦争を見ることは最も怖ろしいのである。自國の軍備が確かりして居れば話はまた違ふが、少くとも今の状態では

丸裸で、矢弾の中に寝ころんでゐるやうなもので、交戦國の双方から、逸矢や、逸彈を見舞はれる惧れが多分にある。そこで、若し西太平洋に事が起るとすれば、差當りその立役者は日本とアメリカとでなければならぬ。だとしたならば、濠洲はその地理的關係から云つて、何れに組する方が安全率が多いかを考へなければなるまい。これを裏返して云へば、濠洲は日本と結び、西南太平洋上に強固な陣營を築くことに依つて、日米戦争の危機を避け得ると共に、從來の日本への不安を一度に解消し得るといふ一石二鳥の効果を擲めるのである。それを英米へつまらぬ義理立てをして遂にその一員となつてしまつた。返す返すも残念な次第である。

そのため正直に云へば、感情的には濠洲は英米と同じ様に、我々に扱はれなければならなくなつた。そのことは一層濠洲の不安を増大せしめることにもなつてしまつた。要するにロンドン製極東危機説に現實性を與へた一部の責任は、濠洲のこの英米媚態にあつたと云ふも過言ではない。一體濠洲が何の故に日本の影に怯へるのか、我々には全く合點の行かぬことである。日本は濠洲の羊毛や小麦等を欲しいと思つたことはあるが、未だ且つその領土を欲しいなど考へたことではない。羊毛を賣つてくれ、その代り君の方の必要な品物はどん／＼賣りませう、これが日本

の眞意である。それをどう感違ひしたのか、羊毛を賣るのは御免だ、日本の物を買ふのも御免だと、ひどく駄々をこねて我が國を手古摺らせたことは、未だ讀者の記憶に新たなるところであらう。

例へ身は英國の屬領であらうとも、その本國から遠く離れて位し、而も東洋の特殊な經濟戰に挺身して活躍してゐる堂々たる「自治領」ではないか。一々本國の顔色を窺つて物事を處理しなければならぬ程薄弱な存在ではない筈である。

### 何のための派兵

その次に我々の腑に落ちないのは、歐洲の戰線へ遙々軍隊を送つてゐることである。尤も歐洲への派兵は前大戰の時の前例がある。あの時は三十三萬の陸兵を送つて大いに本國を助けた。しかしあの當時と今度とは、第一東洋の事情が非常に違つて來てゐる。前大戰では日本は英國の味方であつた。だから濠洲はそれだけの大軍を送るに就てもい／＼の便宜が與へられたし、英國艦隊の多忙に依つて、濠洲の警備が手薄になつた部分は、間接的に我が國からそれを補ふて貰ふことも出來た。しかし今度はまるで事情が違つて來てゐる。昨日の味方は今日最早敵である。かてゝ加へて太平洋の波は決して穏やかでな

い。この際なればこそ濠洲は大いに自重して派兵を見合はすべきであつた。國內でも贊否兩派に別れて大紛争を起した程の問題であるから、これは一應も二應も考へるべきであつた。にも拘はらず彼等はいち早くその陸兵を北アフリカのリビア戦線へ送つて、日本の盟邦たる伊太利と戦はせるやうなことをしてしまつたのである。

そればかりではない。極東危機説が傳はり、佛印と泰との紛争が起ると、これまた陸兵をすぐつて直ちにシンガポールへ送つた。我が國にとつては、何れも甚だ面白からざる事ばかりである。

「太平洋には武力で以て解決しなければならぬ問題は何一つ存在しない」と云ふ口の裏で、武力をどんく船に積んで、わざと海外輸出をやつてゐる。これでは濠首相を信用出来ないのは當り前でせうといふことになる。

### 平戦の二筋道

尤もこう云つたからとて、我々は敢て濠洲が戦争を求めてゐるといふのではない。敢て日本を怒らそうとしてゐるといふのではない。彼が戦争を怖れることは、昔も今も少しも變つてはゐない。否寧ろ、英國海軍の援助が當てにならない

今日の方が、遙かに戦争を怖れてゐると云へるであらう。今濠洲は二億七千萬濠洲ボンド（約三十二、三億圓）の大軍事豫算を通過させて、軍需工業第一主義の、この國にとつては未曾有の大軍擴を始めてゐるが、これとても勿論自國防營のための擴張であつて、こればかりの軍擴では到底攻勢をとるわけには行かない。だから我々としてはこの軍擴に格別神経を尖らす必要はないのである。

それよりも、濠洲の苦境に對して大いに同情しなければならぬと思つてゐる。氣の弱いこの國の政府は、依然として英本國に引すり廻されてゐる。それかと云つて、東洋の不安に對して、本國からは一本の安全ピンすら期待出来ない。致し方なしに兄弟分であるアメリカに頼れば、何となく太平洋が波立つて来る。さればと云つて日本は永年の商賣上のお得意であり、今後とも何とかして有無相通じたい。勢ひ濠洲としては、當らず障らずの八方美人を極めざるを得ないのである。

この弱點を知り抜いてゐるから、米國は強引に抱き込まうとしてゐる。米國の肚では、濠洲を藥籠中の物にして置けば、單にそれだけのことだけでも日本に對する大きな牽制になるばかりで

なく、いざ鎌倉の場合は早速有効にこゝを利用することが出来る。だからルーズヴェルトは今後益々米濠の親密化を計つて、一步も動かさせまいとするであらう。平戦二筋路を歩かねばならぬ濠洲としては、是非なく降るアメリカに袖を濡らすわけである。

### それならそれでよい

それならそれでよい。少くとも現状から踏み出さない限り、我が國としては敢て波瀾を起す必要をも認めない。多少肌馴染まぬものは感ぜられるが、我は我の力を信じ、左様な雑音にはわざと耳を塞いで、出来るだけ多くの物資を交易することに努力する。しかし若し濠洲が日本の眞意と實力とを見誤まつて、今日以上出しゃばつた眞似をして来たなれば、友切丸は鞘走るかも知れない。

例へば蘭印に對して、日蘭會商の妨害的行動をとるとか、米國に潜水艦の基地を提供するとか更にまたボート・ダーウインを米國艦隊の息継ぎ場所にするとかしたなれば、その時こそ濠洲が目に見せられる時であると思はなければならぬ。

大體米國自身が、戦争になつたなれば、日本の海軍は赤道以南へ仲々作戦出来ないといふやうな考へを持つてゐる。これはどんな計算から、割り出したものであるかは知れいが、そうした

考へを持つてゐるから、南方迂迴路なども考へ出したのである。従つてこの考へは、大なり小なり濠洲當局に影響を與へてゐる。そこに、日本を怖れながらも、一面どこかで甘く見てゐるやうな態度が生れて來るのである。我が國としては濠洲のこの考へ方に何等の痛痒をも感じないが、濠洲自身にとつては可なり危険なものを含んでゐる。

### 軍備の全貌

こゝで一寸この國の軍備を見ておきたい。先づその陸軍から述べると、所謂濠洲軍は、本年の一月まで約十二萬の壯丁で編成してゐたが、その中の約十萬人は本國援護のために、アフリカや英本國、或はシンガポール等へ派遣されてゐるから、こゝには殆んど残つてゐない。尤もその後毎月五千人づゝの新兵を募集してゐるが、それにして取るに足らぬ數である。しかも之等の陸兵は全部本國の注文に、何時でも應じ得るやう作られてゐるストックのやうなものであつて、濠洲自身のためには何等の力にもなつてゐない。

海軍は前述の通り、従來は一切本國任せであつた。「英國のエプロンの紐にぶら下つてゐる」と云はれた濠洲だけに、自國の艦艇は殆んど持つ氣も起らなかつたものと見える。しかし近年に

至つて漸くその必要を感じ、目下盛んに建艦準備中である。現有勢力としては一萬噸級巡洋艦二隻、輕巡五隻、驅逐艦十一隻といふ貧弱なものである。差當り沿岸防備の必要から驅逐艦三隻、掃海艇五十隻の新造に着手し、それと平行的に百三十六隻の商船に對して武装を施しつゝある。しかしこれは、その作業完了と同時に、おそらく英本國へ召し上げられるものであらう。斯様な状態では、あの大陸國の長大な海岸線を守ることにすら到底出来るわけのものではない。ましてや戦争などは夢の又夢である。英米が、いざと云ふ場合の用意に濠洲艦隊の勢力をも計算に入れてゐる模様であるが、これは寧ろお愛嬌に近い話であつて問題とするには當らない。

空軍はどうであらうか。流石に國內の地上交通網がまだ充分でない國だけに、航空に對しては相當の準備が出来てゐる。現在約四萬の空軍兵が出来て居り、その中の三萬八千人までが海外へ派遣されてゐる。軍用機も昨年六月で二百餘臺に達してゐたから、その後米國から送られたロツクヒード、ハドソン爆撃機や、英本國から補給された相當數の軍用機などを加算すると、少くとも五百機内外の勢力を保持してゐるであらう。従つて、最も充實してゐるのは空軍であると云へる。しかしこれも陸海軍と比較しての話で、他國に對する攻撃力と云ふ點から云へば、これ

位の力は三等國に屬するものである。

### 我は相手とせず

濠洲飛行隊の中の數個中隊はシンガポールへ送られてゐる。畫龍點睛的な大事などころであるから無理からぬことではあるが、餘りいゝ響を持つ

たぬ報道である。今のところ濠洲は、形式的にも内容的にも完全に英米と共同作戰の態度に出てる。戦争が始まれば、差當り蘭印諸島とこの國との間の海面を受け持つことになるのである。素より敵に對して攻勢に出る力はないが、蘭印艦隊と提携して蠢動すると、多少五月蠅くないこともない。しかし我が國としては、求めて濠洲と戦ふ必要はない。我が國が目標とする東亞共榮圏は蘭印までであつて、濠洲はその外廓的な存在であるから、若し濠洲を何とか料理する必要が生じて、それは共榮圏内の作戰が、一應梟がついてからで澤山である。

それまでに若し何かの弾みで濠洲艦隊が我が國に向つて來れば、この降りかゝる火の粉は拂はなければならぬが、多忙を極めてゐる中から何がしかの兵力を割いて濠洲艦隊を探し出し、これに一撃を加へるなどのことは無用の沙汰である。要するに「我は濠洲を相手にせず」といふ態度を取ればよい。

但しボートダーウィンその他の港灣が、敵艦隊の足場となつてゐる場合は、その地點に限り話は別である。我が軍はその作戦基地を知つたなれば、勿論これを直接的にも間接的にも攻め立て、物の役に立たなくしなければならぬ。尤もこれは濠洲の北部海岸に限ることであつて、その裏側の南方沿岸を敵が利用した場合は、そこまで足を伸ばすことは考へものである。やつてやれなくはあるまいが、殆んど蛇足に近い。何となれば南部諸港と我が近海とは餘りにも離れすぎてゐて、直接我が國を脅威する力を持つてゐないからである。

日本から問題外として扱はれることは、濠洲にとつて餘り愉快なことではあるまいが、事實は右の通りであるから止むを得ない。我々は濠洲との戦争などを考へる必要はない。それよりも、蘭印との間を完全な妥協へ導くことに専念しなければならぬ。この問題が思ひ通りに運んだなれば、濠洲は恰もその門前に大石を据へられたやうなものであつて、手出しも足出しも到底出来なくなる。どんなに彼等が日本に反感を抱かうとも、日本への反抗を企てるなどのことは思ひも及ばない。勢ひ嫌應なしに日本との圓滿取引をせざるを得なくなるのである。この見地から云つても我が東亞共榮圏の確立は、實に大きな意義を持つものであることが分るのであらう。

# 覺悟せよ！貿易破壊戦

## 對日遠距離封鎖とゲリラ戦

### 困難な近距離封鎖

米國主力艦隊の渡洋作戦が夢想であることは既に分つた。またその主力艦隊が英、濠、蘭の艦隊と聯合して日本に當る場合の粗筋も分つた。それらを綜合して、若し日米戦争が初まるとしたら、餘程趣きの變つた戦争態形が展開しそふであるといふことが、臆氣ながら想像されることであらうと思ふ。しかし人間の頭から絞り出される戦略には限りがある。こゝで米國がその主力艦隊を西太平洋へ廻せないことがハッキリ分つたなれば、次善の方法として彼等がどんな方向を撰ぶかは、大體に於て想像に難くはない。その中の一つが日本への近距離封鎖作戦である。本項の云はんとするところは遠距離封鎖に就てであるが、それを検討するには、矢張先づ近距離封鎖に手掛りを求めて行かなければならぬ。

近距離封鎖とは、文字通り米國若しくはその聯合艦隊を以て日本の近海に網を張り、軍艦であ



れ商船であれ、その網から外へは一步も出入させまいとするものであつて、現在我が海軍が行つてゐる支那沿岸封鎖がそれである。しかしこれがどんなに困難な仕事であるかは、今迄述べて来た各種の場合を思ひ起すまでもなく、誰にでも想像出来ることである。何故なれば、米國がこの封鎖を行ふためには、少くとも我が委任統治諸島や新南群島、西沙島等をもその手中へ収めて置かなければならない。その上にグワムもフィリッピンも、シンガポールもすべて健在でなければならぬ。それだけの足場を持たぬ限り、到底近距離封鎖などは思ひも及ばないことである。ジョン・ガンサーは強氣に日本への近距離封鎖を主張する一人である。彼がその胸中に畫策してゐることを簡単に披露すると、斯うなのである。つまり、日米戦争が始まつたなれば、日本は必らずグワムとフィリッピンの占領を眞先に行ふだらうと見てゐる。香港、シンガポールは別問題として、この二つの據點を日本に抑へられては策の施しやうもないから、その際米國はよろしく日本の先手を打つて極力これを妨害すると共に、日本の南洋諸島へ痛烈な攻撃を加へ、いち早くこゝを占領してしまへといふのである。西沙島や新南群島はフィリッピンが健在である限り、充分これを抑へることが出来る。問題は委任統治領だから、この攻略へ主力を注げと云つてゐる。

るのである。

若しガンサーの思惑通り、我が委任統治領へ星條旗が立つたなれば、最早萬事休すである。我々は甘んじて英米聯合艦隊の封鎖網に引掛らざるを得ない。こゝを占領した米國は、着々足場固めをして、その主力をも漸次西太平洋へ進駐させ、凡ゆる角度から我が本土への攻撃を企てるに違ひない。貿易路を絶たれた上へ彼等の猛攻を受けては、それこそ日本にとつて生死の境に置かれる危機である。しかし、さう安々と問屋は卸してくれない。

最も分り易い「不可能の實證」は、我が南洋諸島を攻略するためには、どうしてもアメリカ艦隊の主力を持つて來なければならぬし、それを持つて來ても、必ずしも陥ちるとは保證出来ない。然るに既にその主力の西太平洋進攻は殆んど不可能であるから、この一事だけを以てしても残念ながらガンサーの名案はペーパープランたる烙印を捺されてしまふのである。又彼が云ふ通り、我が軍の比島やグワム島の攻略に當つては、極力これを妨害すると云ふことも、強力な海軍力を廻し得ない限り、一つの理想論になつてしまふ。その強力な海軍力を我が勢力圏内に廻すについて、ガンサーに確信的な案あらば是非とも拜聴したいものであるが、賢明なる彼はこの點巧

みにそのペンを飛躍させてしまつてゐる。

何れにしても英米艦隊の對日近距離封鎖などは全くの迷案夢語であつて、テンデ問題にはならない。勢ひ彼等としては、もつと確實性のある手段を撰ばざるを得ない。その確實性ありと目されるものが、次に述べやうとする遠距離封鎖なのである。

### 我が三つの生命線

英米が、日本を参らすには、窒息戦法をとるのが第一だと思つてゐることは、今更始まつた話ではない。その點ドイツやイタリアも略同列に扱はれてゐるやうであるが、これには確かに物質萬能主義者としての彼等の誤謬があるやうである。しかし我が國がその貿易線を全部彼等のために抑へられれば、困ることは確かに困る。それに依つて果して日本が参るかどうかは保證の限りでないが、非常な苦境に立つことは事實である。そこで彼等は、武力に依る直接の勝負は覺束ないと見るや、健氣にもその矛を轉じて、經濟的に日本の窒息死を企てやうとし始めたのである。これが即ち遠距離對日封鎖案を生んだ所以である。

元來我が國には三つの生命線がある。生命線とは、云ふまでもなく一國が生存し發展する必要

上なくてはならぬ軍事上、政治上、經濟上の發展と防禦とを意味する線である。

その第一の生命線は、アジア大陸に向ふ陸正面のそれである。日本海を隔て、支那、蒙古、滿洲及び東部シベリアに通ずる線であつて、經濟的にも國防的にも密接不可分の關係にある。

第二の生命線は太平洋を東へ向ふものであつて、その矢の終點にはアラスカ、カナダ、北米、南米の諸大陸が壁の如く横たはつてゐる。而して之れが關所に當るものが我が南洋諸島である。

第三の生命線は西南方をさして進むものであつて、この線の指すところは非常に廣範圍である。即ち近くは印度支那半島より蘭印濠洲を含み、遠くは印度より遙かに近東、アフリカ及び歐洲諸國に通じてゐる。

以上の三線は、その中のどれ一つを缺いても、我が國に大きな打撃を與へるものである。經濟的には比較的價値が薄くとも、國防的に見て重要なポイントを占めてゐる部分もあれば、國防的には左程でなくとも、經濟上無くてはならない地方もある。凡てこの三本の線は、その平衡した力に依つて日本を支へてゐるのであつて、我が國はどんなことがあつても、この三線を確保してゐなければならぬ。

## 日米戦と生命線の不安

然るに最近米國の對日壓迫と、日米國交の緊迫感が増大するにつれて、米洲へ向ふ第二の生命線に可なり不安が加はつて來たのである。既に日米間の貿易線は、昔日の面影を失ひつゝあり、南米航路やカナダ航路も、一旦太平洋に事が起つた場合は當然遮斷の運命を覺悟しなければならぬ状態にある。彼等は既に、日本三大生命線の中の一に對して、明かに攻撃を加へつゝある。日米戦争は、この線の上に於ては最早始まつてゐるのも同様である。

斯うなると、我が國は殘された二線に對して、從來より以上の期待をかけなければならぬ。第二の生命線がその經濟的要素を失ひつゝある際、それだけの不足は殘された二つの線からは非とも仰がなければならぬ。然るにだ、彼等は更にその猿臂を伸ばして、我が第三生命線をも遮斷しやうと掛つて來たのである。これが太平洋の危機を、急に切迫したものとしてしまつた。或ひはそれは彼等の望むところであるかも知れないが、我が國にとつては、實に迷惑至極なことである。望みもしない喧嘩を賣られてゐるやうなものだ。と云つて、彼等の我儘を許して、我が第三の生命線に下手な工作をさせるなどのことは絶対に出來るものではない。

## 日本扼殺の奥の手

日本は今嚴重に彼等の出方を監視してゐる形である。彼等の出方とは取りも直さず彼等の對日遠距離封鎖作戰の出方そのものである。彼等はこの道一筋に日本扼殺の奥の手を見出してゐる。じわりじわりとやる限りは、いきなり戦争になる危険性も少ない。日本は非常に焦らだたい氣持にされるが、彼等の方では急かす慌てず眞綿で首を締めつけて行けばよい。とは云ふものゝ、その眞綿が咽喉に苦るしさを與へないうちにはよいが、愈々息苦るしくなつたなれば、今迄締め掛つてゐた彼等の逆手をとつて、肩すかしの背負投げを食はさぬとは保證出來ない。彼等は扼殺するつもりで掛つて來ても、相手が強い場合には、下手人の方が先に殺されることも決して珍しい例ではない。さて遠距離封鎖であるが、それは一體どんな計畫と規模とを持つものであらうか。先づそのこ

とからほぐしてかゝらねばならぬ。

既に筆者はアメリカ艦隊の南方迂迴路については、至るところで之れに觸れて來たが、對日遠距離封鎖線も、當然この迂迴路と關聯してゐるものである。云ふまでもなくそれは、日本海軍の攻撃を受けない地域を基準にしなければならぬからだ。そこで米國のスターリング少將が熱心

に説くところの線を辿つて見ると、次のやうな形になるのである。即ちハワイを基準として、その南西約千二百哩の地點にある英領フェニックス諸島中のカントン島を第一の中繼點とする。それから更に南西へ伸びてニューカレドニア島に至り、それより西にコースをとつて蘭印諸島を包含し、更にその線を伸ばしてシンガポールに至るものなのである。これらの地點を繋ぎ合はせると、我が東京を中心にして、約三千哩を半径とする半圓形が出来る。要するに我が國は、その半圓にぐるつと取巻かれて、それから外へは一步も出られないことになるわけである。勿論これを行ふには、アメリカだけの力を以てしては到底なし得ないことであるから、原則的にはシンガポールよりスマトラ、チャヴァ、濠洲までの間は英、濠、蘭の聯合艦隊が擔當し、それから東は米國が受け持たうといふことになつてゐる。斯うして先づ日本の艦船を袋の中へ閉ぢ込めると共に、現在マニラ經由シンガポールへ伸びつゝある汎太平洋航空路を、この封鎖線に沿ふやうに變更して、空からの監視と攻撃にも萬全を期さうといふのである。まことに雄大な計畫であつて、我々にとつては少なからざる脅威を與へそうだ。

### 注目すべき作戦

こゝで注意を要することは、チャイナ・クリツパのマニラ線中止である。これは明かに米國がイリツピンを諦めてゐることを意味する。フイリツピンを諦める程であるから、勿論グワムなどは最初から放棄する所存であらうと思へる。彼等に云はせれば、この遠距離封鎖は完全に日本を屈伏さし得るものであるから、一時的の比島やグワムの放棄なんかは問題でない。最後に於ては、たんまりおまけをつけて手中に歸つて來るといふのである。

それと、今一つ注目すべきは、シンガポールの健在を信じ切つてゐる點である。シンガポールの運命に就ては少しの懸念をも抱いてはゐない。それにはそれだけの確信を得る材料があつてのことか、それともスターリング閣下の知腦的誤植であるかは分らないが、これは一寸チエツクしておいてよい問題である。

とまれこの作戦はガンサーの近距離封鎖などといふ出来ない相談とは、根本的に可なり面目が違つてゐる。云ひ得べくんば、英米側にとつては全く最上にして唯一の作戦である。その點は我も保證して然るべしだ。何しろ日本を距ること實に三千哩の遠方であるから、この封鎖線を要

所々で寸断するには、驚く程廣大な戰場を持たなければならぬ。といふよりも、我が海軍はその傳統を捨て、封鎖の主體をなす敵の主力艦を求めため、我が近海を離れて遠洋作戦に出なければならぬかも知れぬ。

勿論我が國としては、戦争の初期に於て、香港、フィリッピン、グワムの攻略を敢行し、必要とあれば佛印及び泰の沿岸に海軍の基地の提供方をも交渉するであらう。そうして出來得る限り廣範圍に亘つて制海權を握り、敵の封鎖を極力弱體化させることに努めるであらうが、所詮はそれも半徑三千哩の圓の中でのことである。どう頑張つてみてもその圓から外へ出られないとしたなれば、これは確かに大問題である。

### 貿易路破壊は必至

彼等の目的が、日本を經濟的に扼殺するにあるのだから、例へ我が國が相當の制海權を握つてゐても、我が貿易路の破壊に就ては、不斷の努力を繰返すは必定である。シンガポールが健在である限り、印度支那半島以西の貿易は殆んど絶望である。南米の貿易路も勿論遮断されてしまふ。蘭印は既に彼等と手を握つてゐるのであるから貿易の相手ではない。濠洲亦然りである。そうなるに我が國は大陸と、佛印及び泰とのみを

頼りにするより他はない。その範圍内で自給自足し、その自給自足の範圍内で戦争を續けて行かなければならぬ。

假に非常な冒險を以て、南米航路の打開を試みたところで、南米そのものがすつかり米國海軍の勢力範圍内であるから、勞多くしてその効は極めて少いものと思はなければならぬ。何れかの國に對して護送船團に依る貿易を行ふとしても、ちつとやそつとの物資を輸入した位では燒石に水であるから、どうしても相當大規模なものとする必要がある。それに對しては、敵は手具脛引いて待ち構へてゐるから、護衛のために大きい海軍力を割かなければならぬ。制海權を確保する重大任務を帯びてゐる我が海軍が、そうした勢力を割く必要に迫られることは、何と云つても辛い話だ。悪くするとその手薄に乗じて、敵艦隊の攻撃を受けるかも知れない。斯う考へて來ると、彼等の遠距離封鎖の成功は、我が國にとつて致命的な打撃を與へる力を持つてゐることがわかる。

### 我が攻勢防禦陣

この場合我が海軍のなすべき事は、實に多種多岐多端であつて、全く寧日なき状態とならう。しかし怖らく我が主力艦隊が出勤して、敵の

主力艦隊を捜し出し、これに痛撃を加へるやうなことはあるまいと思ふ。あつてもそれは最後の手段であつて、それまでは各艦各自の持場につき、敵艦隊の我が本土や領土に對して攻撃を加へんとするものを邀へ、所謂各個撃破の戦法を以て之れに對するであらう。これを攻勢防禦と呼んでゐるが、島國であり、且つその附近に多數の島嶼と港灣とを持つてゐる我が國としては、これが最も合理的な戦法である。

斯うして海軍が頑張つてゐる以上は、よしんば彼等が遠距離封鎖線を完成したにしても、容易に我が近海に近寄れるものではない。従つて封鎖されても、その封鎖圈内の制海權は大體に於て我が海軍が握つてゐるものと思はれる。素より廣い海面のことであるから、敵の潜水艦や輕軍艦が、巧みに我が警戒網を潜つて侵入し、我が近海に現はれて艦船に奇襲を企てるやうなことは無いとは云へない。曩に述べたドイツ潜水艦の、スカバ・フロー軍港襲撃の事實もあることであるから、場合に依つては東京灣の中で、敵潜水艦の魚雷を受けるやうなことも絶無とは云へない。しかしこれに依つて戦局に重大影響を蒙るやうなことは想像出來ないのである。

### 封鎖成り難し

以上大分心細いことを述べたが、これは例に依つて「若しも」彼等の遠距離封鎖作戦が成功した場合の話であつて、一つの假定に過ぎない。我々の觀點から云へば、この假定は成り立たないのである。即ち日本への遠距離封鎖は、云ふに難くし行ふには仲々困難である。敢て樂觀論を振り廻すわけではないが、状況は必ずしも悲觀を要しない。何故かといふに――

第一シンガポールの問題である。既述の通り、スターリング少將はシンガポールの健在性に對して、少しの疑問も持つてゐない様子であり、この考へは米國の海軍部内にも相當大きな勢力を占めてゐる模様であるが、これは甚だ危険な自信と云はざるを得ない。シンガポールの脆弱性はその章で以て相當詳述した通りであつて、多少攻撃軍の方に損害を與へ得る設備があつたにしても、その陸続きにある泰と佛印とが、我が國と共同歩調を取るべき態度を表明した今日、一層無力化されてしまつたと云つてよい。シンガポール攻略に當つて一つの悩みとなつてゐたものは、それが一種の遠征作戦であり、各軍の前進根據地を獲得する上に多少の困難が豫想されてゐたのであるが、この問題も大方解決がついてしまつた今日では、シンガポールも手の届く近く持つ

て來られたと同様な状況になつた。従つて、おそらくシンガポールは、太平洋戰の緒戰舞臺に於て、日章旗の下に潜伏せざるを得ないと見るのが正しい。

そうなるに、我が經濟線の中、所謂第三生命線が開放されるのであるから、彼等の封鎖線はこの點で大きな風穴を明けられた恰好になり、その威力を大半喪失するのである。然るに我が方はシンガポールを攻略したからと云つて、そこで一息入れるために御輿を据えてしまふわけではない。怖らくこの作戰とを同時に、フィリッピン、グワムの攻略戰も行はれてゐるものと思はなければならぬ。更に彼等の作戰の裏をかくて、蘭印諸島中の要所々々をも手に入れるべく、敏捷に且つ積極的に行動を起すであらう。

米國太平洋艦隊の前進根據地と、我が國とは、之等の諸地方に對して、我國の方に絶對的有利な條件が與へられてゐるから、機先を制するものは常に我が方である。一旦我が方に機先を制されたならば、主力艦の決戰を以て臨んで來ない限り、到底遠距離封鎖陣を形作ることは出來ない。執拗に彼等がその方策を遂行しやうとすればする程、彼等の蒙るべき損害は度を加へ、兵力消耗の結果は、遂に自然消滅的にこの作戰を放棄しなければならなくなるのである。

### 潜水艦のゲリラ戰

近距離封鎖も、遠距離封鎖も共に駄目となつたなれば、ハワイにある米國艦隊のなすべき仕事として、何が一體残されてゐるであらうか。一か八かの全艦隊渡洋作戰に出るか、さもなければ主力艦は全部軍港内へ寝かせておいて、専ら潜水艦や輕軍艦に依る奇襲作戰に出るか、二つ中の何れかを撰ぶより外ないのである。然し主力艦隊の渡洋作戰は減多なことに出来るものではないから、勢ひ第二の所謂ゲリラ戰を採用する外はあるまい。

果せるかなジョン・ガンサーは、この時機に於ける米國艦隊のなすべきことは、渡洋潜水艦の全力を擧げて日本近海へ進出させ、片つ端から日本の商船を撃沈することにありと云つてゐる。この計畫が豫定通り遂行出来るかどうかは兎も角として、米國潜水艦の東洋進出は有り得べきことである。よしんばフィリッピンなりシンガポールなりに潜水艦の根據地を持つことが出來なかつた場合にでも、米國の潜水艦はハワイまたはミッドウエーの根據地から出發して、長驅我が貿易航路を襲ひ、この計畫を遂行することは出来るのである。

現在米國が持つ潜水艦のうち、五千哩の航程の後我が貿易路へ侵入し、よくこの任務を果して

再びその基地へ歸り得るものと云へば、僅かにV級九隻しかないが、究極の目的が日本の經濟線破壊にある米國では、拔かりなくこれに用ひるべき新艦の建造を大馬力で急ぎつゝある。恐らく三年後には、V級以上のものが二十隻は建造されるであらう。之等は一にも二にも右の目的のためだけに造られてゐるものである。従つて我が貿易路の將來は、甚だしく多難を豫想されざるを得ないものとなる。

### 戰慄的な撃沈數

元來潜水艦の奇襲戰術は前大戰に於てドイツが苦しまぎれに大々的の活用をやつたことから、一躍世界にその價値を認められるやうになつたものであるが、今日では潜水艦萬能論者まで出る程で、その威力は端睨すべからざるものとなつてゐる。現にドイツは英國に對して徹底的に潜水艦戰術をとり、一ヶ月平均九十萬噸内外の艦船を撃沈してゐるのである。英國も島國であり、我國も亦同様島國である。而も物資の輸入に就ては凡て一應は海路を経なければならぬのであるから、日本を攻める國にとつては、潜水艦戰術こそ見逃すべからざるものであるは論のないところだ。

一體に斯うした小艦艇の襲撃は、非常に防ぎにくいものである。前大戰の時、ドイツの巡洋艦

エムデン(六千餘噸)が世界の至るところへ現はれて、多數の商船を撃沈したことがあつた。エムデン一隻の跳梁のために、世界の貿易航路は例外なく神經過敏症にかゝつたものだ。我が國の軍艦も、久しい間これを追ひ廻したが、遂にその艦影さへも見る事が出来なかつた。堂々と海洋上に浮んでゐる巡洋艦ですらこの始末であるから、海を潜つて近寄る潜水艦への防禦は全く困難を極める。

勿論當時と違つて今日では航空機が著るしく發達してゐるから、その索敵範圍の擴大されたことは當時の比ではないが、これとても夜間だとか風雨等の自然的な現象に依る制限を受けてゐるから、これのみに頼ることは出来ない。結局如何に防禦方法を完全にしても、大なり小なりの損害を蒙ることは避けられないのである。尤も我が國に對する米國潜水艦の場合と、英國に對するドイツのそれとは、地理的條件に於て可なりの開きがある。ドイツの場合は其基地から英本國は手の届くやうな近くにあるから、どんな舊型の潜水艦でも攻撃に加はることが出来る。つまり全勢力を以て英國船を襲ふことが出来る。しかし米國の場合はこれが困難である。彼等が基地を出發して、その戰場へ到達するまでには、少くとも四千哩を航行して來なければならぬ。往復



八千漚乃至一萬漚といふものは、全然徒費しなければならぬ。これは實に大きなハンデキヤツプである。假に二萬漚の航續力を持つ潜水艦でも、實際有効に働けるのは一萬漚内外であるからドイツの如くその全航續力を作戦に使ひ得るものと同一に論ずるわけには行かないのである。

この負擔を軽減するために、米國は潜水艦の基地を咽から手が出る程欲しがつてゐる。しかし日本の近海ではそれを求めることが出来ない。餘りに近ければ近いで、グワムの如く開戦同時占領の憂き目を見る心配もある。そこで潜水母艦を利用する方法も考へられてゐるやうである。航續力の少ない潜水艦に給油その他の女房役をする母艦を與へ、これを適當な地點へ進出させて、そこから稼ぎに出掛けさせる。これも勿論有り得べきことであるから、我々は日本の貿易路破壊に出かけて来るものはV級の二十數隻のみだなど、安心してゐるわけには行かないのである。

### ゲリラ艦隊の活躍

これは米國だけの話で、まだこの外に英國と蘭印との潜水艦が加勢して来る。英蘭兩國の潜水艦は、どんなに少なく見積つても七十隻や八十隻は頭數を揃へることが出来る。英國の奮發次第で百隻を突破させるのも困難ではないかも知れない。そうなると二百隻の潜水艦が、常に我が貿易航路を狙つて、あちらこちらに薄氣味悪い

目を光らせてゐることになる。口でこそ二百隻だが、それらが逞しうする暴威は容易ならぬものがある。假に彼等が一隻づゝしか我が商船を撃沈出来なかつたにしても、我は二百隻の商船と貨物とを海の藻屑と化さねばならぬ。若し彼等がドイツ潜水艦のやうに精銳であり、勇敢であつたなれば、それから受ける被害たるや、まことに慄然たるものがあるのだ。

### 波荒し西南航路

これらの潜水艦が、その主作戦地として撰ぶところは恐らく蘭印への貿易路であらう。それと平行的に西方航路と委任統治領への交通線を狙ふものと思はれる。更に彼等は日本海の奥深く潜入して、我が大陸への交通路をも脅かすに違ひない。我が國は、このゲリラ戦の始まる前に、各地を占領してそこに相當數の陸軍を駐屯させてゐる筈であるから、之等への兵站線は平素の貿易路へ更に大きな負擔をかける。船舶はいくらあつてもそれで充分だとは云へない。無數に擴がつたそれらの交通線は、敵の攻撃目標を至るところに拵へてやるやうなものである。

虎の子のやうな船舶は日々何隻かづゝ撃沈される。戦果の擴大に依つて軍需工場は益々多忙を加へるであらうから、缺けた船舶の補充も仲々追付かぬ。従つて物資の輸送路は日に日に瘦せ細

り、國內産業に致命的な影響を及ぼす。その結果は駐屯軍への補給も愈々困難を極め、遂に二進も三進も動かなくなる。中でも蘭印方面への航路は、最も襲撃され易い地形の中のみを通つてゐるのであるから、最も大きい打撃を受ける。意地悪く日本が蘭印の資源に恃むところは實に大きい。これを完封してしまつたら、それだけでも日本は積極的な戦争など出来なくなる。甚だ心細い限りではあるが、これは私の意見でははく、英米側の皮算用である。

### 潜水艦の苦手

攻めるものがあれば守るものがある。守るものも常に守つてばかりはゐない。守ると同時に攻勢に出る場合もある。潜水艦に對しても同様である。

潜水艦の魚雷は非常な威力を持つものであり、當り所に依ると主力艦でも沈没することがあるが、たつた一發の魚雷と主力艦とを交換するのは如何にも算盤に合はないから、各國ともこれに對しては、その防禦装置に趣々の工夫をこらしてゐる。避雷網を持つてゐるものもあれば、米國の軍艦のやうに、速力を落すのを承置で艦腹の鐵板を厚くしてゐるものもある。

また潜水艦そのものを防ぐには、霞網のやうに海中に網を張つてこれを搦め取るものまで出来てゐる。しかし潜水艦にとつて何よりも苦手は矢張り驅逐艦である。一度び驅逐艦に發見され

たが最後、容易に逃れ出すことは困難である。海上航行中なれば勿論その速射砲に依つて撃沈されるし、見つかつてからうまく潜水しても、例の爆雷をそこら一面に撒き散らして大抵はやつつけてしまふ。先づこれに見つかつたら百年目だと思はなければならぬ。

その次は飛行機である。これは空中から見るのであるから、餘程深く沈まない限り大抵は發見されてしまふ。海上航行中に見つかればその對空砲を以て應戦するが、淺く潜航してゐる時は全然飛行機の襲撃が分らないから、充分狙ひを定めた爆彈を見舞はれる。この二つは潜水艦の最も恐れる強敵である。しかし之等の外にも、近年の軍艦はすべて發射速度の極めて早い小口徑砲を多數に備へつけてゐるから、昔のやうに悠々軍艦の近くでベリスコープを覗かせて、狙ひを定めて魚雷を發射するなどの靈當は殆んど出来ない。大抵は海底にあつて電波に依り敵艦の位置を突き止め、完全に潜つたまゝ發射する。軍艦の方にもまた潜水艦を探知する音波装置があるから、さう御注文通りには撃たれない。斯うして、軍艦の襲撃には常に決死の覺悟が要るものなのである。

それだけに、潜水艦に依つて蒙る損害も大きい代りに、潜水艦そのものゝ蒙る損害も亦決して

少くはないのである。これを計算に入れないと間違つて来る。敵の潜水艦ばかりが健在で、我が國の商船が片つ端から沈められるのでは、いくら船を持つてゐても足りつことはないが、商船を沈めるには、潜水艦自身もまた相當の身代金を出さねばならぬ。殊に我が空軍がフイリツピン以南にその基地を持ち得た場合には、それだけでも晝間の奇襲率はグツと低下せざるを得ない。まして我が驅逐艦や巡洋艦がこの方面に行動したならば、仲々以て容易に彼等の跳梁を許すものではない。

### 集團護送船團の効果

しかし戦争であるから、勿論或る程度の損害は已むを得ないところである。要はその損害の最少限度がどの程度に止まるか問題だ。これがために英國あたりが目下盛んに應用してゐるのが、所謂集團護送船團である。これは潜水艦の襲撃に對しては、可なり合理的な防禦法となつてゐるから、簡單に紹介しておきたい。

貨物輸送の船舶を單獨に航行させるといふことは、それ自身が甚だ危険なことである。さりとて一隻や二隻の商船に驅逐艦や巡洋艦の護衛をつけるなども、限りある兵力が許す筈がない。そこで一定の方向に進む船を全部集めて整然たる編隊として、その前後又は兩側に驅逐艦がついて

潜水艦と空襲とに備へるのである。この場合航路は必ずジグザグコースを取る。これは航行距離を増して、急を要する場合には洵に都合が悪いのであるが、潜水艦の目を晦ますには最もよい方法である。潜水艦にとつて最も恐ろしい驅逐艦が頭張つてゐるために、折角この護送船團を發見しても容易に近付けない。漸く忍び寄つて魚雷の照準をつけやうと思ふと急にコースが變つてしまふ。ぐすくしてゐると自分自身が危険であるから手取り早いところをやらうと焦るため、命中率も少なくなる。斯うした理由で集團護送船團は、最上の方法とされてゐるのである。

たゞ、潜水艦に對しては有効であるが、飛行機に對しては多くの缺點を持つてゐる。何分多數の汽船が集團をなして航行するのであるから、空からの發見には極めて好都合である上に、一隻の汽船を照準するよりは遙かに狙ひ易い。驅逐艦には勿論對空砲があるし、商船の中にもこれを用意してゐるものもあるかも知れないが、限られた對空砲を以て完全に空襲を逃れ得るといふことは不可能である。

しかし多少の犠牲を出すにしても、これは最も安全な方法であるから、貿易路破壊戦に對しては我が國と雖も此方法を採用するであらうと思はれる。米國が大艦巨砲主義を堅持する傍ら、驅

逐艦と潜水艦の充實にも大きな豫算を計上してゐるのは、一にこれ突き崩さんがためである。彼にこの用意あり、然らば我等の潜水艦は如何なる戦法に出でるであらうか。

### 我が潜水艦の活躍如何

#### 怖れられるその力

日本を潜水艦國だと評する外國軍事通もある。これは單に我が國に伊號の如き優秀な潜水艦が、三十數隻もあることばかりを意味してはゐない。如何に優秀な潜水艦があつても、それに乗込む將兵の素質が悪ければ、折角の寶も持ち腐れである。元來潜水艦の任務は最も地味なものである上に、最も苦しいものでもある。これに乗込む人々は、敏捷と沈着とを要する外に、非常な忍耐力が要る、あの狭い艦内で寝起きすることだけでも普通ではないのに、機械の操作は複雑であり、空気が悪く、おまけに動搖が激しい。いざ戦争となつても敵を眼の前に見ながら四つに取組むやうな華々しい場面は極めて稀で、大抵は波の底での働きである。單に敏捷、沈着、忍耐等の要素が揃ふだけではまだ不十分なほど辛い勤務である。出來得ればその上に尙崇高な報國の信念が欲しい。こんな條件を揃へた國民といふも

のは、さうザラには存在しない。ところが我々日本人には、それらの凡てが惠まれてゐるのである。條件の中の何か一つを缺くことがあつても、それを補つて餘りあるところの盡忠の念に燃えてゐる。これが何よりも強みである。

世界各國が、我が潜水艦を怖れるのは、所謂大和魂と、陛下の御爲なれば笑つて死ぬといふ他國人の持たぬものを持つてゐるからに外ならない。如何なる兵種を問はずこの精神は皇軍の強みではあるが、最も犠牲的精神を必要とする潜水艦に於ては正に鬼に金棒と云ふことが出来る。この世界的威力が、太平洋戦争に於て如何なる働きをなすかは、單に英米諸國の大關心たるのみならず、我々自身にとつても大きな關心事ではなくてはならない。

#### 寡よく衆を制するもの

太平洋戦争の特徴は、その作戦區域が非常に廣大だといふ點である。このやうな廣大な區域に於て作戦するに當つては、兵力の均衡の取れた分布が何よりも大切である。それと同時に、その主力艦隊の所在を敵に知らせないことが亦極めて重要な意味を持つてゐる。限りある兵力を以てこの廣大な海面に作戦し、攻防の秘術を盡すに當つて、敵の主力が何處にゐるかを探知し得たなれば、その所在地から放射線を引い

て大體敵の作戰を推察することが出来るのみならず、潜水艦等の奇襲艦隊は常に敵の主力艦所在地附近を監視して、その行動に大きな掣肘を加へることが出来る。

この場合、潜水艦が僅かに一隻であつても、狙はれる側にとつては非常な障害になるものである。寡よく衆を制するものは、實に潜水艦そのものと云へる。

然るに日米戰爭を考へるとき、我が主力艦の所在は容易に敵に察知されないが、アメリカ太平洋艦隊の主力は、必ずハワイの眞珠灣に碇泊してゐるのである。それ以外に主力艦を容れ得るところはないから、どうしても前進根拠地として、この絶海の孤島を撰ばざるを得ない。

このことは、我が潜水艦にとつて、まことに幸福な任務と目標とを與へるものである。本項では我が潜水艦の米國通商路破壊戰を書くのが主旨であるが、その前に一應このハワイに對する攻撃を考へなければならぬ順序に迫られる。前にも述べたが、我がマーシャル群中のヤルートからハワイまでは約二千百哩に過ぎぬ。我が國の潜水艦の航續力は、今日どの位にまで伸びてゐるかは知られないが、十年前に既に一萬哩を悠々航行出来るものが作られてゐたのであるから、假にこの記録を土臺にしたところで、ハワイ附近へ行動することなどは容易な仕事である。若し我が

潜水艦が眞珠灣の港口附近を狙つたとしたらどんな結果になるであらうか。

### ハワイへの挑戦

原則として、攻勢防禦の戦法を採る我が主力艦は、太平洋を渡つてハワイを攻めるといふことは考へられぬ。若しこれを敢行するならば、それはアメリカ艦隊が何等かの結果に依つて非常に弱體化された場合か、敵艦隊に依つて日本近海を攻撃される憂ひの全然無くなつた場合のみである。それ以外には何か特定の事情が起きない限り考へられぬ。

しかし潜水艦等の奇襲艦隊に依る攻撃は極力これを繰返すであらうし、繼續されるであらう。それは直接敵の軍艦に魚雷をお見舞ひする機會に恵まれなくとも、少くとも敵艦隊をその港内に金縛りに出来る可能性が非常に多いからである。尤も敵の警戒も嚴重を極めるであらうから、攻撃軍に於ても多少の損害を蒙るには違ひないが、それにしても新手が入り代り立ち代りその任務に就く限り、港内の諸艦は正に袋の鼠に等しく、殆んどその行動の自由を失つてしまふのである。若しこれを押し切つて、潜水艦に對する嚴重な警戒陣と防禦陣を敷きながら港外へ出やうとするならば、それは待ちあぐねた我が潜水艦にとつて、唯一絶好の好機會である。如何に敵が水も

洩らさぬ陣容を整へて来て、一死以て君に報ぜんとする死に身の戦法は、必ずやその陣營を突破して敵主力艦に迫り、命を置めた必中彈を發射するに違ひない。このために多少の潜水艦を失はふともそれは比較にならぬ程大きな損害が、必ず米國側に與へられてゐる。彼等は數隻の潜水艦を撃沈するために、何隻かの大型艦を失はなければならぬであらう。然もこの戦鬪に依つて我が主力艦の勢力には何等の損耗も起きないのである。

### ハワイ危し

我々は何も潜水艦の萬能を信するものではない。しかし事ハワイ攻撃のみを以て目する時は、我が潜水艦の活躍如何によつて、そのみの力を以てしてもハワイを、危地に陥入れることが出来ると思ふ。シンガポールの章でも述べたやうに、元來最も完備した艦隊の根據地には、確かりした背後地が附屬してゐなければならぬといふ條件がある。その根據地の賄ひは、その背後地だけでやり得るやうでなければ一流の海軍根據地とは云へない。それを持たぬがためにシンガポールは大したものではないと判定されてしまふのである。

ハワイの場合はどうであらうか。成程この島はシンガポールのやうに猫額大のものではない。島としては相當廣い方である。しかしそれが、太平洋の真中にポツンと浮んだ一群の孤島である

ことには變りはない。如何に工業その他の諸設備を完備してゐても、それに要する原材料は三千哩の波濤を越へて、遙々米本國より供給を仰ぐより外ないのである。こゝにハワイの惱みがあり根據地としての致命的な缺陷が存在するのである。

この缺陷を補ふためには、巨大な貯蔵庫を作つて、燃料であれ、食糧であれ、兵器彈藥であれその他の必需品であれ、平素より充分の貯へをしておかなければならない。米海軍當局でもこの點には早くより着目して、鋭意それらの準備に忙殺されてゐる模様である。だから、背後地を持たぬ根據地としての弱點は、或程度まで修正されてゐるかも知れない。

しかし、一旦戦争となつた場合、アメリカの有する海軍力の大部分は、ハワイを基點として日本の方向に行動しなければならぬ。その間の各種軍需品の消耗は驚くべきものがあるから、一定量の貯蔵物なんかでは到底間に合ふ筈がない。どん／＼腹の空いて行く倉庫を常に一杯に満たしておくためには、本國より懸命の輸送をしてやらなければならぬ。殊に戦争が永引けば永引く程、ハワイと、サンフランシスコやシヤトル等との船舶往復は多忙を加へるのみである。

我が潜水艦にとつて、この航路は見逃すべからざるものである。若しこの線を破壊されたなれ

ば、そのことだけで、遠からずハワイは干上つてしまふのだ。消耗ばかり相次いでそれに補給が伴はなければ、如何に大きな貯蔵庫でも遠からず空つぽになつてしまふ。或ひは米本土より空路を利用して補給する手もあるであらうが、それとても天候の支配を受けるのみならず所詮は一時の間に合せであつて、船舶が果し得るやうな能率を到底望むことは出来ない。茲に至つてハワイ根拠地の軍艦は、戦はずして士氣既に沮喪し、遂には全然戦意を失ふに至るかもしれぬ。

### どこを狙ふか

とは云ふものゝ、米本土の太平洋岸は約千哩の長さを持つて居り、本土とハワイとの間には三千哩の大洋が横たはつてゐる。この三角形の海面は、僅かに千噸や二千噸の潜水艦にとつては、實に廣大すぎる程廣大なものである。如何に俊敏軍の如き我が潜水艦でも、この廣い海面に獲物を求めて游弋してゐたのでは、多くの場合獲物を逸し勝である。そこで、特定の海面を定めて、所謂待伏せ主義をとることにならう。

實戦は生き物であるから、その場に臨んで臨機應變の働きをしなければならぬ。従つて平常時に豫想されてゐたことゝは全然別な行動に出ることもあるが、原則的にはそう飛躍的なものはあり得ない。そこでこの際ハワイと米本土との連絡を絶つには、どの部分が最も有効であるかを見

るに二つの要點が頭に浮んで来る。その一つは米本土の港を監視する方法である。ハワイ向けの貨物船は、何れ我が潜水艦の襲撃を警戒して、例の集團護送船團に依るものと思はれるから、之等が出て來そうな港を狙ふのである。北から云へばシャトル、サンフランシスコ、ロスアンゼルス、その三港がその代表的なものではあるが、更に南下して、大西洋側から廻航する船舶に對しても、これをパナマ運河近くで捕捉することが出來やう。これが豫想されるものゝ中の一つである。しかし米國と我が國とは約四千六百哩を距てゐる。パナマに至つては約六千五百哩の距離がある。この距離は敢て我が潜水艦の航續力にとつて驚くには當るまいけれども、それだけ向ふへ着いてからの活動力が短縮されるから、充分の活躍を期待するには相當數の艦艇を必要とする。その點に於てこれは次善の方法であると云へる。

幸ひにして之等の諸港から出發した船の針路は、凡てハワイと云ふ一點へ集中されることが確實であるから、特に求めて米本國附近へ遠征するまでもなく、彼等をハワイ附近に於て待伏せすることが最も捷徑であり、且つ最も確實である。たゞこの方法は我にも有利である代り米國側にとつても亦有利である。彼等は廣い海面に亘つて我が潜水艦を求める必要がない。船舶の航路に

當る附近を常に嚴重に見張つて居れば、必ず我が潜水艦を發見することが出来る。この決戦は見物であらう。攻防兩軍祕術を盡して戦ふ。その裏をどう巧みに掻くかは、これは最早筆者の持場以外のことである。

### 米國貿易線の破壊

要するにハワイは、その艦隊を監視する上からも、それを攻撃する上からも、更にこれが補給路を絶つて無援孤立に陥らしめる上からも、我が潜水艦によつて執拗に狙はれるものと思はなければならぬ。これが先づ我が潜水艦の負ふべき任務の一つである。

次には米國の貿易線を如何に破壊するかだ。元來この國は衆知の通り珍しく物資に恵まれてゐる。従つて海外貿易は輸出が主であつて輸入は従の地位にあるから、貿易路の破壊と云つても、我が國の場合とは可なりその面目を異にしてゐる。しかしその豊富な物資の中にも、戦時必需品の中の何種かは、これを海外に仰がなければならぬ。その最も代表的なものは自動車や航空機工業及び軍用になくてならぬゴム、錫、タングステン、雲母等であり、而もそれらの大部分は西太平洋諸國から供給を仰いでゐるのである。だからこれを遮断されることは、米國にとつて非

常に大きな傷手と云はざるを得ない。萬一の場合に備へて、その發達した科學力と工業力を總動員して、之等の代用品獲得に腐心してゐるやうであるが、どんなに良い代用品が出来たにしても本物が手に入る程有難いことはない。

そこで先づ我が潜水艦は、米國から濠洲、ニュージラランド、蘭印、フィリッピン等の諸國に通ずる貿易線の破壊を企てるであらう。これは非常に廣範圍に亘る海面であつて、限られた数の潜水艦にとつては、餘りにもその持場が廣すぎる。それらの航路の要所々々に網を張つて待ち伏せするといふことは非常に困難である。そのためには、ハワイの場合と同様、我方にも多少の危険はあるが、最も効果の多い海面を物色してみると、有る、素晴らしい稼ぎ場所がある。

それは何處かと云ふに、ハワイとサンフランシスコの中間に當る一面の海域である。ヤルート島から三千裡内外、東京から五千裡内外附近の海一圓を綱代として、その附近を監視してゐたならば、殆んど完全に太平洋岸の貿易線を遮断することが出来る。わざわざ濠洲や、ニュージラランドや蘭印を張りに行かなくとも、それらへ行く船も、そこから歸る船も、米國太平洋岸の何れかの港へ入らうとするものは、嫌でも應でもこの海面を通過しなければならぬのである。おま



けにハワイへの航路もこの中に含まれてゐる。正にこの海面は米國の太平洋貿易に於ける心臟部である。こゝを衝かれたなれば、心臟に匕首を擬されたやうなものであつて、太平洋貿易の機能を殆んど失ふ結果になるのである。従つてこれを嫌つてパナマ運河の通過を撰ぶものもあるであらうが、それならそれで、我方にとつては別に明瞭な目標が與へられるわけであるから、尙更結構と申さざるを得まい。

### 南米航路の窒息

今一つ考へられるのは南米航路の破壊戦である。英國崩壞の後には、米國は、北米大陸と南米大陸とに據つて、腹背よりする敵を一手に引受けなければならぬ。その際南米の足並が揃はぬやうでは洵に困るから、拔かりなく中南米諸國との共同防衛案を實行に移しつゝある。この策は既に大半の成功を見、米國は南米の諸地方に、續々海軍基地を得つゝあるが、これは何のためかと云へば、勿論樞軸國海軍の攻撃を怖れるからに外ならぬ。

合衆國が南米諸國に負ふ政治的、經濟的の恩恵は並々ならぬものがある。そればかりでなく、南米諸國が樞軸國へどしどし物資を輸出することは、取も直さず樞軸國をそれだけ強化させる意

味を持つから、出來得る限りこれをも防喝したいと思つてゐる。それには南米諸國との連絡を常に緊密にして置かなければならぬのであるが、その連絡路は空と海のみにはしか許されてゐないのである。

地圖の上では南北兩アメリカは一連の大陸であるが、それは只陸続きであると云ふにとどまつて、鐵道はメキシコのヴェラクルスを以て終點となつてゐる。それから先は全然鐵道の連絡線を持たず、しかもその距離は北米合衆國の南北を連らねる線よりも長いのである。何年か後はいざ知らず、差當つてこの間に鐵道を敷設するなどは、到底出來ない相談であると云へる。

従つて若し南米への航路を遮斷されたなれば、最早如何とも策の施しやうがない。之れを怖れたの共同防衛策であり、海軍基地の獲得運動なのである。戦争は凡て敵の急所を衝くにある。これだけ大事な航路を我が海軍が黙つてうつつちやつて置くやうなことはあり得ない。しかしこの航路は南北に亘つて長大な區域を占めてゐるから、單なる潜水艦の攻撃だけでは充分の効果を期待出來ないかも知れぬ。巡洋艦若しくは驅逐艦等との共同作戦といふことになるかも知れないが、それにしても我が潜水艦の活躍は、この方面でも亦大きく期待されるものである。

### 擧手からの攻撃

しかしこれだけでは、單に太平洋岸の航路を遮断するにとどまつて、大西洋岸は未だ完全に生きてゐることになる。對南米航路を半身不隨にしましめ得るのである。とは云へ、大西洋岸へまで手を伸ばすには、餘りにも距離が遠すぎる。そこでこの擧手からの攻撃は、ドイツとイタリアとの海軍が受持つてくれる段取りとなるのである。

どうせ太平洋戦争が起る限りは、樞軸國對英米の戦争である。英國が崩壊すれば獨伊の海軍は無論大西洋へ進出して、英米艦隊への攻撃と、アメリカの貿易路破壊に専念する。而してその場合、何れが主たる作戦になるかと云へば、南米の資源を必要とする獨伊としては、英米艦隊との衝突は後廻しとして、極力貿易線の破壊を企てるに違ひない。その結果、アメリカは遂に南米との連絡を断たれないとは、誰しも保障出來ないのである。

### 果しなき戦争

このやうにして、若し太平洋戦争が起つたならば、それは貿易路破壊戦から展開されるものと思はなければなるまい。勿論西太平洋にある米國領の島嶼や、シンガポール、蘭印等の爭奪のために、緒戦舞臺に於ては彼我が熾烈な攻防戦が見られ

るであらうが、それとても、海軍そのものとしては、主力と主力との決戦ではない。部分的な海戦である。この第一次海戦の終つた後は、當然陸軍な貿易路破壊戦へと移つて行くのだ。

最早そこには華々しい大海戦などを見ることは出來ない。兩國とも、徒らに沈められて行く艦船を眺めながら、果しなき破壊戦を繰返すのである。まことに鬱陶しい戦争が続くのである。その間若し兩國主力艦の衝突があるとすれば、それはどちらかが堪え得なくなつて決戦を挑むか、相手の海軍力が甚だしく弱體化した場合に限られる。それ以外には主力の衝突などは、現状を以てしては考へられないのである。斯くて太平洋戦争は兩國が頑張る限り、勝負のつかぬ長期戦争となる可能性が充分ある。これに對して日本の國力は、果して能く耐へ得るであらうか。その點が國民全體の、一つの大きな懸念ではあるまいかと思はれるから、許される範圍内で、そのことにも少し觸れておきたいと思ふ。

### 我が經濟力は耐へ得るか

## 英米の錯覺

持つ國、持たぬ國の解釋は、常識的な判斷では定められぬものである。假に石油を持たぬ國であつても、石炭に恵まれてゐたならば、今日の科學力は、の意味では持つものと持たざるものとに分けられるかも知れないが、近代科學は、持たざるものをも或る程度まで持つものに轉化させ得るのである。

我國は、その國內に殆んどあらゆる資源を持つ國である。資源を數多く持つ國としては、世界に例のない程多種類のものを持つて居り「資源の見本國」とまで云はれてゐる。然しながら、その量に於ては比較的恵まれてゐない。昔のやうに消費の少ない時代なれば國內資源で充分賄へたが、世界有数の工業國となつてからは多くの原材料を他から仰がねばならなくなつた。殊に滿洲事變以後軍備の充實と、支那事變と、滿支の建設、更に東亞共榮圈の確立といふやうな大事業を背負つてゐる今日では、いくら資源があつても、餘るやうなことはないのである。

これは既に世界衆知のことであるが、同時にそこが、英米等の民主主義國の狙ひとなつてゐるのである。日本は物が足らぬ。だから物を得やうとして支那を攻め、蘭印を攻め、印度支那半島

を攻めやうとしてゐる。だからこれの逆手をとつて、そうした諸地方から日本へ物資が入らないやうにすれば、日本はその野望を伸ばすことが出来ない。その結果は、世界的に日本の失脚となつて、民主主義國萬歳となる——これがザツと彼等の意中であり、對日壓迫の根本觀念である。これは誰しも考へそうなことである。貧乏人を苦しめるのは、その糧道を斷つことが最も捷徑だ。古來金持の札束で頬を張られて、泣きの涙でその膝下に屈する者は星屑の如く無數である。英米はこの金持ち根性に依つて凝り固まつてゐる國である。一切萬事金の世の中、金力は權力なりと信じ切つてゐる。だから、本當の貧乏人なれば、彼等の糧道封鎖戰術は可なり辛辣な力を持つてゐる。しかし、我國をも只の貧乏人と観ることは、彼等の大きな錯覺である。糧道封鎖戰術に依つて、必ず日本が參ると心から信じ切つてゐたならば、それこそ悔いを千年に残すものといはなければなるまい。

## ユダヤ的な餘りにユダヤ的な

一體英國にしる米國にしる、その國家の臺所ばかりでなく、英國は王宮、米國は白聖館の奥深く政治的にまで伸びてゐるのがユダヤ財閥の勢力である。ユダヤ財閥の敵は一貫して帝國主義諸國家であり、彼等

は常に、先づこれらの諸國家を滅ぼすことを第一の眼目にして來てゐる。そのために前の世界大戦が起り、支那事變が起り、今度の歐洲大戰が勃發したのだ。樞軸國は表面的には英米の民主主義と戦つてゐるのであるが、皮一枚を剥げば、英米を操るものはすべてこれユダヤ財閥である。ユダヤの世界的秘密結社として隠れもないフリーメイソンの頭首は英國王室であり、ルーズヴェルトは、ユダヤ財閥の政治を代行する一つの傀儡に過ぎぬのだ。これらのおそるべ裏面は、拙著「ユダの挑戦」に凡てを盡してあるからこゝでは重複を避けるが、要するに我々は支那と戦ひ、英米の壓力に對抗してはゐるものゝ、それは畢竟日本打倒を心から念じてゐるユダヤの勢力と戦つてゐるのである。

彼等は世界の富の半ば以上を持つて居り、世界の通信網の半ば以上を壟斷して居る怖るべき存在である。支那は勿論のこと、佛印にも蘭印にも濠洲にも、凡そ對外貿易のあるところには、根強く彼等の金力が浸み込んでゐる。現在蘭印と折衝中の石油にしても、その大部分がユダヤ財閥の手に依つて經營されてゐるのである。佛印から來る米の取引についても矢張り同様であつて、我が國と佛印當局との間に友好的な話を取り決められたに拘らず、米の貿易について我が三井の

加入を拒否したなどは、この間の消息を雄辯に物語つてゐるものなのだ。

これを要するに、英米が樞軸國に對して爲すことがユダヤ的ではなく、ユダヤが爲さんとすることを、英米政府が代行してゐるのである。このことは、よく／＼頭へ入れておいて欲しいと思ふ。であるから、單に戦争の勝敗だけでは、問題は解決しないのだ。もつと深い問題がその奥に横はつてゐる。このユダヤ財閥の吸血鬼的仕事を窒息せしめるには、餘程の覺悟と努力とを要することは次第に諸氏にも明瞭となるであらうと思ふ。

### 蘭印の出方如何

今、彼等が第一の手段として日本に對して撰んだ方法は、戦争にならぬ程度に於て、米國から日本の經濟力を驅逐するといふことであつた。何故戦争を怖れるかは、云ふまでもなく彼等が、シャイロツクの如く金錢の權化だからである。利のためには何物をも顧みない商人だからである。只今の歐洲戦争で英國は手酷く傷めつけられてゐる。最も嫌な戦争をしてしまつてゐる。これはユダヤ財閥にとつて甚だ困つた問題のやうではあるが、決してそうではない。彼等には自分自身が國家を持たぬと共に、世界中の國家を認めてゐない。人間の造つた國境をすつかり取り拂つて、その上で、廣大なユダヤ金權政府を樹立しや

うといふのが最後の目的なのである。たゞ英國を支持し、米國を援けることは、英米が最もよくユダヤ財閥の意志を代行してくれ、且つ彼等を庇護して呉れるからに外ならぬ。彼等は常に戦争を食つて肥つて來てゐるのである。英國は非常に苦しんでゐるが、その代りユダヤ財閥は、米國にある商工業の凡ての機關を、フルスピードで働かせても働き切れない程の金を儲けつゝある。彼等は米國が参戦することを一面怖れてゐる。それは、最早彼等が安心して儲けるべき場所がこゝ一つしか残つてゐないからである。しかし英國の氣勢が上り、早急には参りそうもないことが分つたなれば、進んで米國を参戦させるであらう。負けない戦争なれば、大きくすればする程彼等の稼ぎは荒つほくなる。その上長期戦でへとくになつて、交戦國の凡てが肩で息をする状態になつたら、例に依つてその廣範な宣傳網を動員の上、破壊思想をポンプの如く注入する。世界が大きな混沌の中に投げ込まれ、丁度前世界大戦後のドイツのやうな状態になる。この混沌につけ込んで、ユダヤ大王國を建設すべき筋骨はちやんと出來て居り、フリーメーソンは手具懸引いてその機會を待ち構へてゐるのである。

この彼等の札束で横面を張る戦術に對抗し、彼等の戦術を無力化させるには、何が一番有効で

あるかといふに、最も根本的な方法は世界から金を抹殺してしまふことである。極端に云へば、昔の物々交換に戻れば、金の威力は全然利かなくなるから、ユダヤ財閥の勢力を根底より覆へすことが出来る。しかし之れは云ふべくして仲々行へない方法であるから、差當り、彼等の嚇しの利かない國力作つてしまふことである。お前達のお世話にはならぬ。俺は俺の手で俺の賄をやつて行く、碎いて云へば斯うした國力を造つてしまへば、最早どんなに彼等が悶躁いても、どうにもなるものではない。

いち早く日本のこの出方を察知した彼等は、第二段の工作に移つて來た。それが即ち我が國の東亞共榮圈確立に對する妨害だ。日本がそうした自給自足の經濟圈を確立するには、蘭印は無くしてはならぬ地方である。これを抑へて了へば、それだけで日本は參らないかも知れないが、自給自足の範圍は大いに極限されて、日本の企圖は畫餅に歸する。幸ひにして蘭印にはユダヤ財閥の手が伸びてゐるから、この機能を活働させて、極力我が國の蘭印進出を妨害しやうとしてゐる。そこで、蘭印の向背は、我が國にとつてどれ程大きな影響力を持つかであるが、之が有ると無いとは、事實非常な相違である。米國から閉め出しを食つてゐる現在では、輸入にしても輸出

にしても、この地方は日本の経済力の重要な動脈をなしてゐる。若し蘭印がどうしても日本の平和的な通商交渉に應じなかつたなれば、これは決して生やさしい問題ではない。現在只今、直ちにそれが日本の死活問題とはならないまでも、長期戦を繼續して行く時には、いつかそれが日本の生存力に大きな影響を及ぼすことになる。

### 高度國防國家の狙ひ所

我が國の東亞共榮圈確立と表裏一體をなすものは、高度國防國家の建設である。これは既に常識化された問題であるが、尙一應の蛇足を試みるならば、高度國防國家とは、決して武力のみを目標としてゐるものではない。勿論武力が最大のものではあるが、それを支へ得る強力な國と國民とを作ることが先決問題である。御承知の通り我が國は足掛五年間の支那事變で莫大な消耗をしてゐる。而もそれはまだ一急には山は見えさうにもない。一時参りかけた重慶政府も、ルーズヴェルトの援蔣聲明で再び息を盛り返して、相變らず我が國への抵抗を斷念しない。従つてこの方面に、今後まだ相當の消耗を覺悟しなければならぬ。

更に占領地域の經濟建設、滿洲國の發展に對する助力等にも大きな力を注がなければならぬ。

その上へ強力な國防國家を樹立しやうといふのであるから、その苦勞の並大抵でないことは素よりとして、これに要する物資の補給は、正に我が國にとつて、刻下の重大問題なのである。日米の關係が昔の通りでさへあれば、多少高い物を買はされるにしても、金の準備に事缺かぬ限り、仕入品に心配はなかつた。しかしその仕入先が大戸を閉めてしまひ、しかもそれに代るべき蘭印の態度が今以て仲々煮え切らぬ。こんな状態が、今後も永く續くやうであつたら、果してどうなるであらうかと案じるのは、決して一部の國民だけではあるまい。

しかし、成程高度國防國家の建設に對しては、國民の非常な決心と、努力と、それから多量の資材とを必要とするが、その勞苦は一時的のものである。幸ひにして國家と國民との一心同體がうまく行き、豫定された國防國家が出来た。曉はどうかであるか。何處からも、誰からも一指も染めさせないやうな強力な日本が實現した。曉には、求めずとも東亞共榮圈は招來されるのである。世界が公認する東亞の安定勢力として、日本がその堂々たる威容を示し得たなれば、東亞の諸邦は翕然として日本の傘下に集まるに違ひない。そうなつては、英米がどんなに齒ぎしりしても、最早全然爪を立てることは出来ないのである。高度國防國家の狙ひどころは實にこゝにある

のだ。

戦争が起り得ない程確かりした國家を作り上げる。この日本の精神を英米諸國は理解しやうとしないのである。多くの國家はその強力になる目標を、他國への勢力伸張に置いてゐる。弱肉強食のために強大にならうとしてゐる。しかし我が國の場合は全然その反對である。我が國は他國を侵略するために強くならうと考へたこともなく、またその必要もないのである。日本は東亞の大黒柱であらうと念じてゐる。東亞諸國が仲睦まじくお互に榮えて行くことが唯一の目的なのである。それにはその大黒柱が確かりしてゐなければならぬ。他から、餘計な差し出口をさせないだけの睨みを利かしてゐなければならぬ。その確かりした大黒柱さへ立てられれば、他からのおせつかいが出来ないから、自から戦争などは消滅する。

### 三千年の蓄積

當分日本はエライ。非常に骨が折れる。けれども、我が國が、英米等の見るやうに、しかく貧乏國であるだらうか。そんなに物も金も乏しい國家であるだらうか。英米の壓力によつて、遠からず音を上上げるほどの貧弱な國家であらうか。これは一度靜かに考へなければならぬ問題である。

我々はこの物や金の詳細な數字を掲げる自由を持たないが、日本は決してそんな貧弱な國ではないと斷言することだけは出来るのである。最近の新聞に依れば、米國の經濟研究所では、近頃に至つて日本の經濟力に對する米國の觀察が誤りであつたことを指摘してゐる。今になつてこれに眼覺めたことは聊か遲きに失する恨みがないが、それにしても、米國にも具眼の士がゐることだけは確かである。彼等は、日本の經濟力が、決して米國人の考へてゐるやうなヤニツ、こいものではないと叫んで米國民の反省を促しつゝある。この警鐘には善惡二様の解釋がつけられる。一つはそれ程日本は確かりしてゐるのだから、もつと端的に締め上げなければ駄目だといふ見方であり、他の一つは、日本は米國あたりの經濟壓迫では仲々參りはしないから、宜しく從來の脅迫政策を清算して共存共榮の方途を撰ぶべしといふ見方である。その何れをとるかは今後の問題であり、恐らく後者は全米國民から斥られるであらうと思はれるが、兎も角日本現在の經濟力は、米國に於て、甚だ抽象的ではあるが、右のやうに再認識されつゝある。

客觀的に我々が我が國を考へてみても、日本の經濟がそんなに薄弱だとは、どうしても思はれないのである。建國以來三千年の長い間に蓄積された國力は、數字や統計以外のものを持つてゐ

る。眼に見えぬところに非常に大きな経済力が蓄積されて來てゐる。所謂古河に水絶えずの謠もある通り、これだけ古い歴史を持つた國家を、米國あたりの成り上りの國家が、自家の物差に當て、計らうとすることは、それ自體が大きな誤りである。

### 樂觀悲觀共に禁物

さればと云つて、我々が樂觀するのは早飲込みである。國勢グラフに依つて見るに、列國の工業生産指數は、我日本が飛躍的に第一位を占めてゐる昭和四年の工業生産指數を一〇〇として調査した所によると、昭和十四年現在では我國は約一七五を示して居り、異常な躍進振りである。之に對して米國は一一〇、カナダ一一五、昭和十三年六月のドイツが一三五、英國が一二四、イタリアが一五と云つた工合で、我が國の工業が世界的水準に達したばかりか、非常な飛躍をなしてゐることが分る。これは工業の、生産方面のみを見たゞけのことではあるが、我が國の生産面が如何に緊張し、活動してゐるかは、之れに依つて充分推測出来るのである。それだけに、これに要する原材料の補給は國家的大問題たるざるを得ぬ。如何に我が國の經濟的蓄積が長い歴史を持つてゐるやうとも、これ程活潑に生産界が動いて居れば、内地の原材料などでは到底賄ひ切れるものではないし、その不足はまた少々の輸

入では補ひ切れぬものがある。だから徒らに樂觀することは許されぬ。

しかし悲觀する必要もない。その據り處の第一は、日本が一億の國民を持つてゐる點である。一億の國民中には老人も居れば、赤ん坊や子供などもあり、病人もあつて、全部が全部働けるわけではないが、或る調査に依ると、この中の中堅となつて、充分働きの出来る人は約千五百萬人ある。これが所謂日本の中堅勢力である。この計算に依ると、右の千五百萬人が、毎日一割づゝ餘計に働けば、毎日百五十萬人だけの新たな能率が上げられるといふのである。これは中堅だけの話であつて、この他にもまだ働き得る人々は何千萬人となくあるから、凡てが一日に一割だけ餘計に働けば、大掴みに云つて少くとも毎日五百萬人内外の餘分な力を獲得出来ることになる。この大きな餘剩力を巧みに運用したなれば、國家が行詰るなどのことは絶対にあり得ないといふのである。

これは數字の點に多少の疑問はあるにしても、傾聴すべき價値のある所論と云へる。兎も角、一億の國民が絞り出す力は恐ろしいものである。殊にこれが代用品製造方面の科學分野へ働きかけたなれば、國內に産出しない品物でも尤にこれをその科學力に依つて獲得することが出来る。



また一億民が毎日の生活を何割か合理的に切りつめたら、消極的ではあるが、驚くべき物資の救済ともなる。一億民の消費も多い代りに、これが一つの固まりとなつて協力したならば、凡そ出来ぬものは何一つないと云ふやうな状態を作り得はしないか。こゝらはお互に充分考へなければならぬところである。

### 大陸と印度支那の力

第二の點は滿洲、蒙古、支那の大陸及び佛印、泰等からの補給力の問題である。こゝでは一々數字を擧げて説明する餘裕を持たないがこれらの地方から齎される資源は、實に大きなものがある。只今のところでは、まだ幾多の完成を將來へ残されてゐるが、日本が必要とする物資は、大抵この地方から補給することが出来る。たゞ石油、ゴム、羊毛等は殆んど期待出来ない。そのために蘭印の提携を希望してゐるのであるが、愈々蘭印が肯んじなければ、その時はその時で方法が無くもない。

衆知の通り大陸からは良質の石炭が豊富に採掘される。その埋藏量は大したものである。愈々となれば、この石炭を現地で液化する方法もある。ゴムは一寸困るが、これとてもその代用品が既に工業化されてゐる。羊毛に對してはスフヤ人絹が出来てゐるから、これまた無ければ無いで

抜け道は作れる。その他の諸材料は、殆んどこれらの地方から輸入出来るものと思つてよい。従つて、今日蘭印との折衝に努力してゐるのは、日蘭の握手が双方にとつて最も都合がよいからのこと、次善の方法を全然缺いてゐるからに依るのでないのである。ゴムでも石油でも、これをそのまま輸入出来れば、これ程都合のよいことはない。若しそれが出来なければ、代用品を作るために餘計な手數と新たな設備とを必要とするから、それだけ他の生産面へ響いて行く。それを惧れるから、なるべく手間暇のかゝらぬ途を取りたいのは人情の自然である。

只問題は輸出方面のことだ。輸入の方は前述の通りで、何とでも打開の途はあるが、輸出の口を塞がれてはことである。どん／＼生産して、どん／＼それを外國へ賣つて、その金でまたどん／＼どん原材料を仕入れる。この循環さへうまく行つて居れば我が國力はどし／＼充實して行くが、輸出が振はなくなつては大變である。嘗て英米依存關係を清算せんとした時、國內の一部の人々はその反對者があつたのは、一にこれを懸念したからである。我が國の貿易は殆んど英米經濟勢力との貿易であつた。賣るも買ふも大部分がそれに屬してゐた。その大事な取引先と手を切らうとするのであるから、これは一應反對論が生れるのも無理からぬことである。

しかし捨てる神あれば拾ふ神ありで、世の中は案ずるより生むが易い場合が屢々ある。一時的に苦痛であつても、その苦痛は先方でも大なり小なり感じてゐる。五分五分までは行かなくとも七分三分のかね合ひにはなつてゐる。のみならず現今の世界の趨勢は、自給自足主義が經濟の本體とならうとしてゐるのであるから、遅かれ早かれ斯うした運命に直面せざるを得なかつたのである。そうとすれば、日本の今日の方向轉換は、決して早きに過ぎたものではなかつた。我が國は目下も懸命である通り、將來に於ても、共榮圈内の貿易に對しては、懸命の開拓を續けるであらう。更にまた樞軸國間との貿易にも事情の許す限り積極的に相扶け合ふであらう。將來相當の苦勞はあるにしても、それは共榮圈確立が次第に具體化するに従つて、それと歩を同じうして好轉して行くべき約束の下に置かれてゐると思つてよい。

### 注目すべきソ聯との通商

今一つ考へられることはソ聯との通商問題である。現在ではソ聯と我が國との間には何等通商上の關係はない。しかし建川大使がモスクワ入りをして以後、これに關する話題が時々新聞面に現はれて來てゐる。日本とソ聯との間に果して通商協定が出来るか、出来てもそれがどの程度のものであるかは全く窺知を

許さぬ將來の問題であるが、既にドイツと通商協定を結んでゐるソ聯としては、我が國とその道を開く場合も有り得ないとは云へないのである。

當局の努力が奏効して、若し日ソ間に通商協定が成立した暁は如何なるであらうか。ソ聯は何しろあのやうな大國であり、我が國が最も渴望する石油にしても豊富な産出量を擁してゐる。その他各種の原料品を、その地下に地上にどつさり持つてゐる國である。殊にそれら物資の輸出ルートが、シベリア鐵道を経てウラチオストクあたりから我が國へ爲されるとしたら、輸入路としては最も安全且つ短距離であつて、假に太平洋戦争が起きた場合でも、殆んど何等の不安なくその交易を繼續出来るのである。

我々は、この交渉が成立するかどうかに就て、輕卒な豫想を下すことは出来ぬ。しかし、成立を望む氣持には切實なるものがある。

とまれ、以上のやうな状態であつて、こゝに太平洋戦争が勃發し、且つそれが長期に亘るにしても、我々は決してそれに怖れる必要はない。實際樂觀も不可、悲觀も不可、たゞ所謂職域奉公の誠を盡すことのみ専念すればよいのである。素より決して樂であらう筈がない。苦るしきは恐

らく倍加されるであらう。けれどもこちらが苦しい時は先方も苦しいのである。戦ひの勝利は、最後の五分間を頑張り通したものに微笑むことを、決して忘れてはならぬと思ふ。

## 三つの豫想

### 日本空襲は可能か

#### 汎太平洋航空路の野心

太平洋戦争がどんな形をとるであらうかは、素より今迄述べて来たことを以て盡された譯ではない。英米側にも秘策があり、その相手國たる樞軸國側にも亦成算がある。どんな形で展開され、どんな形で發展するかは我々の豫断を許さぬところである。しかし戦争の粗筋として、起り得べく豫想されるものは以上を以て大體述べ得たつもりである。そこで今度は少しく方向を代へて、その戦争中に起り得べき可能性のある二三他の問題について、考へておきたいと思ふ。

太平洋戦争を腦裡に描くとき、直ちに我々の思ひ浮べるものは「空襲」のことである。近代戦争と空襲とは、最早離すべからざるものであるから、日米相闘ふ日ともなれば、當然これは、我々の頭上に大きな問題として擴がつて来る。而も我が國からアメリカ本土を空襲することよりも

アメリカ空軍から我々が空襲されることの方が、より多く考へられるのは、人情の然らしむるところであらうか。

御承知の通り、アメリカよりグワム、マニラを経て香港に至る汎太平洋航空路が出来たのは、既に數年前のことである。これがどんな意味を持つものであるかは、その當時殆んど検討し盡され、今更こゝに事新しく持ち出す要もない程であるが、とまれ我が國の南支關は、アメリカの飛行機に依つて、充分すべてを研究し盡されてゐることを想起しなければならぬ。元來航空機といふものは、無限の高空を飛ぶのであるから、どんな方向を取つてもいゝやうなものであるが、實際はそんな簡單なものではない。氣候、天候、地形、その他諸種の條件を知り抜いてゐる空路を飛ぶのと、全然未知の空を翔破するのでは、搭乗員の精神状態に大きく響いて來るのみならず飛行機そのもの機能にも大きな關係を持つものである。であるから、精通した航空路を持つといふことは、或る意味に於て、鐵道や航海路などよりも遙かに價値あるものである。殊にそれが軍事上利用される場合は、彼我の戰鬥力に非常な開きを生じて來る。

アメリカ汎太平洋航空路は商業的な意味よりも、軍事的な意味の方が遙かに大きい。それは商

業航空路の假面を被つて、悉く日本進攻路を空より求めてゐるものである。従つてこの空路は、日米戰爭ともなれば、我々が想像してゐるより以上の、いろんなお役を勤めることになる。その各々の場合は今迄にも隨所で觸れて來たから重複を避けるが、米國が、その海に厩大な兩洋艦隊の竣工を急いでゐる半面、空よりの渡洋作戰をも、早くから企圖してゐることは、見逃してはならないのである。

### アリユーンシヤン群島の重要性

若し米國が日本を空襲せんとする時、距離の點から云つて最も近いのはアリユーンシヤン群島である。この列島は北太平洋に於て、アラスカと、ソ聯のカムチャツカ半島と、我が千島とを繋ぐ一連の飛石に類するものであつて、千島の北端たる占守島と、アリユーンシヤン列島の西端にあるキスカ島との距離は、直線にして約二千キロしか離れてゐない。この有利な地形を利用して日本の空襲を企圖すれば、それは決して不可能とは云ひ難いのである。

そのためばかりではないが、米國はこのアリユーンシヤン列島中のアラスカ海岸に近いダツチ・ハーバーと、その最西端なるキスカ島とに空軍基地を設けてゐるのである。これらの外にもダツ

チ。ハーバーの軍港を護るために、フェアーバンクス、コチャツクその他にも相當な空軍基地を設けて、いざ鎌倉の場合に應じやうとしてゐるのである。

従つて若し日米戦争が始まつたならば、米國はおそらくこの北方の空から、我が北海道、東北地方への侵入を試みるであらうと思はれる。尤もこのコースは前にも述べたやうに九月以降五月頃までは、殆んど濃霧に閉ざされ、おまけに風雪の荒れ狂ふところであるから、それらの自然現象に阻害されて、一年の中何程も飛行に適する日はあるまいけれど、空襲の可能性は無くはないのである。

しかし現在比較的大量に製作し得る長距離爆撃機の機能から云ふと、キスカから我が北海道への爆撃行は、決して樂なものではない。やつと飛んで来て、なにがしの爆弾なり焼夷弾なりを落して、早々に引返さなければ途中でガソリンが切れてしまふ恐れがある。そんな状態であるから爆撃等も大型のものは持つて來れないし、大型のものでなくともその搭載量は敢て驚くには當らぬ程度のものである。

假に彼等が勇敢にも我が千島や北海道を空襲出來たとしやう。そしてそれがために相當の損害

を蒙つたとしやう。しかしそれが戦争の大局に對して何程の影響を齎らし得るであらうか。我々は樺太や北海道が屢々米國空軍のために空爆を受けても、それに依つて戦意を失つたり、當局無能などいきり立つたりすることは絶対にあり得ないのである。まして我が空軍並びに地上部隊とても、彼等の獨壇場として北海道を音なく空爆に曝しておくやうなことはしない。緊密な防禦網は、よく侵入機を捕捉して、これらの中の何割かを血祭りに上げるに違ひない。

### 大きく響くソ聯の動向

この程度の空襲なれば、多少の威嚇にはなるかも知れないが、戦局には何等の痛痒をも感じないのである。しかし、萬が一にもソ聯と米國との間に何等かの妥協がついて、米空軍の進撃につき、カムチャツカ半島乃至沿海州の一部を、途中着陸場に提供するやうなことでも起きると、問題はしかく樂觀を許さぬものとなつて來る。

識者或ひは私のこの考へを以て要らざる取越苦勞だと云ふかも知れないが、さればと云つて、左様な懸念は斷じて無しと云ひ切れる材料が、何程我々に示されてゐるであらうか。何れ日米戦争が始まることになれば、それは長期疲弊戦の形をとるであらう。その間世界の狀勢が、萬一に

も米國側へ有利に展開し出したなれば、ソ聯今日の態度は、急轉して親米政策に變貌せぬとは保し難いのである。その際ソ聯が、日本に近い地方を米國軍の前進根據地として提供したなれば、北方からの空の脅威は一段とその強さを増さざるを得ない。若し左様な事態になつたからと云つて、それがために日本が参るとは云へないが、斯かる場合も有り得ることだけは、心構の中へ入れておいて然るべきである。

### 西南よりの襲撃

今一つ残るのはフィリッピンである。これに就ては前にも觸れてはあつたが、フィリッピンよりする空襲も、亦當然考慮に入れられなければならぬ。今米國は盛んにこゝへ軍用機の輸送を行つてゐる。その目的は多分フィリッピンの防備と、シンガポールへの援助と、日本攻撃の三つであると思はれる。

その日本攻撃の目的は、一つは我が本土への空襲、一つは輸送船團や我が海軍に對する攻撃といふ點にある。しかし我が本土の空襲に對しては、餘り大を期するわけには行かない。比島と我が長崎との間は約千二百哩の距離で以て距てられてゐるのみならず、その進攻路中には臺灣の防備圏あり、西南諸島の防備圏ありで、九州の一角に取りつくまでにも、幾つかの難關を突破して

來なければならぬのである。勿論或る場合はそれらの防備圏を突破して九州方面に現はれることもあるであらうが、これまた北海道方面と同様、我に致命的な損害を與へ得るやうな攻撃は到底出來ないものと思つてよい。

たゞ臺灣の各地は、屢々彼等の爆彈を見舞はれるであらう。このことは覺悟しておかねばならぬ。臺灣は絶好の空襲圏内に入つてゐるのであるから、この方面だけは、十二分の警戒を必要とする。しかしこれは、我方にとつても同様であつて、比島はまた臺灣からは手頃の空襲圏内である。しかも我には新銳の新手がいくらでも待つてゐるのであるから、双方の制空權が何れの手に歸するかは改めて申すまでもないことである。

### 航空母艦による空襲

斯うしてみると、米國が日本に効果的な空襲を試みやうとしても、日本近海の陸地から空軍を放つてこれを行ふと云ふことは、先づ絶望に近いことがわかる。これは敢て樂觀を誘ふための論ではなく、事實なのである。そこで當然考へられるのは、航空母艦による空襲である。これなれば好きな海面へ進出して、適當な場所から、適當な時機に飛行機を飛ばし得るから、最も理想的である。今日國民が案じてゐる點も、大

方はこゝに存すると思ふから、この點については少々詳しく検討して見ることにしやう。

現在米國が有する航空母艦を基準にして、近い將來に日米戦争が起るものと假定すれば、そしてその母艦を全部日本近海へ進出させ得るものとすれば、我が近海へ一度に約八百機の飛行機が進出して來ることになる。この外に戦時急造の補助母艦をも作るであらうから、それらをも計算に入れると、ザツと千機内外の勢力を、日本襲撃のために持つて來ることが出来るのである。尤もこの千機全部が空襲に用ひられるわけではなく、その中には母艦自體を護る哨戒機や戦闘機も含まれてゐるから、實際我が國の都市を爆撃し得る機数は五百機内外のものである。

次に、それでは、この多數の攻撃機を積んだ母艦は、日本のどの邊まで來て攻撃に移れるかである。大體母艦の搭載してゐる飛行機は、大型のものは殆んどない。米國の機密に屬するから、正確な數字を擧げることが出来ないが、大體爆彈搭載量は二噸が限度と見て甚だしい間違ひはあるまいと思はれる。この程度の攻撃機の航続力は、先づ一千キロ内外のものである。従つて有効な爆撃を行ふためには、航空母艦は少なくともその目標とする土地から、二百哩以内へ進出しない限り攻撃には移れないものと思はなければならぬ。

そこで地圖を案ずるに、若し航空母艦に依つて、米國空軍が東京を爆撃しやうと企てるなれば東京、小笠原間は約五百二十哩であるから、略東京と小笠原島との中間へまで侵入して來なければならぬ。これは實に容易ならざる冒険である。

### 乗るか外るか

我が國の海岸から、二百五十哩附近は、勿論殆んど領海のやうなものであつて、あらゆる方法に依つて、十二分の警戒網が敷かれてゐる。米國海軍當局は、これを以て日本のヒンデンブルグ線だと云つてゐるが、或はそれ以上のものであるかも知れない。その嚴重な警戒線を突破するに就ては、彼等にも何らかの秘策があるであらうが、どんな秘策があつたにしても、それは至難中の至難事であることに少しの變りもない。全く乗るか外るかの大冒険である。

しかし、何分にも廣い海面であり、夜といふ厄介なものもあることだから、その間隙と夜間とを巧みに利用して、彼等が飛行機を飛ばすことに成功したとしたらどうなるであらうか。爆撃機は爆彈なり焼夷彈なりを腹一杯つめ込んで飛び立つた。彼等はおそらく、あらゆる方向をとつて四方より帝都に迫るべきコースを撰ぶであらう。けれども、この時は既に我が空軍の迎撃を受け

る時でもあるのだ。爆弾を満載して機體の重くなつてゐる敵機に對して、百戦練磨の我が軍群は、好餌ごさんなれと食ひ下つて行く。この空中戦は絶對的に我が軍に有利である。

### 送り狼戦術

しかし、數百の敵機を残らず叩き落すことは困難かも知れぬ。その中の何機かは我が猛撃を潜つて帝都の上空へ現はれるかも知れぬ。そして、所謂盲爆を行つて倉皇として機首を廻らすであらう。この位のことには、戦争である以上止むを得ないことである。地上防空は訓練された市民諸君の活躍に任せておいて、我々は次に展開されるであらう戦果を見やうではないか。

爆撃の重任を果した敵機は、霧地に母艦へ急ぐ。逃げるを追ふて我が爆撃機は大舉南下する。やがて敵機の行手に見えて来るのが彼等の集たる母艦である。敵は本能寺にあり、これを見つけた我が荒鷲は、今度は攻守處を異にして、この母艦に對して猛然と集中爆撃を加へるであらう。それと同時に、無電をキヤツチした附近の我が軍艦は、急遽その附近に殺到して、之れに巨砲の火蓋を切るであらう。斯くて光榮ある第一回の日本空襲部隊は、六隻の母艦と、數隻の補助母艦と、千機の飛行機とを太平洋の海底深く沈めてしまふのである。

これは甚だ日本にとつて都合のよいお話かも知れないが、彼等が集團的な爆撃戦法を採らずして、各艦各地に分散し、或るものは九州を、或るものは京阪地方を、或るものは名古屋附近を、或るものは京濱地方を、更に或るものは東北の要地を、各個に爆撃しても、その結果は大體同様である。一旦母艦を飛出した飛行機は、それを以て百年目と思はなければなるまい。

尤も降伏を一種の名譽と心得てゐる歐米人のことであるから、空襲を終へたら何處かへ不時着して白旗を掲げる手を考へてゐるかも知れない。殊に俘虜を優遇するなどと思はれてゐる日本のことであるから、求めても不時着地を探し出すかも知れない。それなればそれでもよい。熱達した飛行士を敵の手に委ねてしまふことが、如何に辛いものであるかは、間もなく米國自身が痛切に感ずるであらうからである。

### 警戒すべき飛行艇

航空母艦による日本空襲は、右の通りで、米國がその母艦と艦載機とを日本の海底へ供養するつもりでなければ實行困難である。しかし不可能ではない。やる氣でかゝれば多少の成果を擧げることが出来るであらう。たゞ米國が、それに要する犠牲を問題にしない場合のみに限つての話である。



但し、飛行艇の出動を見ると、ことはこれほど樂觀を許さぬのである。航空母艦の場合は、皮を切らして肉を切るの筆法で、その母艦をさへ沈めれば一切は終りとなるが、飛行艇には母艦がない。彼等はそうした艦隊戦術からは獨立して、勝手に基地を物色し、好きな時に飛び上ることが出来る。従つて、これの根據地を突き止めて、一舉に屠るといふやうなことは、仲々容易ではない。

しかも彼等は極めて大型であり、それにつれて搭載量も航続距離も、航空母艦の飛行機とは問題にならない程優れてゐるから、かなりの遠距離より、相當な爆弾や焼夷弾を積んで行動を起すことが出来るのである。おそらく米國が日本への空襲を志す場合は、この飛行艇の機能を極力利用するであらうと思はれる。そのためには、チャイナ・クリツパーが調査し盡した汎太平洋航空路附近の氣象や地理が、大いに物を云つて來るのである。

尤もそうは云つても、その航続距離には自から限度がある。重爆撃機としての航続距離は、現在作つてゐる「空の要塞」を除いては、四三〇〇軒までが限度である。大抵は三五〇〇軒のところであり、それが中堅をなしてゐるやうである。この航続距離を以てしては、遠距離の基地から

飛んで、再びそこへ戻るには、どうしても途中一度大洋中に着水して、何等かの方法に依り給油しなければならぬ。辛うじて無着水を以て飛んで來れるのはフィリッピン位のものであつて、グワムからもウエークからもミッドウエーからも、一氣の空襲は不可能である。

として見れば、航空母艦に依る場合と同様、日本空襲は不可能に近いと考へるかも知れないが、しかし無電連絡に依つて給油船と緊密な連絡がとれれば、着水場には事缺かないのであるから、我が方の警戒を外にして、悠々と給油を受けることも出来る。問題は、この給油船との連絡如何に掛つてゐる。その外に、飛行艇に依る空中給油の方法も考へられる。日本の空軍や海軍からの攻撃の憂ひがない地點で、空中から給油を受け得れば、却つて給油船を使用する場合よりも手取り早く用を便することが出来る。斯様に、兎も角も飛行艇に依る空襲は、航空母艦の場合よりも、遙かに可能性が多いのである。

### 若し十機の侵入を許さば

これに對しては勿論我が方に萬全の策はあるであらう。しかし獨英戦を見ても分る通り、念の上に念を入れた對空設備が出来てゐても、或る數の敵機は、必ずそれを突破して、目的地の上空に達し、爆撃を敢行してゐ

るのである。殊に長大な海岸線を持ち、且つ表から裏へ抜けるには何の難作も要らぬ細長い我が本土は、表玄關からも裏口からも、侵入し得る機会には存外恵まれてゐるかも知れない。何しても敵機は一萬メートル以上の高空から來るのが近頃の常識であるから、これをその侵入前に捕捉するには、餘程の困難が伴ふものと考へられる。而も敵機襲來を知つたにしても、それが帝都なら、帝都より大して距離を持たぬやうな地點で発見されたとすると、もう地上に待機してゐる飛行機では、一寸迎撃の間には合はないのである。敵機來を知つて直ちに離陸しても、一萬メートルの上空に達するまでには相當の時間を要する。その間に敵機はフルスピードで帝都へ侵入し、持つて來ただけの爆彈を所構はず投下してしまふであらう。

若し斯うした飛行機を、假に十機だけ帝都へ侵入させたならば、その被害は相當甚大な數字に上るのである。世界で防空設備の最も完備してゐると云はれるロンドンですら、ドイツ空軍の猛烈にはほとく參つてゐる。況んや木と紙とで出來た我が都市などは、敵機十臺の搭載爆彈で、一都市を灰燼に歸することぐらゐは、存外わけのないことかも知れぬ。静岡の大半を烏有に歸した大火も、その火元は一ヶ所に過ぎなかつた。當日若し相當の風のあるところへ、數百個の焼夷

彈がバラ撒かれたならば、怖らく收拾のつかない状態になるのではあるまいか。

### 怖るべき瓦斯彈

米國のエツチ・ウツド工廠では、毎日百噸のホスゲンと、八十噸のイペリットとを生産してゐると云はれる。イペリットもホスゲンも共に猛毒性の劇薬である。殊にイペリットは空氣の約五倍半の重さを有し、これを嗅げば呼吸器と肺とを犯して腫れ上つてしまふし、これに觸れると皮膚がゾツとするやうな糜爛を起す。しかもこれが一立方メートルの空氣中に、僅かに〇・三グラム混入してゐると、一分間を待たずして一人を殺すことが出來るといふ物凄い殺人力を持つてゐるのである。

今専門家の説を聞くに、東京市の全市民を一分間で殺さうと思へば、百九十二噸のイペリットがあればよろしいし、三十分かゝるつもりなれば僅かに六噸半でその目的を達することが出来るのである。これは勿論一つの標準を示すものであつて、この數子そのまゝを實際と結び合はせるわけには行かないが、とにかく、斯うした猛毒性の瓦斯彈をどしどし落されたとしたら、そしてそれに對する何等の防毒法をも持たなかつたとしたら、その慘害實に目を蔽ふものがあるであらう。

斯うした瓦斯弾だとか、細菌弾などは、最後の苦しまぎれに使用されるものであらうが、何れにしても我々は、敵の空襲の前に立たされてゐることは否定出来ないものであるから、この時の心組をもしておかなければならないのである。

### 空の要塞

序のことに、今世界の話題になつてゐる「空の要塞」即ちダグラスB1十九の超重爆機についても少しく書いておかう。この途方もない飛行機については、新聞雜誌その他で、トピックとして様々に扱はれてゐるから、最早一般に知られてゐることと思ふが、さつとその輪廓を描くと斯うである。

即ち發動機はライトの二千馬力のものが四つ据付けられてゐるから合計八千馬力といふ強力なものであり、全體の重量が七十噸、貨物は二十八噸積める。それへ十名の乗務員を載せて、尤に一萬軒飛べるといふのだから、専門家たらずとも驚かされるシロ物である。つまりニューヨークから飛び出して大西洋を渡り、歐洲へ着いてそのまゝ引返し、再びニューヨークへ戻つても、まだ少々ガソリンが残つてゐるといふのである。これは陸軍機であるが、海軍もまたこれと略同型のものを作りつゝあると云はれる。

斯うした並外れた大型機を持つのが得策か、それとも手頃の爆撃機を數多く持つことの方が得策かは多くの疑問と議論の存するところではあるが、兎も角世界一の超重爆機を作るといふことに米國の意圖が伏せられてゐるものであつて、その實戰的價値は第二義的なものであらう。彼等はこれに依つて米國を誇示すると同時に、これに依つて樞軸國への威嚇をも試みんとするものである。

しかし我々は、そんなものに少しも驚かない。何故なれば、この途方もない飛行機を一臺仕上げるには、實に二ヶ年の日子を要するからである。斯うした氣の永い飛行機が、大消耗を續ける戦争中に何臺も出来るわけのものではないし、よしんば少々は出来るにしても、それが何程の戦鬪力を持つものであらうか。我々は、斯かる飛行機を作り得る米國の科學力に對しては敬意を表するものであるが、それを以て「戦争」に對し、何等かの力を期待するものとしたら、依然たるヤンキー氣質に一掬憐愍の情を寄せざるを得ないのである。

### 怖れず備へよ

とまれ日米戦争ともなれば、我々はたゞ小なりの空襲を免れるわけには行かないであらう。しかしそれは何處の國民でも同じことである。戦争と

空襲とは不可分のものであるから、それに依つて士氣を沮喪させるやうでは、到底相手國に勝つことは出来ない。この覺悟の程については、既に最早充分の自覺が生れてゐることと思ふから、敢て蛇足を加ふるまでもあるまい。常に怖れず備へよである。必勝の信念を持つ英國人は、ロンドンの大半を潰されたながら、尙且つ動搖を見せず居らぬ。この點はロンドン市民を大いに學んでよいと思ふ。

及川海軍大臣は、この點について今議會で次のやうに述べてゐる。蓋し中核を射貫いた至言であると思ふから附記しておかう。

「防空施設に關しては、過日の閣議でも計畫的にやつて行くといふことに決定したが、要は、防空といふことは、設備よりもむしろその大部分は精神的の問題である。語弊があるかも知れないが、いはゞ爆彈が落ちて、これを手で受けるといふ位の精神が大切である。この精神的方面の訓練が極めて大切で、いま數億の莫大な追加豫算を計上して、防空設備につき込んでも、その効果は大して上らない。眞の要諦は、國民の精神力にあることを銘記されたい」と。

## 窮餘の南洋攻撃

### 有り得べき場合

今一つ有り得べき場合として考へられることは、我が委任統治領の占領問題である。米國艦隊が西太平洋に於て作戦せんとするとき、最も邪魔なのが我が南洋諸島であることは既に述べた。而も米國が飽くまで日本壓迫乃至は進攻の初一念を捨てない限りは、どうしても彼等はこの南洋諸島を攻略しなければならぬのである。

バイウオーターにしても、ガンサーにしても、キラルフィにしても一様に此點を認めてゐる。おそらく米國海軍當局でも、私に我が委任統治領攻略について、秘策を練つてゐるものと思はれる。事實、南洋諸島(以下便宜上斯ふ略稱する)は、不幸にして日米相戦ふ日となれば、その價値は正に關ヶ原にも比すべき場所である。若し米國のお望み通りにこれを彼等の手に委ねたならば、我が國にとつて梯子を取られた二階住のやうな形となつて、そのことだけで完全に封鎖されるを得ない。その代りこれを飽くまで我が國が確保する以上は、滅多なことに米國の進出を許すものではない。

こゝに至つて、我々は多少の重複を厭ふことなく、もつと深く南洋諸島に就て知つて置く必要に迫られる。

### 南洋の俯瞰圖

一口に南洋と云つても、その範圍は實に廣い。マーシャル群島の東端からカロリン群島の西端までは約二千三百哩、カロリン群島の南端から、マリアナ群島の北端までは約千三百哩といふ廣大な海面を占めてゐるのである。つまり東西の長さは樺太から臺灣に至る程あり、南北は北海道より九州に至るだけの長さを持つてゐる。この廣い範圍内に無数の島嶼が散らばつてゐるのであるから、云はゞ太平洋の中に無数の散兵壕をバラ撒いてあるやうなもので、この散兵線を突破するのは容易の業ではない。

殊に全島すべてこれ珊瑚礁で出来上つた島であり、その珊瑚礁がまた、軍事的に見て全く理想的な形を持つてゐるのであるから、尙更重寶なものであり、攻撃する側にとつては厄介千萬な存在となつてゐるのだ。

### 日本領の珊瑚島

同じ珊瑚礁でも、軍事的に見て、却つてそれがあつたために作戦用兵上の妨害となるものもあるが、我が南洋諸島のそれは、最も恵まれた自然の

要害をなしてゐる。これを仔細に研究したキラルフイは、「太平洋作戦論」の中で次のやうに委曲を盡してゐるから、少し長いが全文を掲げて私の説明に代へることにしやう。

「日本の珊瑚島は凡て委任統治領にあつて、太平洋上二千八百哩に擴がつてゐるが、その中心となつてゐるのは環礁の典型とも云ふべき、トラツク島(東カロリン群島)である。一邊四十哩の三角形の内部には、非珊瑚島が無数にあり、その或るものは幅五哩、縁から五哩以上の地點に千五百呎の山があつて、重要水路を制壓してゐる。小湖礁が大部分を占めるカロリン諸島が、トラツク西方からパラオ諸島に伸びてゐるが、その中間のラレイアイ島は、小さな双子の湖礁が完全に南に向いてゐるけれども、兵力を駐屯せしむることが出来、パラオは航空基地とするにも、また艦隊の碇泊地とするにも適してゐるが、これは裾礁と堡礁との結合である。珊瑚で出来た堤防の背後にかくれて、艦船は、全島の延長六十哩に沿つて通過出来る。港内には小島が一杯あり、陸地には小丘の點々としてゐる港が澤山あるが、それは複雑な内礁と、極めて危険な暗礁の間にあるので、一九一四年には、船上にこの地の水先案内を乗せ、小艇に道案内をさせたにも拘らず、ドイツの特務艦が坐礁したことがあるほどである。然し珊瑚礁に接近することが出来れば、巡洋

艦一隻で、全碇泊地を砲撃し得るであらう。

トラツク島の西北で、グワムの北方に横たわるマリアナ諸島中には、珊瑚で出来た水雷除け保障の港は一つしかない。それはサイパン島で、トラツク島の東には、ボナベ島とクサイ島と二つの裾礁があるが、何れもその高地には洞穴が多い。その背後にはマーシャル群島がある。この群島は百二十哩の間隔を保つ二列の湖礁であるが、兩列とも各島間の距離は平均五十哩である。略アメリカの西海岸に平行し、ビュチエツトサウンドから、サンフランシスコに到るものとやゝ似たる配列をなしてゐる。東の列には北の方に、水路のない「航空機」の前哨陣地となし得るものが三つあつて、その一つはウエーク島の南方四百哩の處にある。尙中央のアロエラツプは海空軍陣地となし得る。西の列も同様に澤山の島があるが、これも同じく海空軍陣地となし得る。ロングセラツプは二十哩の湖礁、クツゼリンは幅十哩長さ六十哩の島であり、更にヤルト島は五十の島から成る縁を有し、その直徑は十二哩である。そのうち商業上最も重要なヤルト島には北方に十哩も延びた、狭い、珊瑚に圍まれた堤防がある。珊瑚礁と小島とが、この主要水路の一つを變へて、船の針路を除けねばならぬ玄關にしてしまつてゐるのだ。この湖礁のうち四十ほどは

二個乃至五個の水路を有してゐるが、水路のないものは十七しかない。これらの「海の要塞」がアリユーションに於けるアメリカ根據地設定に影響したことは疑ひないところである。米國軍事評論家の見た我が南洋諸島は大體以上の通りである。

### グワム島への執着

この南洋諸島に取り圍まれて存在するのがグワム島である。米國はハワイとグワムとをどうしても完全に繋いで置きたいと思つてゐる。グワムさへ健在であれば、そこはハワイからマニラへ通ずる絶好の足溜りとなるのみならず、日本に對しても僅々一千三百哩の近距離に前進根據地を持ち得ることになるからである。

しかし開戦同時にこの島の運命は甚だ悲觀的である。流石の米國でも、一先づグワムは日章旗の下に潜伏せざるを得ないと見てゐる。それだからと云つて彼等はこゝを諦めてゐるわけではない。一度は日本の占領に委ねざるを得ないにしても、間もなく必ずこれを奪ひ返すつもりであるのである。事實グワムを奪ひ返さない限り米國に勝利はない。しかしそのグワムを奪還するにはこゝにどうしても我が南洋諸島を攻略してかゝる必要が生じて來るのである。

米國には、この攻略を爲し得るものなりと斷定する人々が相當あることは注目に値する。素よ

りこれが如何に困難を極める作戦であるかは、彼等も充分知つてゐるが、その困難さは、日本が米國を攻めんとする困難さと較べたならば、決して不可能に屬するものではないと云ふのである。その所論の一部を拉して來ると、次のやうなことを云つてゐる。

「而もこんなこと（註——作戦の非常に困難なこと）を全部云ひ盡した後と雖も、また我々の要する多大の努力と當面すべき危険とを天秤にかけた後と雖も、また我々の重要前進根據地（ハワイ）から數千哩も離れた地點で戰爭することの困難に關して、必然的に簡單な不十分な説明に止めたけれど、その困難はかうした主要地點だけではなく、その中にはまだ説明すらなかつた困難や重荷が數へ切れぬ程含まれてゐるといふことを考へた後と雖も、また一旦戰爭となれば、形勢の變轉は無限であつて、後退や、失望や、損害や失敗も時に避けられないといふことを考へた後と雖も、而も尙確信を以て斷言し得る。若し必要とあらば、かうした努力は決して米國の國力にとつて、なし得ざるところではないといふことを。而してこれこそは太平洋戰略上、最も重大な事實である。どうしても戰はなければならぬといふ時には、我が國は日本の安全を夥しく脅かすに足る攻撃を日本に對して行ひ得るに反し、日本は我國に對し同様のことを行ひ得ないといふことで

ある」

この意氣に對しては大いに敬意を拂ふものであるが、さて彼等が云ふ通り、果して日本を脅威出來るかどうか、これは冷靜に考へてみても、甚だ危いものである。

### ヤルット島の攻防戰

彼等がグラム島に達せんがためには、順序として、ハワイに最も近いマーシャル群島中の、ヤルット島から始めなければならぬ。その時どれだけの陣容を以て攻めて來るか、想像の限りではないが、少くともハワイにある全艦隊の半に達する勢力を割かない限りは、充分の成果を擧げることには出來ない。但しこれも、その附近にあるだけの我が海軍を目標にしての話であつて、萬一にも我が主力が之れの迎撃に出動するやうな場合を豫想するならば、怖らく米國はその全艦隊を携けてヤルット攻略に向かはねばならないのである。

ハワイ、ヤルット間は約二千百哩であるから、彼等は眞珠灣を出發後五六日を以てこの附近に進出することが出来る。しかしそれは、眞珠灣附近に監視網を張つてゐる我が哨戒隊が何等の働きも出來なかつた場合に限るのである。彼等がその哨戒網を全滅させた後に出發したのであれば

或は無事にマーシャル群島へ達し得るであらうが、そうした奇蹟は絶対にあり得ない。彼等が眞珠灣を出るや否や、我が哨戒網の電波は瞬時にしてこのことを報じて来るは必定である。

急報に接した我が南洋警備の諸艦艇は、直ちにマーシャル群島中の要所々々に身を潜めて、竊かに彼等の近付くのを待ち構へてゐる。舳艫相含んで堂々の陣を張つた米國艦隊が、マーシャル群島の我が警備圏附近へ迫つたなれば、弦を放たれた矢の如き我が艦艇と空軍とは、直ちに之れに襲ひ掛つて、こゝに壯烈なる攻防戦が展開されることになる。

無数の島々は我が奇襲艦隊にとつて絶好の稼ぎ場所である。勝手を知りつくした海面を縦横無盡に馳驅して果敢なる攻撃が続けられる。若し米艦の中にヤールト島へ近付くものがあつたなれば、突如椰子の葉蔭から巨弾が唸りをあげて飛び出すであらう。どんなに彼等が躍起となつても、そう簡単にヤールトは陥るものではない。

兎角する中に夜ともなれば、一つの假碇泊地をも持たぬ攻撃軍は徒らに洋上を遊弋して我が奇襲艦隊の攻撃から免れやうとするに違ひない。しかしそれが何程の効果をも有するであらうか。全身を暴露して洋上に固まつてゐるそれらの艦艇こそは、我にとつて願つてもない好餌である、お

そらく戦闘の第一夜に於て、彼等は豫想を遙かに突破する損害を蒙ることであらう。

明くれば既に内地を飛出した我が重爆撃機は、彼等の頭上に蝟集して、痛烈なる爆撃を敢行しやう。更にまた必要とあれば、我が主力艦も南下してこれに加はり、痛快なる殲滅戦を展開することもあらう。かくて、どんなに最良目に見ても、米國艦隊のヤールト上陸などは考へられない結果になるのである。

勿論我が方とても多少の損害は免れ得ない。彼等がヤールト占領を企圖する限り、それは一種の決死隊であるから、華々しい武者振りを見せるであらう、時に依つては、航空母艦や艦載の飛行機だけではなく、重爆撃飛行艇の攻撃に會ふかも知れない。しかしそれはお互である。ハワイヤールト間と、東京、ヤールト間とは約四百哩だけ東京の方が遠距離にあるが、それは問題ではない。何となれば我が方には途中着水又は着陸の便宜がいくらでもあるからである。そればかりでなく、マリアナ、カロリンの諸群島等の手近から應援を求める便宜もある。これに反して米國側は、ハワイを飛出した限り一つの中継所をも持たぬのであるから、その間に彼等の戦闘力に大きな差が生じて来る。結局空軍の對戦に於ても、我が方は決して彼等に譲るものではない。



### 若しヤルートが占領されたら

想像も出来ないことではあるが、凡ての條件が我に不利で、遂にヤルートを一時彼等の手に委ねるやうなことになつた場合はどうであらうか。これこそ本當の「假定」ではあるが、萬々一そんな事實が生れたにしても、我々は少しも失望する要はないのである。廣大な南洋諸島の、日本に最も遠い一端が彼等の足場にならうとも、それに依つて直ちに全面的な不利が我が軍に襲ひかゝるなどのことは有り得ない。

我々はこゝで一息入れて、心氣新に次の作戦に移ればよいのである。彼等の目的はグワムにある。グワムに達するには南洋の島々を片つ端から占領して行かなければならぬ。然るに、ヤルートの隣りの東カロリン群島だけでも、尤に三百八十餘の島々が碁布されてゐるのである。第二段の攻略地として彼等は嫌でも應でも之等の島々へ取り掛らなければならぬ。これは決して生やさしい作戦ではないのである。彼等はその全力を傾倒しなければならぬ。そのためにはハワイ若しくは米本土との兵站線を確かりと組立て、爾後の作戦に何等の支障をも起させない用意が絶対に必要である。

彼等の攻撃が永引けば永引く程、増大すればする程莫大な兵力を用ひなければならぬ。しかもその攻撃が日本に近づくに従つて、日本の反撃は力を増して来る。愈々兵站線の責任は重きを加へ、攻撃軍の困難もその度を加へて来る。おまけに彼等は根據地らしい根據地を何處にも持つてゐないのである。艦艇に少しの修理を加へるだけのためにも、一々ハワイへ歸らなければならぬ。攻撃力には常に變化を餘儀なくされ、陸兵の交替も仲々圓滑には行かない。

これが、餘程萬事調子よく行つた場合のことである。順調に行つても容易ならぬ困苦に當面する。然るに我が方は、一方に於て彼等を正面から攻め立て、他方では兵站線の破壊に全力を盡すであらう。あらゆる角度から熾烈な反撃が繼續される。兵站線を攪亂されたならば、彼等の攻撃力はその瞬間から次第鈍りに鈍つて行く。故障の起きた艦艇はこれを收容すべき船渠を持たぬから、そのまゝ艦列から退いて再び物の役に立たなくなる。上陸を食ひ止められた陸軍は艦船内に充滿して次第に飲料や食料にも事缺くやうになる。斯くて健氣にも彼等が攻撃を續けるなれば、遂には全滅の悲運に遭遇しないとも限らないのである。

斯く考へ來るとき、或る場合にはヤルートの一時放棄も亦、萬更捨てた作戦ではないとも云へ

る程であつて、決してそれに依つて不安を感じる必要はないのである。

### グワム到着二年計劃

この困難さは米國海軍當局も百も承知である。

「これはみんな時間のかゝることだ。グワムが戦争の初期に於て、日本軍に占領されたと假定して——事實これは確實であるが——これを恢復し、日本軍を近くサイパン島から驅逐して根據地を確保し、いよく遠距離封鎖作戦を始めるまでには、最初眞珠軍港を出発してから、どんなにしても一、二年の歳月を要するであらう」

とは、偽らぬ米海軍部内の述懐である。それでも尙彼等は、一、二年の歳月を積み重ねれば成功出来ると思つてゐる。これは支那のやうな海軍力の貧弱な國であれば、或は希望通りの目的を達することも出来るかも知れないが、堂々たる世界の海軍國日本を敵として、斯かる目算を立てるなどは、日本に對して甚だ禮を失する次第ではあるまいか——と思ひもするのである。

假に彼等の二年計畫をこゝに取り上げるとしても、彼等の作戦地は云はゞ委任統治領と云ふ一つの大きな籠の中での仕事である。八方から、四六時中休みなく攻撃されながらこの作戦を遂行して行くには、壓倒的に強大な兵力を持つてゐなければならぬ。沈められても沈められても次

から次へと新手を廻し得るだけの實力を持つてゐなければならぬ。殊に強敵を相手とするのであるから、その損害は想像に餘りがある。損害の補給は常に迅速に行はなければならぬ。然るに彼等はハワイからでも二千哩以上の遠隔の地で戦はねばならぬのであるから、單にそのことだけでも殆んど絶望である。況んや續々新手を繰り出して、二年間もそれを續けるなどの藝當は逆立ちしたつて出来るものではない。軍艦そのものは奇蹟的に作り得ても、之れに乗る人間は奇蹟や科學では生れないからである。

### 一片の夢想のみ

これを要するに、我が南洋群島の攻略などは、結局渡洋作戦と同様一片の夢想でしかない。アメリカ全艦隊を犠牲にする積りなれば、或は一時の占領も不可能ではないかも知れないが、艦隊の全滅は即ち南洋諸島を我に返上する時でもあるから、左様な愚學をやる筈のものでもない。

あらゆる場合のアメリカの攻撃を考へてみても、それを検討すればする程、日本の絶対不敗性が明瞭にされるのみで、一として米國に有利な答案は出て來ないのである。素より戦争ともなれば、それが戦争なるが故に、我が國とても大なり小なりの攻撃を受け、その都度大なり小なりの

損害を蒙ることは免れない。だからと云つて、それらの損害は絶対に致命的なものではない。

致命的な損害なるものは、何等かの誤りで我が主力艦隊が再起不能の打撃を受けるか、さもなくば貿易線が密閉されるかの何れかでしかない。しかもこのことは萬有り得ないのである。我々は我が海軍が健在であり、且つそれが常に攻勢防禦の鐵則を捨てざる限り、日本は斷じて敗れずといふ自信を強くして可なりである。

然しながら、我が海軍は、常にどうしても攻勢防禦態勢から一步も出られないものであるかの點については、まだ一抹の解け得ざるものを感じるであらうと思ふ。何故攻勢防禦の方針を堅持するか。何故我が海軍は、積極的に米國を攻めることが出来ないものであるか。果して攻める力を有しないかどうか。これらの疑問に就て、次に瞥見を試みることにしやう。

### ハワイ、パナマを衝くか

#### 怯ゆるハワイ

太平洋の危機が傳へられることに依つて、米國人の或る者は、ハワイの安全につき相當神經を尖らせてゐる。これは一面無理からぬことであるかも知

知れない。若しもハワイが日本艦隊の占領するところとなつたならば、米國太平洋艦隊の活動は殆んど完全に封ぜられてしまふからである。と云ふよりも、米國は太平洋に對する望みを全部失つてしまふことになる。これは到底耐へ得ないことであるから、眞珠港は、その名の如く掌中の玉として大事にされてゐるのである。

米國は、ハワイの防備に就ては實に完璧を期してゐる。そのことは、太平洋に點在する各要地の中で、この防備費が豫算の大半を食つてしまつてゐることも分る。たゞ眞珠港の陸上防備設備は殆んど申し分なく出来てゐるが、灣の深さが四哩しかないために、その點をひどく氣に病んでゐるやうである。現在の軍艦砲は尤に三十哩を飛ぶことが出来るから、その射程を以てすれば、灣内深く碇泊してゐる軍艦をも、これを相當遠距離から砲撃することが出来る。それを怖れて、海岸には物凄い海岸砲を据付けてゐる。之等の設備を一々列挙してゐる餘裕を持たないが、とも角眞珠灣一帯は堅固無類な要塞を形成して居り、空からも陸からも容易に近寄り難いものと思へばよ。

それ程ハワイは大事にされてゐる。従つて若し日米の間に事が起つたならば、或ひはこゝを攻

撃されはしまいかと、いろ／＼取越苦勞をせざるを得ないのである。

### ハワイ衝くべきか

日米戦争が始まれば、ハワイの存在は兩國にとつて實に重大な意義を持つて来る。平時でもこゝに米國の太平洋艦隊が集結してゐるだけでも、我が國は何となく咽に物の引掛つたやうな氣分にされてゐるのである。戦争ともなれば、それは引掛つたぐらひの騒ぎではなく、實に米國そのものがハワイへまで押し出して來た程の壓力を感じる。

一言にして云へば、米國はハワイがあるから我が國に對抗出來るのであり、度の過ぎた野望さへも起すのである。従つて我が國としては、米國の手からハワイを奪つてしまふことが最も直截に彼等の反省を促がし得ることとなり、太平洋の不安も一掃されてしまふことになる。だから我が精銳をすくつて眞珠灣を襲ひ、強攻以てこれを占領すべしと唱へて、適當な上陸地點を眞劍に考へてゐる人もある。この意氣は甚だ多とするものではあるが、我々は遽にこれに組することは出來ないのである。

ハワイは衝くべきである。爲し得ればその緒戦に於て一撃を食はし、完全に彼等の意圖を挫折

してしまひたい。しかしこれは我々の希望であつて、それを實行に移すまでには、いろんな條件に恵まれない限り不可能に近いと云はなければならぬ。

### 遠征するには

我々は既に、ハワイにあるアメリカ艦隊が、日本攻略のために渡洋作戰を行ふことの不可能を検討した。この不可能は、我が艦隊がハワイに向ふ場合にも、同様に作用するのである。多數の陸軍と、多數の輸送船とを従へて、堂々たる陣容を以つてハワイに迫る前に、我が軍は幾多の難關を突破しなければならぬ。この困難を突破してハワイ附近に達し得たとしても、米國の艦隊は我と對等以上の勢力を以て向つて來る上に、彼等は何等足手まとひを連れてゐない。全艦隊の全力を以て當ることが出来る。然るに我が方には多數の船舶が足手纏ひとなつてゐるのみならず、遠征軍の疲勞は相當大きな戰鬥力の開きを作つてゐる。この不利なる態勢を以て、張切つた敵艦隊と戦ふことは、寧ろ冒險ではなくして無謀に近いと云はなければならぬ。

不幸にして我が軍利あらず、一敗地に塗れるやうになつたらどうなるか。それまでは我に強力なる艦隊があつたればこそ米國もその遠征を斷念してゐたのである。その強力なる艦隊が、全然